

独身魔王が婚活を仕掛けてきた！

どいまどい

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

独身魔王が婚期に焦りを感じて勇者に迫るお話。

『よく来たな勇者！子供は何人欲しい!?』の連載版です。

短編版↓<https://syosetu.org/novel/309485/>

カクヨムにも投稿してます。<https://kakuyomu.jp/works/16817330653956426770>

## 目次

第1話	よく来たな勇者！子供は何人欲しい!?	1
第2話	ソロ攻略って基本ムリ	15
第3話	「待て」と言われて待つやつはいない	19
第4話	損して得取れ	25
第5話	逃げるが勝ちだが逃げれるとは言っていない	30
第6話	魔王城から魔王が出るな	35
第7話	準備とは後悔しないためにある	42
第8話	勇者は実質アイドル	48
第9話	ブレークダウン	54
第10話	胃痛薬と頭痛薬は友達さ	60
第11話	決闘申請	68
第12話	決闘説明	75
第13話	決闘終了	80
第14話	真の敗北とは精神的ダメージを伴う	86
第15話	平和とは崩れ去るものと知れ	96
第16話	常識とは非常識である	101
第17話	写真はもう懲り懲り	108
第18話	胃痛パーティー、その1	117
第19話	胃痛パーティー、その2	122
第20話	胃痛パーティー、その3	129
第21話	胃痛パーティー、その4	133
幕間	第17・5話 2度目の決闘はいかにして	142
第22話	ハローワーク、グッバイホリデー	146

## 第1話 よく来たな勇者！子供は何人欲しい!?

俺には使命がある。

勇者として、人類を救うため魔王を倒すこと。

長い長い旅の果て。ついに魔王の下に辿り着いて――

「よく来たな勇者！子供は何人欲しい!？」

耳を疑った。

「ま、魔王め！覚悟しろ!!」

とりあえず言ってみたが締まらない。

混乱が脳内を支配する。

え、子供？どういうことだ???

いや、そんな事より決戦だ！最後の戦いだ！と頭を振り自分を奮起させる。

しかし、当の魔王はまるで生娘の様に赤面でプルプルと震えていた。

え、なにこの反応。

「か、かかかか覚悟しろなんて！一体私をどうするつもりだ!!ああ、分かったぞ！もうそれは足腰立たないくらいドチユドチユ♡つてして『俺たちの子供で騎士団作ろうぜ?』つてするんだろ!!」

「なに言ってるんだお前!？」

やあもー♡と言いながらクネクネとどこか嬉しげに身を振らせる魔王。こちらの声が届いていないのか、口から「子供の名前はく」なんてセリフが延々と垂れ流れている。

唯一の救いは、魔王が人の基準で美しいとされる容姿であったことぐらいだ。

まあ、いくら美人でもこの場面に遭遇すれば百年の恋も冷めるだろうが。

何というか、頭が痛い……いざ人類と魔族の最後の戦だ、と思つて気張つて来たらこのザマだ。

悪夢かこれは……

「勇者よ、よくぞ来てくれた」

「うおお!」

頭を抱えていると、後ろから声をかけられる。

振り向くと、いかにも魔法使いといった様相のローブを纏った老婆たちが居た。

増援か!?!と慌てて剣を構えるも、老婆たちは魔法を撃つような動きは見られない。

……戦闘をしに来たわけじゃないのか?

「驚かせてすまんの。ワシらは魔王様の側近……なぜ魔王様が貴殿と契りたいと考えているのか説明しよう」

契りたいとか言うな。頭痛が増すだろうが。

「まず前提としてじゃが、魔族とは強いものを好む……と言うことは知っておるかの?」

「……まあ、噂程度には」

「うむ。さらに、魔王とは魔族の中で一番強いものになるということはある?」

「いや、それは知らなかったな」

魔王と言っても王とつくならもうちよつと血筋や政治的な意味合いの強いものだと思っていた。

いくら強さを尊ぶ文化があるといっても、最強の魔族が魔王というのはあまりにも脳筋すぎる。

「端的に言おうと、魔族は恋愛に『強さ』も求める。そんな中、最強の魔王様が自分よりも遥かに弱い魔族に惹かれると?」

「あ……」

なんとなく、言わんとすることは分かった。

つまり、魔族最強の魔王にとって魔族は恋愛対象外なのか。

「魔王様は全魔族にとって高嶺の花。武力、知力、魔力……全てにおいて誰も寄せ付けぬ孤高の存在。魔王として完璧と言えよう」

あれが?

今まさに「新婚旅行は〜」とか言つて妄想の世界にトリップしてるあれが高嶺の花か？

「じゃが、それが災いした。魔王様に婚約を申し込む者がおらんかった。『魔王様と自分程度が釣り合うわけがない』と婚約どころかお見合いすら断るものが続出……遂には、婚約者候補すら出来ず仕舞い」

「そんなに力の差があるのか」

「仮に四天王が一斉にかかってきても1分も経たぬ間に倒せる程度には強いのを」

魔王強すぎじゃないか？

四天王といえば、俺の記憶の中で苦戦を強いられた最強格の魔族だ。

即死攻撃は当たり前、街を覆うほどの範囲攻撃に自己蘇生、魔法無効や飛び道具無効なんていうものもあった。

そんな卑怯くさい四天王が総がかりで1分も保たない？強さのバランスがおかしくないか？

「誰も寄せ付けず、誰にも縛られない孤高で完璧な魔王様。そう思われていたが、魔王様も魔の子であった。結婚願望がお持ちであったのじゃ」

まあ、それは見れば分かる。

というか、逆にアレで結婚願望が無い方が怖い。

「婚約者不在の魔王様。そんなものの気にしていないと思つておつたのじゃが……ワシらは聞いてしまったのじゃ。魔王様の嘆きを」

「トイレで泣いている姿が余りにも……っ！」

「思い出すだけで涙が……っ！」

勝手に盛り上がり泣き始める側近たち。

いや、憐れすぎるだろ……というか、なんでトイレで泣いてんだよ……

「それを知った時、ワシらはある決断をしたのじゃ……『魔族に魔王様より強いものが居ないのなら、人類に賭けるしか無い』と」

……ん？『人類に賭けるしか無い』？

「魔王様に相応しい、人類最強の誰かを。即ち貴殿、勇者を待つておつ

たのじや」

「……人類と魔族の争いって」

「うむ、魔王様の伴侶探しじゃ」

「うそだろ……マジかよ……」

やりやがった……婚活のために人類に喧嘩ふっかけたのかよ魔族……

……少し冷静になろう。

そもそも、四天王総掛かりでも倒せないようなヤツに戦って無事の保証は無い。むしろ負ける可能性の方が高いだろう。

と、来れば平和的解決手段として結婚は意外とア——

「んんっ……と、いうわけで勇者！私と結婚して幸せな家庭を築こうじゃな——」

「お断りします」

「」

「魔王様アー!?!」

食い気味に断られたのがよほどショックなのか、彫刻のように固まる魔王。

しまった、つい反射的に断ってしまった。

でもなあ……流石に赤面ではあはあ言って妄想癖があるのはちよつと……いくら美人でもキツイかな……

それに、こつちにも事情というものがある。急に結婚を申し込まれても困る。

「勇者よ、そんなこと言わずに……まずは婚約だけでも！」

「いや、しかしな……まずは婚約だけでも？」

まあ、魔王と婚約して停戦することは魅力的な選択肢ではある。

四天王を相手に無双できる魔王と戦って無事に勝てると思うほどほど愉快的な頭をしていない。無傷でこの争いが終わるなら得でしかないだろう。

だが、そんな心算よりも拒否感が強いというか……はつきり言うのアレと生活するのはキツイ。いくら見た目が良くてもキツイ。

出会って数分しか経っていないが、即断できる程度に魔王は無い。

一緒に生活なんてすれば胃に穴が開くんじゃないか？

「魔王様、お気を確かに!!」

「はっ！魔王である私が光の速さでフラれた気がするが、なんだ夢か……」

現実だよ。

「良いですか魔王様。勇者は魔族ではなく人類、こちらから歩み寄りねば振り向きませぬ」

「うう……だが、歩み寄ると言ってもだな……」

「まずは魔王様のことを知ってもらわねばなりません。自己紹介をして魔王様がどれほど優良物件なのか知ってもらいましょうぞ！」

「じ、自己紹介……入学式……血のホームルーム事件……うっ、頭が」  
不安そうにしながら、視線を右へ左へと慌ただしく泳がせる。今にも吐きそうなほどに顔色も悪い。

……なんだか物騒な言葉が聞こえた気がするが、大丈夫なのか？色んな意味で。

「なあに、この勇者程度なら魔王様の魅力でイチコロですぞ！決して人類にウケのいい顔立ちというわけでもありませんし、恋愛経験も浅いはず！余裕でいけますぞ！」

「そ、そうか……！」

今すぐ人類と魔族の決戦を始めてやろうかババア。



「お茶をお持ちしましたぞ。勇者、紅茶は飲めるかの？」

「ああ」

「じゃあ、ワシは失礼して……」

別室に移動し、お互いに向かい合う様に座る。

婚約云々はともかくとして、和平につながるかも知れない話くらいはするかと席に着いた方がいいが……

「あ、えっと……じ、自己紹介……え？なにからすれば……？」

魔王と視線が合わない。うつむき気味で視線を右往左往させて、脂



汗を滲ませながらなにやらブツブツと言っている。

「魔王様、自己紹介ですよ自己紹介。まずは名前から」

「うっ、あ……ま、魔王プロメアである」

「勇者クリフだ」

「……………」

「気まずい……」

魔王が話を振ってくるものだと思っただけ黙っていても一向に話しかけてこない。

こちらから話題を切り出そうとしても「あ……」「う……」「とうめく様に口をモゴモゴさせ話し出す素振りをするものだから話しかけることもできない。」

「……自分を嫁にすればどのような恩恵があるのか、アピールするのです」

老婆はこの重苦しい状況で何か察したのか、軽くため息を吐き魔王へ耳打ちをする。

「お、恩恵？」

「他の女子よりも優れていると思わせるのです」

「なるほど……」

「では、ワシはこれで……」

なにやらしい助言をもらったのか、「恩恵…アピール……」と呟き考え込む魔王。

それまでの混乱が解消された様で、顔色も良くなってる。

良かった、これでまともに会話ができ——

「勇者！」

「な、なんだ」

「私を嫁にすれば、毎日のように手合わせができるぞ！」

「刑罰か？」

思わず本音が溢れてしまったが、仕方がないだろう。

何が好き好んで最強の魔族と毎日手合わせしなきゃならないんだ……こっちは戦闘狂じゃ無いんだぞ。

「ふっつ、妻としては武器の類を使える様にしておいた方がいいのだ

ろうが、私は生憎武器と相性が悪くてな……魔法と体術なら任せてほしい。四天王程度なら一撃で倒せるからな」

むふー！と誇らしげに胸を張っているが、死刑宣告にしか聞こえない。

もし魔王を嫁にすれば、自宅より最前線の方が安全地帯になりそうだ。

「あと、この身体も自慢なんだ」

「ブフツ！」

そんな急な話の切り出し方に咽せてしまう。

豊かな胸に手を当てて、顔を赤らめる魔王。

思わず身体に視線が行く。

品のある艶やかな銀の髪、玉のように美しい小麦色の肌、鮮血のよ  
うな紅い瞳。改めて見ると、先ほどの奇行を忘れてしまいそうになる  
ほどの美貌だが……そんなこと自分で言うか普通!?

「ゴホツゴホツ……い、いきなり何を……!」

「この身体は最強魔法を打ち払い、万物を破断すると言う魔剣グラム  
の一撃をも受け止めることができる。この拳は世界一硬い鉱石であ  
るアダマンタイトを叩き割り、この脚は山河を踏み砕く。ふふ、自画  
自賛する様で少し恥ずかしいな……」

性能の方がよ!!!

しかも恐ろしいまでの性能だ。夫婦喧嘩をしようものなら土下座  
以外の選択肢を選べないだろう。家庭は魔王に支配され、圧政が敷か  
れる絶望の未来しか見えない。

ダメだ、話を聞けば聞くほど断りたい要素が増えていく……魔王と  
の夫婦生活を思い描くだけで頭痛がする。

もう少しこう、普通のものはないのか? 普通の——

「他は……そうだな。意外かも知れないが、料理が趣味なんだ」

そうそう、そういう普通の……

普通だ!? おお、おお! ようやく俺が理解ができる話が来た!!

「料理か、いい趣味だと思う」

「!そ、そうか……私と結婚すれば……その、料理当番は任せて欲しい」

そうだ、こういうのでいいんだ。こういう普通の日常が――

「毎日火龍の心臓焼きを振る舞おう！」

違う、そうじゃない。

「……火龍？」

「ああ、私はなんでもこだわってしまう癖があつてな……料理も素材から調達する様になっているんだ」

火龍。

Sランク冒険者が5人フルパーティで挑むような最強格の魔物。

近くを飛んだだけで都市に壊滅的な被害を出したという逸話があるほどの怪物だ。

無論、そんな魔物の素材など流通しているわけがない。持つてる人も手放そうとはしないだろうから、金を積んで買えるような代物でも無い。

火龍の素材を手に入れる手段はひとつ。直接狩りに行くことだ。

「水竜やクラーケンも美味しいのだが、毎日調達するとなると火龍が簡単でな……無論、食べたいというなら用意するのもやぶさかではないがな！」

もしかしなくても趣味、料理じゃなくて狩猟じゃないか？

「ご歓談の中失礼します、お茶菓子をお持ちしました」

頭を抱えていると、老婆が入ってきた。

元はと言えばこのババアの入れ知恵のせいだ。一体どんな余計なことを吹き込んだんだ……

「ほほ、魔王様の楽しげな声が部屋の外まで聞こえてきましたぞ。どうやら上手く行ってる様子で」

「ああ！全力でアピールしたからな……これで振り向かないヤツがいるだろうか？いいや、いない！」

この時、魔王と老婆の間には確かな感触、成功の未来が見えていた。しかし、それは違う。

端的に言えば、魔王は勘違いしていた。

人類と魔族の差を。魔族の中でも異端、極端な魔王の感性は常人のそれとはズレている事を。

(これだけ強さをアピールして、振り向かないヤツはいない!!)  
『強さ』は魔族の恋愛に置いて重要な要素である。

しかし、どう転んでもただの一要素にしかすぎない。顔がいい、金がある、頭がいい……そういう要素の一つなのだ。

魔族の誰もが重要視すると言っても、「できれば強ければいいな」程度の認識。魔王の「私より強いやつ以外興味はない」というのは魔族の中でも極めて異端の存在だ。

老婆は魔王の感性のズレを知っていた。

しかし、聡明な魔王様は人類の尺度に合わせてアピールしたと思っ  
込んだ。

そんな違う思いを胸に、自信満々の表情で頷き合う。

「それで……どうだ、勇者?」

「……どうだとは?」

「自分で言うのもなんだが、私ほどの良い嫁というのはいないだろう? さあ、勇者よ! 私とイチャラブの新婚生活を始め——」

「お断りします」

「」

「魔王様アー!?!」

よって、この惨劇は必然である。

絶対に成功すると思っていたのか、またも固まってしまう魔王。

俺としては、なぜアレで成功すると思っていたのか疑問を抱かざるを得ないくらいには酷い内容だった……要約すれば「私は強い!」しか言っていないからな。

「ゆ、勇者よ! ちよつと答えを急ぎすぎではないかの!?! まだお互い分かってないだけじゃ! ほら、だからここは一つ、物は試しと言うじやろ!?!」

「いや、アレはちよつと……」

「わ、わたつ、わた——」

「ん?」

壊れた放送魔道具のように震える声。

ふと目を向けると、死んだ目をした魔王からつう…と涙が静かに頬を伝い流れ落ちていた。

「わたしじゃっ、やっ、やっぱりっ、ダメ……！」

「魔王様アー!!」

引き攣った嗚咽が広い空間に嫌に響く。

そ、そこまで本気で泣かれるとは思わなかったというか……

なんだか悪いことをした気になる。人類の仇敵、魔王相手なのに胸が痛い。

「私、やっぱり魅力なんて無いんだ……思えば、学生時代から友達少なかった気がする……ふへっ、そうか、私じゃダメか……へへっ……」

「魔王様お気を確かに！」

「あれ？　そういえば前のパーティーで『久しぶりに友と会えて嬉しい』って言ったら『私ごときに魔王様から友と呼ばれるなど思いもせませんでした、望外の喜びです』って言われたんだが、遠回しに『お前と友達じゃないけど?』って言われた？　あれ？　人望もない?」

机に顔を伏せ、うわ言の様に呟く魔王の姿は哀愁が漂う。

なんとというか、限界で保つてた人に俺がとどめを刺してしまったような気まじりがある……

というよりも、魔王が色んな意味で可哀想すぎる……魔族で強すぎるとうなるのか……

「知り合いがな、結婚報告や招待状を送ってくるんだ……何年も前から、何通も……後輩も先輩も同僚も部下も親戚も！　みーんな一言挨拶書いてくださいってくるんだ!!　ははっ、私も書いて欲しいなあー!!」

「お勞しや魔王様……」

泣いていると思ったら今度は虚空を見つめて壊れたように笑いだした。

「家族なんて『世継ぎってどうなってるの?』と気軽に傷口を抉ってくるし、『早く孫が見たい』とかさらに塩を塗ってくる!　彼氏なんて生まれてこの方出来たことないのにな!!　ははっ、はははははは!!」

「くっ……！」

魔王の言葉について耐えきれず顔に手を当てて震え出す老婆。

「思えば昔から仕事ばかりしてた気がする……生徒会長とか公務とか休日返上してやってたなあ……ははっ、彼氏ができないわけだ。いや、仕事が恋人というやつか？はは！やった！恋人ができた!!あはははは!!」

連鎖して黒歴史が掘り返されたのか、老婆のフォローも虚しくどんどん沈んでいく魔王。

ブツブツと可哀想なエピソードが魔王の口から無限に出てくる。溜まりに溜まったものが噴き出しているんだろう。

いや、もう限界がすぎる。なんでこうなるまで放っておいたんだ。

「ゆ、勇者！勇者！」

「げっ」

『げっ』とはなんじゃ！ほら、貴殿も魔王様を慰めい！」

「そんなこと言われてもな……」

「貴殿があんな一刀両断するからこうなったんじやろ！泣きやまずぐらい手伝わんか！」

「うぐっ……」

そう言われると、弱い。

魔王相手とは言え、自分の言葉が原因でここまで泣かせてしまった事に少し罪悪感はある。

「だ、だが俺は勇者だぞ？魔王を慰めるのは変じゃないか？」

「魔王様は一度凹むと長いんじゃ……少しでいいから協力しとくれ……」

「はあ……分かった、少しだけだぞ……」

まあ、原因が俺と言ってしまったえばそうだし、泣かせた手前後味も悪い。それに、魔王が泣き止んでくれないとこっちも動きようがない。

……魔王を慰める勇者とかいう謎の構図になっているのはひとまず置いておこう。

「あー、その……そんなに落ち込むな。お前なら大丈夫だと思っぞ」「そんな抽象的な褒め言葉ではなく、もっと具体的に！」

注文増やすんじゃないババア!!

「えっと、そうだな……容姿は整っているから第一印象で嫌われる事も少ないはずだし、魔王という立場で仕事ができるというのは好感を持たれると思うぞー!」

なんとか言葉を尽くして褒めてみるも、嗚咽が止まる様子はない。

「強さを褒めるのが効果的じゃぞ」

「あー、強い!めっちゃすごい!最強!!魔族の中の魔族!!」

「もつと讚える感じで!!」

「さっきから指示ばかり出してないで、お前も慰めろよババア!!」

何でこうなった……

魔王をあやす勇者ってなんだ……

こうして、魔王をあの手この手で慰め続ける。

時にリズムカルに、時に情熱的に、時に囁くように。

途中、「何やってんだろ俺……」と正気を取り戻しかけたが、なんとか泣き止まずことには成功した。

「はあ、はあ……ここまで褒め倒せば、流石に大丈夫だろ……大丈夫だよな?」

どれだけ時間が経ったか分からないが、とりあえずは疲れた……もう宿に帰って寝たい……

これでもう一度褒めろとかもう無理だ。

というか、序盤で褒め言葉なんて尽きて最終的には「すごい!強い!すごい!賢い!」なんてバカ丸出しの言葉しか出てこなかったしな。

「……ねえ」

「ーな、なんだ……」

俯いたまま、少し枯れ気味の声で魔王が呼びかけてくる。

こ、今度はなんだ……褒め言葉はもう無いぞ!ええい、ババアどもは俺を盾にするな!押すな!散れっ!!

「……わたし、かわいい?」

「?ああ、容姿は整っているとは思うが……」

「わたし、すごい?」

「まあ、魔王だし実際すごいだろ」

「わたし、つよい?」

「四天王を一撃で倒せるやつが強くなかったらなんなんだ」

ぽつりぽつりと言葉を紡ぐ魔王。

質問の意図がよく分からないが、嘘をつく意味もないので率直に答えしておく。

すると、机から上がった顔には目には光が戻っており顔色が良い。

しかし、どこか赤らんだ顔をして、恥じらう乙女のような表情でチラチラとこつちを見てくる。

「あ、愛の告白……!」

「は?」

「私の事を好きじゃないと、あんなに褒め言葉なんて出ないはずだ!」

「お、おう……?」

「ならこれはもう告白と同義だろう!? さあ、結婚しよう! 純白のドレス! 幸せな家庭! 安心の老後! 地獄の挨拶ラッシュよさようなら!!」  
ハハハ! と高らかに笑いながら小躍りをする魔王。どこから取り出したのか花びらを撒く老婆たち。

……褒め言葉の中のどれが告白と相当するかは分からないし、何を以って魔王が告白されたと思っているのかも分からない。

もしかして、ババアに嵌められた? いや、あの態度は本気で困った感じだし……よく見ると、側近たちが少しヒソヒソと耳打ちしあつて首を傾げていた。その様子を見るに、魔王の中で何かが繋がって告白と捉えられたか……

……色々と不可解な点はあるが、とりあえず言うべき事は一つ。

「結婚は無理だぞ」

「何を言うんだ、ここままでして責任逃れはダメだぞ♡」

「いや、俺そういう相手がいるから。魔王と結婚はそもそも無理だぞ」  
空気が凍った。

魔王も老婆も時が止まった様にその場から動かない。舞い散る花びらが悲しげに地面に落ちる。



「……え？は？な、何の冗談だ一体？」

「あれ、言ってなかったか？俺、この戦いが終わったら結婚するんだ」  
懐から出した写真には、勇者と可愛らしい少女が寄り添う様に立つ姿が写っていた。

魔王には見覚えがあった。国王の娘、第三王女。自分よりか弱く、蝶よ花よと育てられたお姫様。

「王様には色々と恩もあるし、断るのも難しくてな……ということでお前と結婚はできないんだ。まあ、俺より強いやつなんて人類にいくらでも——」

「勇者、知っているか？」

「うん？」

平坦な、感情を感じない声で魔王が喋る。

「デスペナルティと言って、蘇生魔法を受けた者は強さの階位が下がるんだ」

「ああ、知っているが……」

それがどうした、と言おうとした瞬間、魔王からとてつもない魔力が吹き荒れる。

「ここから逃げられないくらいに蘇生をすれば、私と結婚する他なくなるよな？」

「おつ、おまつ、それはダメだろう!!」

「もう手段は選ばん……なんだって私は魔王だからな！さあ勇者よ——子供は何人欲しい？」

「う、うおおおお!!死んでたまるか!!」

ゆうしゃの（色んな意味で）ひけない たたかいが はじまつた  
!!

## 第2話 ソロ攻略って基本ムリ

勇者と魔王の激突。

それは魔王城を廃墟と化し、辺りに無数のクレーターを作った。一撃ぶつかり合うごとに大気を震わせ、見える範囲に無事な所はない。

お互いに必殺の一撃の応酬。紙一重の戦いに冷や汗が流れる。

しかし、この一撃で勝負を決める!!正々堂々と魔王の下に飛び込んで行き——

「どこに行った勇者!早く出てこいっ!!」

なんて事はなく、俺はこうして堂々と逃げ隠れしている。

いや、俺のステータス構成的に真正面から戦うようなスタイルじゃ無いしな……というか、そもそも何で魔王誅伐に勇者ソロなんだ!無理だろ常識的に考えて!軍を呼べ軍を!!

ぐちぐちと文句を言っているが、俺は俺なりに必死に戦った。

止むことはない爆炎を切り裂き、尽きることのない暴力に抗い、隙間の無い一斉射撃を躲し切った。

離れれば圧倒的魔力による魔法の一斉掃射によりなす術なくぶちのめされ、近づけばカスただけでHPが削りきれぬ攻撃に身を晒すハメになる。

そんな不条理の中飛んで跳ねてなんとかこうして五体満足で生き延びている。生きてるって素晴らしいな……

反撃?はっ、やって見ろよ。飛ぶぞ。あの世に。

「私から逃げられると思うな!捕まえたらもう……夫として色々覚悟しておけっっ!!!!」

ゴゴゴゴゴ……!という爆音と共に、魔王を中心にして暴風が吹き荒れる。

うわあ、流れ出た魔力だけで瓦礫を粉々にしてる……言ってる事もやってる事も怖あ……

救いなのはまだ居場所がバレてないことだ。視認されるまで認識され難くなるスキル、《潜伏》を発動しているおかげで最悪の事態を回避できている。

粉塵に紛れて身を潜められたのは本当に運がよかった……

そもそもの話、俺が魔王に勝てる見込みはない。理由は、魔王へこれと言った有効打がないせいだ。

聖剣で一万回同じ所を殴れば勝てるかもしれないが、一万回殴りきる前に回復魔法でリセットされるのが関の山。

遠距離に強くて近距離が無敵で装甲が硬くて回復できるってなんだよ……それパーティで役割分けてやる事なんだよ……

もう逃げよっかな……勝ち目ないし……

「しかし、逃げると言ってもな……」

そうだ。逃げると言っても、真に逃げ切れる場所はない。

魔王が本気で俺を捕まえに来るならば、世界の果てに逃げたとしても追いついてくるだろう。

それに、魔王が追って来ないとしても問題がある。魔王から逃げたと分かれば、これ幸いと言わんばかりに勇者を目の敵にしているお偉いさん方が猛烈にバッシングして、世論で『腰抜け勇者』とか不名誉を着せられて、全財産没収された上に人類の生存圏から追放される可能性もある。

前門の魔王、後門の人類という所か……あれ、俺人類側だよな？なんで人類に退路断たれてるんだ？

「ちっ、打つ手が無いな……どうするか……」

「なら、ワシの案に乗らんか？」

「うおお!？」

瓦礫の影から魔王を見ていると、背後から急に声をかけられる。

「そ、側近のババア……生きていたのか!？」

「勝手に殺すな。ワシは《テレポト》を使えるからの。同僚を逃してから戻って来たんじゃないよ」

何気なく言っているが、《テレポト》って三大難関魔法の一つだよな？魔法使いが束となつて夜通し儀式すれば使えるかどうかって類の魔法だよな？なんで日常使いしているんだ……

「で、案とはなんだ？まさか負けを認めろと？」

「いんや。立場上それは無理じゃろうて。しかし、お主が勝てないのもまた事実じゃろ」

「ぐっ……」

「だからこそその妥協案じゃ」

「……一応、聞いておこう」

「なあに、そんな怖い顔せんでもええぞい」

妥協案って持ち掛けられるとどうしても疑わしいんだよ。

WIN—WINの関係なんて3：7ぐらいの関係だろ。国のタヌキ共のお陰で身を以て知ってるぞ。

とは言つても、これ以上打開策がないのも事実。多少の損は目を瞑るしかないか……

「お主、魔王様と婚約すれば解決じゃて」

「じゃあ俺は帰る」

「待たんかっ!」

うるせえ!LOSE—WINの関係なんだよ!負けてるんだよそれ!!

あんな戦闘狂で変わり者の魔王と婚約しようものなら、俺のこれらの人生は灰色どころかドブ色に彩られるだろう。胃に穴が開いて回復薬が手放せなくなる未来がありありと見える。

それなら、一回帰つてタヌキ共を説得した方が万倍マシだ!勝算もそっちの方が高いからな!

それに冷静に考えたら、魔王と婚約なんてしたら寝返った判定食らつてどの道バッドエンドなんだよ!

「くっ、止まらんか!後悔するぞ!」

「こんな所いられるか！俺は帰らせてもらう！」

「ええい、こうなれば……！」

ズルズルとマントの裾を掴む老婆を引きずりながら突き進む。

魔王相手にソロは無理、という点をゴリ押せばなんとか説得できるか……？いや、逃げ帰ったんじやなくて偵察に行った体にすれば……

「魔王様アー！勇者はこゴフゴフ!!」

「オイコラババア黙れババアアー!!!」(小声)

魔王へ手を振る老婆の口を手で塞ぎ、瓦礫に身を潜める。

まさかこんな強硬手段を取るとは……！くつ、無理矢理交渉のテーブルに座らされたか……こんなの、冤罪裁判以来の屈辱だ……！

いや、そんな事よりも魔王は……

と思い振り帰ろうとした瞬間、潜んでいた壁のすぐ隣が爆散した。

そして、本能的に理解した。

「みつけた」

あ、これダメなやつだ。

### 第3話 「待て」と言われて待つやつはいない

爆散した壁からパラパラと瓦礫がこぼれ落ちる。

粉塵を切り裂く様に、魔王が一步こちらに詰め寄る。

その姿は、先ほどのダメ女の奇行を端ほど感ぜられない様な絵物語の魔王そのもの。敵対する全てを打ち砕き、絶望を与える者。

コツ、と鳴る靴の音一つで背筋が凍る様な気分だ。

くそつ、こんな事になるならババアなんて放つておいて一目散に出口へ向かうべきだった。

先の魔王との一戦で逃げ回るために準備してきたアイテムは全て使った。しかも、一度隠れる事ができたのは幸運に過ぎない。アイテムがないこの状況じゃ二度目の幸運など望めないだろう。

いや、落ち着け。冷静になれ……!

手はまだある。そうだ、優先順位を誤るな……今後の人生が、今からたった数分の間で決まる。文字通り運命の分かれ道だと言う事だ。

「や、やあ……」機嫌いか——」

直感的に体が動く。

後ろに思いつきり飛ぶと、頭のあった位置に拳が通り過ぎる。

今日ほど鍛えた体に感謝した事はない。もし動いてなければ、頭が潰れた果実のようになっていたに違いないだろう。

ぶわりと突風の後、粉塵が晴れる。そこには右手を振り抜いた姿勢の魔王と、壁があつたはずの大広間が。

わあ、魔王の席がすごく見える。

「どうして……」

声を僅かに震わせながら、少し潤んだ目でこちらを見つめる。

……もしかして、選択肢間違えたか？

「どうして、私と真剣勝負してくれないんだ!!」

「死ぬからだよ!!!」

思わずツツコんでしまった。

いや、無理に決まってるだろふざけんな。

誰が近づけば垂れ流しの魔力で吹っ飛ばされるし、踏ん張れば魔力に当てられて常時ダメージ受けるし、近づかなきゃ延々と魔法で削られる相手にどうやって正々堂々戦えと言うんだ。

そもそも俺は近接戦特化なんだぞ、お前と正々堂々とか死刑宣言と同じだろうが常識的に考えて。

「いや、待て。落ち着け話をしよう。俺たちは会話ができる生命体だろう?」

一瞬沸騰した頭を振って、自分に言い聞かせる様にそう言う。

戦闘で分からせるのは不可能だ。先ほどの一撃で再認識した。なら、俺がするべきは話し合い。テーブルにさえ付けければ勝機はまだある…はず…!!!

「……積もる話もあるだろう。私も聞きたいことが山の様にある」

「!じゃあ……」

「だけど」

喜びも束の間、なんだか嫌な予感がする。

主に、解かれてない拳とかに。

「それは、勇者と戦った後でも遅くはないよな?」

そんなこつたらうと思つたよ!!!



逃げると言うのは案外難しい。

振り切るための走力、ミスをしなないための判断力、虚を突くための想像力……

戦闘以外の全てが相手より上回ってなければ簡単に捕まってしまふこともある。

だからこそ、格上の魔王から逃げるといふのは困難を極める。

後ろなんか見ている余裕はない。

ただ、後ろから聞こえる破壊音が俺に焦燥感を与えてくる。

「くっそ、丁寧に全部破壊しやがって……!」

《潜伏》さえ使えればある程度誤魔化しが効いていただろうが、それをさせないためか通る道全ての壁を丁寧破壊して来る。

大型魔獣でも通ったかの様な跡に口が引き曇る。

AGIは辛うじて勝ってはいるが隔絶した差なんてものではない。その上、魔王には障害物という概念がないらしく、壁をクツキーの様に碎いて進んで来る。

このまま壁を破壊され続けると、最終的に逃げも隠れも出来ずに死ぬ……！なにか、なにか次の一手を……！

「大変そうじゃの」

「ああ、人生で一番忙しい……ってうおお!? バツ、ババア!」

今までどうして気が付かなかったのか、老婆が俺のマントに蟬の様にしがみついていた。

「ど、どうしてここに……」

「どうしても何も、貴殿が急に動くからマントに絡まったんじゃないよ……それよりも、後ろ危ないぞい」

「ん……どおあつ?!」

あぶねえ!! 《魔力探知》で魔法を避けてた事がバレたのか、壁を殴って瓦礫を飛ばして来た。

ジリジリと追い詰められているのが分かる……くそつ、死神結婚の足音が聞こえる気がする……!

「にしても、さすが勇者と言うところじゃの」

「なにが、だよっ!」

『もういいやボコボコにしてから考えよう』モードの魔王様から今の今まで致命傷を受けずに生きている事じゃよ。1時間も逃げるとは……これは四天王ですら成し得なかった偉業じゃぞ」

「なんだっ、そのっ、物騒な形態は!!」

三角飛び、直角カーブ、階段を登ると見せかけて壊して下に!

なんとか翻弄しながら魔王の弾幕を避ける。しかし、このままだと千日手……それも俺の必敗の未来が待つ状況。

どうにかして生き残る術を見つけなければ、マジで終わる! 人類が!



悪いが、人類が魔王に勝てる未来が見えない。

いや、手を組んで連携を完璧にすればなんとか勝てるかもしれないが……あのジジイども、足を引っ張りあつて自滅する気がするんだよなあ……

「勇者勇者」

「なんだ！」

「ワシの案、今一度考えてみんか？」

「ああ!？」

「魔王様との婚約の件じゃよ」

「それは断る！」

もう黙っててくんないかなあこのババア!!今俺の足に人類がかかってるんだよっ!

「一つ聞きたいんじゃないが、どうしてそこまで魔王様との婚姻を嫌がるんじゃない？」

「俺が勇者であいつが魔王だからだ。後はこっちの事情だ！」

いつの間にか第三王女が婚約者になって、断ろうにも王様からの「この婚約に不満はないな？」とのお言葉に平民の俺に首を縦に振る以外の選択肢なんてなかった。

王様に恩もあるし、無碍にできないのもあるが……一番は外堀が完璧に埋められて拒否しようにもできなかつた。

誰がなんの目的で仕組んだんだよ一体……

そんなわけで、魔王とか関係なしに婚約破棄が不可能な状態だ。

「魔王様が嫌いだと言うわけではないんじゃないやな？」

「嫌いもなにも、今日さつき会ったばかりだろうが。……まあ、あの言動はちよつと……いやだいが引いたが……」

仮にも魔族の王だろう……なんであんなつたんだ……

「しかしな。今の状況を打破するには、婚約以外の手が無いと思うのじゃが？」

「……………いやいや、そんなまさか……………」

れ、冷静になれ。落ち着いて考えれば良い。

まず、最悪なのは魔王の手にかかり、無理矢理結婚させられる事だ。

人類と魔族の動きは読めないが、おおよそ良い結末にはならないのは確かだろう。

一番良いのは逃げ切る事だ。しかしそれは難しい。隕石や火龍でも魔王城に突っ込んできてくれなければ状況の打開は不可能に近い。交渉する案はさっきの魔王の発言的にあり得ない。交渉する前に一旦ぶち殺されるのがオチだ。

倒すのは不可能、寝返るのは論外……

婚約？一番無い……とは言いつれぬのが辛い。どの選択肢も地獄な事は変わらないが、魔王と婚約するのは地獄の中でもマシな方だろう。

くそっ、どれだ……俺が取るべき選択肢は、いつたい……！

「《バインド》」

「うおぼあ!？」

急に足が動かなくなり、顔を床に打ち付ける。

見ると、足首には蛍光色に発光しているロープが絡まっていた。

……つて、

「何しやがるババア!」

「ワシ、魔王様の幸せが一番じゃから。あと、逃げ続けられて今以上に城が壊されると修繕が大変じゃし……」

「クソが!!」

普通に会話してたけど、そういえばこいつ敵だったな畜生!!

急いで足に絡まる魔法のロープを切る。《バインド》は魔法でしか切れないが、例外的に魔剣やその類の刀剣類だと切れる仕組みだ。

聖剣で切る……切る……くっそ、ロングソードだから取り回しが面倒くさいー!

「よしっ、これで」

「これで?」

「にげ……」

立ち上がろうとした瞬間、俺の体を影が覆う。

見上げると、そこには空間を歪ませるほどに魔力を漲らせた魔王がいた。

あ、この状況さつきも見たな！  
(絶望)

## 第4話 損して得取れ

蛇に睨まれた蛙……いや、ドラゴンに睨まれたゴブリンとでも言え  
ばいいだろうか。

今の状況を言い表すならば、まさにその様な場面だ。

魔王が目と鼻の先に立つ。振れば拳が当たる距離。

ついさつきも似たような状況があったが、それとは違い鉛のように  
重い殺意が逃走を許さない。

この状況じゃ逃げるのは不可能、倒すのも論外。ならば……説得す  
る。これしかない。

だが、魔王をどう説得する？

魔族に魔王と婚約できるやつがいなかったせいで、人類から結婚相  
手を探そうとしている。その矛先を向けられたのが魔王を倒しに来  
た勇者、即ち俺だ。

……改めて考えると、頭おかしいな魔王。何というか、もう少し方  
法あっただろう。

しかし、愚痴を言う余裕はない。魔王の目的は……結婚……強い相手  
……勇者じゃなくてもいい？

そうだ、勇者じゃなくてもいいんだ。

「魔王、話をおお!!」

ブオン!ともガオンツ!とも聴こえる、人知を超えたパワーで振り  
下ろされた拳が床にめり込む。一切話を聞くそぶりのない様子に思  
わず顔が引き攣る。

くそつたれ!『とりあえずボコスモード』だったか!?ええい、こう  
なれば強行突破だ!

「勝手に話すぞっ!お前に、得の、ある、話つ、だつっ!!」

しゃがんで跳んで回って受け流して聖剣で壁叩いた反動で位置ず  
らして反対側の壁に体打ち付けながら後ろに転がってフィニッシュ  
!

魔王の連打をなんとか躲しきり、死の暴風域から命からがら遠ざか  
る。

はっはっはっ！死んだと思った!!

よくスキルを使わずあの攻撃を避け切れたな……しかし、無傷とはいかない。聖剣は壁に刺さってるし、左腕と右手首を痛めたのか思うように動かない。ただ足が無事なのは運がよかった。

まあ、こうして無事なら話ができる。

「俺より強い人類はいるぞ!!」

そう言うと、次の攻撃体制に入っていた魔王の肩がピクリと動いた。

よし、興味は持った!

でも焦るな……これは言わば魚が針を突いただけ。慎重に、冷静に……

「俺より強い人類なんていくらでもいる。俺はお前と婚約できないが、他のやつを紹介する事はできる!」

俺の作戦はそう、『俺より強いやつを差し出そう作戦』だ。

外道? いやいや、俺はただの婚活の仲介役を買って出ただけ。そう、俺はただ紹介するだけなんだ。紹介した後、結婚するかどうかは本人が決める。本人の意思を尊重するからそこまで外道じゃない。

それに、『勇者と魔王の婚約』より『人類と魔王の婚約』の方が幾分か聞こえは良いからな。

前者だと、余程運が良くなければ争いの火種にしかならない。

勇者の役割は魔王を倒すためにある。その勇者が役割を放棄して討伐対象の魔王と結婚するとか、一周回ってギャグにしか聞こえないだろう。

後者だと、和平のためにくなんて名目をつければ何とでもなる。

そう、これは仕方がない事なんだ。俺が勇者じゃなければこんなことには……!」

「勇者の言いたい事は分かった」

よし、よし! 好感触だ! このまま行けば……!」

「だが、そいつらは結婚適齢期の男なのか?」

「それは勿論……もち、ろん……!」

真っ先に頭に浮かんだのは、騎士団長と魔女と聖女。俺が一度も勝

てた事がないほど強い……女……

い、いやつ、俺より強い男はいるはずだ。

劍聖……はだいぶ前に寿命で亡くなったな。

賢者……は年老いて入院生活。

仙人……は5年前から行方不明。

「いやいやいや、いやいやいやいや……」

嫌な汗が背筋を伝う。

え？俺が知ってる強者、半分女で半分老人なんだが？

思い返せば、同年代の男に負けた覚えが……

い、いやつ！まだ見ぬ強者とかいるはず！山で修行している僧侶とか、海で修行している拳法家とか！

「魔王様、我々の調べでは10代後半から40代前半の男の人類で最も強いのは勇者という結果が出ていますぞ！」

「クソババア……!!!」

なんつータイミングでなんつー事ほざいてんだテメー!!

「ほう、なるほどな……」

「い、いや待て！情報に誤りがある可能性も……」

「なら、誰か紹介できるのか？」

「……………ああ！」

「《看破》……勇者は嘘をついておりますぞい」

畜生、誰が連れてきたんだこのババア!!

「なるほどな……」

指の骨を鳴らしながらゆっくりと近づいてくる魔王。

くつ、万事休すか……逃げる……いや、無駄だ。逃げた所で問題の先延ばしにしかない。最悪なことに、先延ばしにした所で解決する問題でもない。ならば、ここぞなんとかするしかない。

「魔王、俺を倒すと後悔するぞっ!!」

「そういうのは倒した後……いや、結婚式の後に聞こうか！」

魔王を前に息を呑む。しかし、臆してはならない。ここが最後のチャンス。

考えろ、魔王が止まる一言はなんだ。

「結婚しよう」……違う、そんなセリフで止まるわけがない。俺ぶにデスちペナル殺ティしを課たせば容易にできる。

「幸せにする」……無駄だ、魔王は俺を倒してから幸せを掴む予定だからだ。

人類側の許容範囲……魔王の条件……俺を倒すデメリット……デメリット？

そうだ、突くならそこだ。損を自覚させてやればいい。

今にも上げた拳を振り下ろさんとする魔王の前に、早急に頭の中で説得言の言葉訳を構築する。

「耳かっぽじってよく聞けよ魔王……！」

魔王の拳が迫る。

当たれば頭が弾け飛ぶのは間違いない。

それでも避けない。

この言葉が魔王の動きを止めなければ、どの道意味がないからだ。今死ぬか、後で死ぬか、生き延びるか。この3択だ。

それに、これは俺の人生ごと狂わせる呪文。

これは使いたくなかった……本当に使いたくなかったが、どうせ落ちるなら良い地獄だ！

さあ、この呪文で止まってくれよ……！！

「俺を倒せば、幸せな結婚生活は実現しないぞ!!」

渾身の呪文言いつと共に、爆発音が魔王城に響き渡った。



## 第5話 逃げるが勝ちだが逃げれるとは言っていない

ガラガラと音を立てて壁や天井が崩れる。高そうな調度品はどこかに吹き飛び、耐久度の低い木の扉などはへし折れている。

入った泥棒が風の上級魔法でも使ったかのような惨状の中、俺は何事もなく立っていた。

「止まってくれると信じてたぞ……」

目の前数センチ先でピタリと止まった拳。後ろには拳圧だけで吹き飛ばされた城<sup>ゴ</sup>だった物<sup>山</sup>があった。

魔王の右ストレート。その一振りが引き起こした惨劇である。

これ当てられてたら肉片も残らず蘇生なんてできなかつたんじゃないか？俺、VITそんなに高くないぞ。

もしもの事を思うと乾いた笑いしか出てこない。こいつ本当に蘇生する気あったのか……？

「………いうことだ」

「ん？」

「私のイチャラブ新婚生活が叶わないとはどう言うことだ!!」

「うおお!!」

「どうしたらいい、どうしたら私は幸せになれるんだー!!」

「魔王様、魔王様！勇者の首が締まっています！手を離してください！」

「あつ」

「ぐへえ」

魔王が掴んでいた襟を離され、どちやりと力なく地面に横たわる。

超大型ゴーレムの端っこにしがみついている時に回転技をかけられた時と同じ気分だ……視界がチカチカする……吐き気もだ……

「す、すまない……」

「いや、いい……それよりも、説明するから聞け」

落ち着いて話をするために椅子……なんて贅沢なものはどこかに吹き飛んでいるため、ちようど良さげな瓦礫に腰を下ろす。

「簡単に説明するが、まず結論から言うと、俺を倒せば幸せな結婚生活は送れない」

「……そうなのか？」

「そうなんだよ」

理解が追いついていないのか、未だに疑問符を浮かべている魔王。  
「まず、俺を倒した場合どうなると思う？」

「そうだな……蘇生して弱くなってる隙に封印術を応用した部屋でラブラブな性生活……いや、生活を……」

「ぎげんな」

なんつー恐ろしい事考えてんだこいつ。

「ふむ……短期的に見ると人類側は躍起になって攻め込んで来るかと」

「そうなのか？」

「勇者が倒され、囚われた。となると取り返すという大義名分のため予算が降り、軍隊を動かすことができる……それこそ、人類総戦力を動員する可能性すらありますの」

「それは最悪のケースだが、俺の国は軍を出すと思うぞ」

ケチな財務省だが、この事態で金を惜しむほどアホじゃない。

いや、でもどうだろう。勇者の旅の初期装備、使い古しの鉄の剣一本だったしな……さ、流石に大丈夫だろ、うん。脳みそはマトモなはずだ。たぶん。きつと……

「その何が問題なんだ？ 四天王は養生中だが、私が出れば問題ないだろう？」

「ええ……」

冗談……ではないんだろうな。真顔だし。

確かに、魔王とぶつかってまともに戦える人類は一握りだろう。だが……

「確かに、魔王様が出れば万の大軍も羽虫の如く散らせましょう。人類という種族は魔族と比べステータスが貧弱な傾向にあるため、何度侵攻されても容易に跳ね返せましょう」

「ふふん、そうだろう！」

「ですが、人類の脅威は数なのです」

人類は魔族よりも弱い。魔族の一般市民でも、人類の中級冒険者

パーティくらいなら蹴散らせる程度には性能の差がある。

しかし、数は人類の方が何十倍も多い。弱い人類が今まで生き延びてこれたのは、極小数の強者と圧倒的な数のおかげと言っても過言ではないだろう。

「多少多くとも、私なら……」

「ああ、いえ。魔王様が苦戦するなどの心配はしておりませぬ。ただ人類が数に物を言わせた長期戦をしますと、魔王様が前線に出ずっぱりになりますの。少なくとも数年は」

「そんなに!?!」

「そんなにです」

「数年……ねん……」

そして、魔王は何か気付いたのか深刻な顔でワナワナと震え出す。

「前線に年単位で居座る事になると、業務に追われて新婚生活どころじゃなくなるな」

「わ、私の幸セイチャラブ甘々新婚ライフは……」

「まあ、無理だろう」

「ぐうう……!?!」

魔王が苦悶の表情で膝をつく。

そういえば、今日初めてダメージらしいダメージを負ったな……

「俺を倒すのは悪手だとは分かってくれたか?」

「ああ……痛いほどにな……」

「まあ、俺も鬼畜じゃない。解決策ぐらい一緒に考えてやるよ」

「えっ……いい、いいのか?」

「勿論だ。このことは後日また腰を据えて話そう」

「あつ、ああ!よろしく頼む!」

「それじゃあ、またな」

清々しい気分で出口に向かい歩き出す。

しかし、流石に疲れたな……帰ったらひとまず寝ようかな。

「待てい!」

「ぐおお!?!」

マントを思いつきり引つ張られ足を止める。

くそっ、いい感じに丸め込めたと思ったが、作戦を勘付かれたか

……！

「貴殿、うやむやにして逃げるつもりじゃったろ」

「はっはっはっ、いやいやそんなまさか」

「勇者よ、魔王様の条件に合うのは今のところ貴殿だけじゃ。ならば……後は分かるな？」

「分からないし分かりたくないなので帰らせてもらう」

「くっ、強情な……！」

「強情なのはどっちだ……！」

進もうとするが、マントを掴まれていて思う様に進めない。

見ると、両腕や足に強化魔法をかけているようだ。こっちは魔法使えないのに卑怯だと思う。

「だが俺を倒せず捕まえない以上、黙って帰らすしか道がないぞ……！」

「急がなくとも、問題を解決してから帰れば良からう……！魔王様と婚約すればすぐに帰れるぞ？」

「戯言を抜かすな！」

説得を試みるも、どうも帰してくれそうにない。

お互いに引けないせいか、こう着状態が続く。

いつそマントを引きちぎって……畜生マントにも強化魔法が！無駄に小器用な事しやがって!!

「くっ……そもそもの話、俺には婚約者がいる。魔王との婚約は無理だぞ」

「婚約者、ということはまだ結婚してないんじゃないかな？」

「あ？ああ、そうだ」

「婚約者から婚約破棄されれば、勇者はフリーということじゃない？」  
「そうなるな。だが婚約破棄の予定はないぞ？」

何の意図か分からないが、当たり前前のことを聞いてくる。

すると、老婆のマントを掴む手に力が入る。目はギラリと怪しく光り、口元は三日月型に歪んでいる。それはもう、何度も見た

「極上の獲物がかった」瞬間のような顔で……

すごくいやなよかんがする。

「ならば、婚約破棄させれば良いのです。——魔王様、自らの手で」

## 第6話 魔王城から魔王が出るな

「なに言ってるんだお前……」

ババアの意味不明な提案に思わず本音が溢れる。

魔王に婚約破棄させに行く？つまり俺がいる国に来ると？本気で言ってるのかこのババア。

そんな事をすれば、下手するところかの国が地図から消えたり、生態系が破壊されたりするだろうか。

まあなんにせよ、絶対に被害が出る。人類サイドに確実に、致命的な被害が出る。少なくとも俺の胃に穴は開く。

「まあ聞け、これはかなり理に適ったものなのじゃ」「ほう」

「まず、魔王様の伴侶候補は勇者ただ1人じゃ」  
なるほど、変わった意見だな。

絶対に認めない、認めたら負けだ。世界は広いんだからいるはずなんだ、俺より若くて強いやつが……！

「しかし、当の勇者には既に婚約者がいる……貴殿の判断で婚約破棄ができれば良いが、それも難しいと来た」

「まあ、恩だの借りだの身分だのといった問題で無理だな」

「そこで、第三者……つまり魔王様に婚約破棄のため動いてもらう必要があるんじゃない。もちろん、人類側にバレぬよう身分などは隠してもらうかの」

一理はある。

確かに、俺は婚約破棄のために動く事はできない。恐らく姫様も動けないだろう。

貴族や有力者に知れ渡っているわけでは無いが、要所要所の重要人物が知ってしまったている。自分から撤回するにはリスクが大きすぎる。下手に動けば変な噂を流されたり、いつの間にか牢屋の中の可能性もあるからな。

……本当になんで人類側に苦しめられているんだろうか……

まあ、そこで第三者である魔王が動くというのはごく自然な流れだ

ろう。

だが、そうなると不可解な点もある。

「一応聞くが、魔王は魔族の王として来るのか？それとも、一個人として来るのか？」

「個人として、プライベートで行く事になるの」

「だったら魔王が動く必要があるのか？」

「と言うと？」

「俺と姫様の婚約破棄が目的だろう？そうすると、政治的な話し合いで解決する事もできるし、そっちの方が妥当だろう」

「ここまで話が入り組むと、当事者だけの話にはできない。どうしても政治的な話し合いが必要になってくる。」

魔王が人類側に乗り込むリスクを加味すると、公的に記録が残る話し合いの方がいい気もする。

しかし、老婆は首を横に振る。

「それは悪手じゃろう。今回の話はあくまで隠密に、そして迅速に行う必要がある。政治的な解決だと動きが遅すぎるからの」

「遅いと何か問題が？」

「魔王様と勇者が婚約できれば、それは実質的に和平の成立となるじゃろう。しかし、魔族と人類が和平されては困る者というのは一定数いるものじゃ。それが感情か、打算かは知らぬがの」

そう言われると、和平に反対しそうな人が何人か思い浮かぶ。

理由は様々だが、結構な人数が反対するだろうな。

当事者からすれば今すぐ和平して俺に平穏と安寧と休暇をもたらして欲しいが。

「政治的な解決には時間がかかる。そうすると、和平を面白く思わない奴らからの妨害工作が激しくなる。それでもしも被害を出してしまえば、二度と和平が成立しなくなる可能性も高いのう」

一般的には「魔族許せねえ！滅ぼそうぜ！」という意見が割とメジャーだ。情報操作……というより、魔族が人類側に攻め続けているせいだ。

500年前から休戦期間を空けつつ喧嘩を売りに続けている。魔王

を倒してもすぐに次代の魔王が現れるし、人類側は「もういいよ…なんだよコイツら…」とうんざりしている人が多い。

そんな中、和平交渉中に問題なんて起きようものなら後に引けない戦いが幕を上げることになる。

「和平が結べぬ状況になると、魔王様と勇者の婚約ができなくなってしまうからの。そうせぬ為に、婚約破棄は迅速に行わなければならぬいんじゃよ。納得してくれたかの?」

「そういう事なら、まあ……」

理屈は通っている。通ってしまったている。

「魔王との婚約のため」というなんとも言えない目的のためだが、結果的に和平へと繋がっている。

その事自体は悪い事では無い。むしろいい事だし、俺も賛成する。しかし、しかしだ。

魔王が人類の国に来る事は阻止しなくてはならない……絶対に何か問題起こすだろうからな!

「だとしても、魔王が来る意味があるのか?魔王じゃなくとも、側近や四天王の誰かでも良くないか?」

「いや、魔王様が行かないと意味がないんじゃが……」

「どういう事だ?」

「どうもこうも、決闘する張本人が行かねば意味がないじゃろ」  
なんて?

「決闘?」

「うむ」

「誰が?」

「魔王様と勇者の婚約者が」

なるほど、聞き間違いでも思い違いでも無かったようだ。

なるほどなるほど、魔王と姫様が決闘……

「なに言ってるんだお前」

勝ち目ゼロだよ!どう考えても負ける未来しか見えねえよ!!

というかそもそも、和平交渉しに行くんだろうが。魔王と姫様の決闘なんてしてみろ、和平交渉なんて開始した瞬間に決裂するぞ。



「……ああ、そうか。人類にはこの文化は無かったの」

俺の反応にずっと怪訝な表情をしていた老婆が、納得したように手を叩く。

「魔族の習わしで揉め事は決闘で解決するんじゃないよ」

「……正気か？」

多分姫様パーンツてなるぞ。デコピン一発でそうなると思うぞ。

「なに、心配する事はない。魔族の決闘とは殴り合いではなく、単なる勝負。知恵比べや料理勝負など何でも良い」

「ああ、なるほど……てつきり殴り合いかと」

「もちろん、そっちがメジャーじゃがな」

知ってた。

しかし、「最も強いやつが魔王！」などと割とふざけた種族だから、勝負は戦闘しか認めないものと思っていたが……

「人類より比較的にステータスが優れている魔族じゃが、中には当然戦闘が不得意な者もおる訳じゃ。そこで、決闘の公平性を保つため『3本勝負で挑まれた方に内容の決定権があり、次戦は負けた方に決定権がある』という暗黙の了解があるの」

「一応ルールらしいルールはあるんだな」

「まあ、一本勝負だったり挑まれた方が内容を全て決めたりと、細々した部分は個人間で決めるがの」

「念のために聞いておくが、決闘で決まった事を反故したりは……」

「ああ、心配せんでも決闘で決まった事をとやかく言う者はおらんよ。少なくともワシは聞いたことがないの……まあ、魔族はそういう習性とでも思っておいてくれ」

不安は未だに拭えないが、それでもだいぶマシだ。少なくとも姫様がパーンツとなる事態は避けられるだろう。

いや、超絶箱入り娘の姫様を魔王と合わせるのも不安だが……

まあ、そこは魔王の側近達が止めれてくれるはず——

「ああ、そうじゃ。魔族側からは誰も人員を出せぬから、魔王様の世話を頼んだぞ」

……………はい？

「魔王様の世話の注意点なんじゃが……」

「ちよ、ちよつと待て！」

「?どうかしたかの」

「つまり、なんだ?魔王は1人で人類の国に来ると?」

「そうじゃが?」

待つて待つて、なにも理解できてない。

え、来ないの?なんで?魔王1人なの?王なのに???

俺がおかしいのか?魔王つて王様だろ?魔族の中で一番偉いんだろ?なのに1人???

考えれば考えるほど理解できない……

魔王が1人で来る理由も、魔王を勇者に託す理由も、俺が世話をすることになっている理由も……

「……俺が納得できる説明はあるんだな?」

「納得できるかは知らんが、説明はできるぞい」

話をまとめると、

・側近組は政務があり、四天王は養生中で連れて行ける人材がそもそもいない。

・人類との関係性や、魔王様の取り扱いが分かってない者を下手に付けられない。

・今回は隠密行動が必要なため、下手に公言すれば妨害される可能性があるから人材の選出が難しい。

と言ったところだ。

なるほど、理解はできる。そうする必要もあるのも、そうなる理由も。

このままだと事態は悪くなる一方の状況で、今回のこの話は渡りに船だ。婚約は決闘を何とかして勝てばいいし、決闘の可否に関わらず和平に繋がる可能性も高い。上手くいけばだが最高の選択肢ではあ

る。

それでも、魔王を俺が面倒を見るなんて思っではいなかった。

それは覚悟していないぞ……

「お前は魔王が1人で敵陣に乗り込むとか心配じゃないのかよ……」

「魔王様を止められる生命体がいるとでも?」

「……………」

意趣返しで言ってみたが、黙る事しかできない。

魔王なら全てのSランク冒険者に囲まれたとしても生き延びてそうなんだよな……

それに、魔王は火龍<sup>最強種</sup>を食材扱いするやつだった。そりゃ心配するだけ無駄だよな。

「それに、アレを見て止められると?」

「アレ……………」

老婆が指を刺す方を見ると、そこには巨大に蠢くナニカがあった。

よく見ると、それは巨大な荷物を背負った魔王だった。

「え、は?」

「ハアハア…………じ、準備終わったぞ!さあ行こう、今すぐ行こう!」

「ちよっ、おまっ」

魔王は気が昂っているようで、顔をほのかに赤くして鼻息を荒くしていた。

そしてこちらに向かって止まらずに突き進んで来たと思うと、急に手を取られる。なんだと思っただ次の瞬間、フワリと足が地面から離れた。

混乱しているなんとか現状を理解しようとする。

とりあえず、魔王の肩にタオルのように担がれているという事は分かった。

そして、なんで担ぐ必要があつたかなんてバカでも分かる。

こいつ、このまま行く気だ…………!

「ふふ、これは実質的に婚前旅行…………!仲を深めれば、向こうからなんてことも…………!ふふふ、媚薬も勝負下着も防音魔道具も必要な物は全て持ってきた。もしもの時なんていつ来ても問題ない!これで勝つ、

私は人生のウイニングロードを駆け抜けるんだ……！」

「なに言ってるんだてめー!?というか降ろせ！」

よく見ると、背囊からは服や本が大量にはみ出していた。

ああ、こいつ話に参加してないと思っただら荷造りしてたのかよ！

「では、行ってくる！朗報に期待していてくれ！」

「お気をつけて。何かあればすぐに駆けつけますので」

「ま、待て魔王！せめて下るおあつ——」

俺の次の言葉は無かった。

景色が加速する。

疲れた体に朝日が沁みる。

俺は今日、風になった。

## 第7話 準備とは後悔しないためにある

問題。

徹夜で命がけの鬼ごっこをした後、胃袋と三半規管を揺さぶられ続ける人と人はどうなるでしょう？

答え。

「おろろろろろろろろろろ……」

俺は今、草陰に四つん這いになりながら、とんでもない無力感と尊厳の喪失を感じている……

魔王の超高速立体機動は徹夜で疲労困憊の身体では耐えきれなかった。

具体的には、崖や川などを飛び越えたり、狭い間を潜り抜ける時の縦横無尽な動き。担いでいる肩がちょうど腹の柔らかい部分を圧迫し続けていた事。そして最後に急ブレーキが止めとなった。

魔王、もうちよつと運び方を……というか、移動方法がなんで徒歩なんだよ。いや、走った方が速い事は分かるんだがな？もうちよつとな、人道的扱いというか……うん、馬車使おうか！

とりあえずは、もう二度とあの運び方は頼まない。二度とだ。今からだと王都まで少し遠いが、歩いたほうがマシだ……

そして、その諸悪の根源はと言うと。

「うえっ、げほっ……ぐすっ……どうして……」

ギャン泣きしている。

それはもう、己の美貌を投げ捨てるほどのガチ泣きだ。

まあ、魔王城でみせた泣き方に比べれば優しいものだ。嗚咽しているものの、ネガティブになって己の世界に入っただけマシだろう。

それはそうと、お前が原因でこんな目に遭ってるのに介護の一つくらい……いや、やっぱりいい。絶対変なことやらかすだろうからな。それに、今の魔王にそんな余裕はないだろうしな。

「けほっ……はー……魔王、もういいだろう。いや、同情はするがな……」

「ゆ、勇者あ……」

「仕方なかった。というか、ここまで耐えたことが凄かったんだ」

「でっ、でもお……」

「だからまあ、なんだ………いい加減に沼から出ろよ」

「うう……」

泥水を被った半泣きの美女………もとい、魔王が両手いっぱいゴに荷物ミを持ちながら沼から這い出る。

なぜこうなったか。順番に説明すると……

魔王城から飛び出た魔王は、何をトチ狂ったかここまで走って移動していた。

背中に荷物を背負い、肩に俺を担ぎながら。

そして進む道も問題だった。

魔王はなにを思ったか、王都まで文字通り直線で突き進んでいた。つまり、正規の道から外れ、森や川など自然あふれる場所を通ったのだ。

正規の道でない、整備されていない自然のルート。それを魔王は力任せに突き進んだ。

崖を一飛びで登り切り、森を木々の上をトランポリンのように跳ねて通り、湖を沈む前に足を出すことで水上を走り抜ける。

このような無茶苦茶をすればどうなる？そう、ものすごい揺れるのだ。

それはもう、俺の胃はシェイクされ、荷物はバルンバルンと揺れていた。

よく耐えた、本当によく耐えていたのだ。

しかし、何事にも限界がある。

目の前の沼を飛び越えようとしたその時、ブチリと嫌な音を立てて荷物の取っ手が千切れた。

そのまま重力に従い落ちる荷物。

色々と無理矢理詰め込んでいたせいかな、走ってきた振動のせいかな、空中で散乱する中身。

荷物に気を取られて急ブレーキをする魔王。

荷物が次々と沼に沈む。

胃と三半規管に大ダメージを負い限界を悟る俺。

呆然と立ち尽くす魔王。

草陰に飛び込む俺。

沼に飛び込む魔王。

——そうして、今に至る。

「いやまさか、背リュック囊が千切れるとは思わないよな……」

「ほ、本はともかく魔道具は……あつ、ダメ……」

こちらの話を聞く余裕がないのか、カコカコと魔道具を弄る魔王の背中に哀愁を感じる。

魔道具は基本的に高級品だ。それこそ、物によっては国庫と同価値レベルの魔道具もある。

そして、そんな魔道具が複数沼に沈んだ。

他にも宝石が散りばめられたドレス、水晶で作られた小瓶に入っていたポーションらしき物、豪華な装飾が施された本。どれを取っても安物には見えないそれが、全て沼に飲み込まれた。

回収できた物もほぼゴミ同然になったと言える……まあ、この落ち込みようは妥当だろう。

なんて言葉をかけようか……と悩んでいると、スツと魔王が立ち上がる。

「もう行こう」

「い、いいのか？まだ荷物は……」

「いいんだ……もういいんだよ勇者……さあ、行こう」

「あ、ああ」

魔王は少し充血した目をこちらに向ける。まるで全てを悟ったかのような顔で微笑むその姿に、考えていた言葉が抜け落ちる。

「……着替え、あるか？」

「ないな……全部沼の底だろう」

「あー……て、適当な街に行って買おう。うん、それがいい」

「……すまないが、今無一文なんだ。必ず返すから少し貸して欲しい」

「……奢ってやるから、服ぐらいいくらでも」

さき、流石にかける言葉が見つからない……

「ありがとう」と薄く微笑む魔王。彼女の水面のような静謐さに涙を禁じ得ない。

魔王城を自分で半壊させてもピンピンしていたのに、荷物がなくなつてこうなるという事は、つまり城1個分以上の値段は沼に……

沼の方を振り返る。

あれ、やっぱり回収した方がいいんじゃないか……？だが、沼に沈んだ物を回収するのは難しいしな……そうだ。

「こう言うのって魔法とかで何とかならないのか？ほら、物を動かす魔法とかあっただろう？」

「……私は攻撃魔法一辺倒でな、そんな小器用な魔法は習得していないんだ……ははっ、できないの間違いか……」

「そ、そうか……」

「……………」

並びながら無言で歩く。

足音や鳥の鳴き声がいつもよく聞こえる。しかし、清々しさとは真逆に重苦しい空気が流れている。

よし、荷物の話はダメだ。話題を変えよう！

「あー、その……魔王はこっちに來てからの計画って考えているのか？」

「計画？」

「ああ。婚約破棄をすつていたが、具体的にはどうするんだ？」



決闘が云々とかの話は側近の老婆から聞いてはいるが、その他は何も知らないんでな」

「ぐたいてき」

「そもそも、街にはどう入るんだ？魔族とバレたら婚約破棄をするどころか、門番に追い返されるのがオチだろう」

「……ええつとおー……」

「それに、姫様に会わせるのはともかく、お前のことをどう説明するんだ？ある程度今回のシナリオはできているとは思いますが、少し共有してくれなければ困る。下手に問題になって和平も何も無くなるのが一番最悪だからな」

「……そ、それはあー……」

魔王は明後日の方向を向き、手をモジモジと遊ばせる。口をモニョモニョとさせ、いかにも挙動不審な様子だ。

それはまるで、イタズラがバレて怒られそうになっている悪ガキのような態度で……

「……まさか。」

「おい、魔王」

「な、なんだ？」

「お前何も考えずに飛び出ただろ」

「ははは、そんなまさか」

「目を見て言え」

「い、いや。ちよつと寝違えたようだな。首が回りそうにない」

「そうか、じゃあ俺が見てやろう……どうした？今度は反対の首を寝違えたか？」

「い、いやあ……」

ぐるぐると魔王の周りを回るが、目が一向に合わない。

「ええおい。お前、魔族が人類の生存圏に来ること自体滅茶苦茶問題なのに、その上なにも考えずに飛び出してきた魔王とかいるはずがないよな？王都とかいう国の心臓に行くっていうのに、対策や行動を考えてない魔王がいるはずないよな？おいどうなんだ答えるよ！下手すりゃこつちの首が物理的に飛ぶんだよっ!!」

「へ、変身の魔道具はあるから見た目だけは人類になれるぞ！も、問題はそう起きないはずだ！」

「バカ！すごくバカ！婚約破棄の話をするなら、少なくとも王様と姫様には話通さなきゃならないんだよ!!その時点で追い返されたら和平どころか、俺が追放されるなり打首になるわ!!」

「ああ、もう！現場で高度で柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応するっ!!これでいいだろ！」

「いいわけあるか、ただの行き当たりばったりだろバカ！もうちよつと考えてものを言え!!」

「さつきからバカバカと、私は魔族最難関の学園を首席で卒業しているんだぞ！」

「勉強できるだけのバカなんていくらでもいるんだよバカ！現にお前なんも考えてねーじゃねーか!!」

「うぐう……」

このバカ本当にどうしてくれようか……

そんな事を思いながら、どうにかして誤魔化す方法を考えるのだった。

## 第8話 勇者は実質アイドル

魔王と勇者の戦いは熾烈を極めた。

四天王を打倒した勇者と云えど、魔王には勝てないと思わされるほどの強敵だった。

しかし、勇者は諦めない。

彼は人類の希望を背負っている。必ず勝つために戦っている。

それが今日じゃなくてもいい。

勇者は今日勝つ事を諦めた。次に勝つため、敗走を選んだ。

なんとか隙を突き、魔王に捕らえられていた人が持っていた《時止めの宝玉》で魔王を一時と言えど封じた。

しかし、その代償はあまりにも大きく、同時に彼女の記憶も封じられてしまった。

彼女の記憶、ひいては人類の未来を取り戻すため、こうして魔王打倒の準備をしに帰国した。

という嘘シナリオで関所を何とか抜けることができた。

「なんとかなったな……」

「何というか、弱者扱いをされるのは歯痒いな……」

お互い疲れた顔をして道を歩く。

別れる時なんて、関所の兵士が涙を流しながら手をとって来て「どうか頑張ってください、応援してます！」とか言われたりしたからな……説明よりその後の対応の方が疲れたかもしれない。

《変身》の魔道具が無事だったのも良かった。

もしこれが壊れていたら、『魔族に改造させられた上に記憶も無くしてしまった哀れな人類』とかいう無理筋の説得をする羽目になっていたかもしれない。

まあその心配も杞憂で、防水防火防塵防酸……ありとあらゆるものに耐性がある特別性の魔道具らしい。

こんな多機能な魔道具聞いた事ないし、恐らく国宝級……いや、下手したら伝説級……アレが沼の底に沈んでいたら……うん、深く考えるのはやめよう。アレはただの魔道具だ。

「……んー」

「そんなキョロキョロしてどうした？珍しいものでもあったのか？」

「いや、なんだかその……視線が多くないか？」

「そりゃまあ、こんな2人が歩いてたら見てしまうものだろう」

かたや褐色銀髪の美女。作り物かと思わされる美貌に、周囲の男女問わず息を呑む。

かたや仮面の不審者。真昼間の道中にも関わらず舞踏会のような仮面を被り闊歩する様子に、周囲の男女問わず首を傾げる。

1人でも見てしまうのに、どう考えても共通点のなさそうな2人が並んで歩いている。それはもう、注目されて然るべきだろう。

「ところで、何でそんな格好をしているんだ？」

「……顔が売れすぎてるんだよ俺は」

「？」

「要は、顔が割れると人が群がって来てまともに歩けなくなる」

「そんなアイドルみたいな……」

実際、勇者はアイドル的側面がある。

人類の希望、魔王を打ち倒す存在、救世主……まあ、やたらと持ち上げられ持て囃される立場である。

そのため、街に出れば黄色い歓声上がり、商品を買えばそれは在庫が無くなるほどの人気となり、露店では非公式の勇者グッズがズラリと並ぶ。

それが王都のみならず、人類圏おおよそ全てでだ。

まあ、つまりはだ。

「生活の質、割と最悪なんだよなあ……」

勇者はまともな生活なんてできない。少なくとも、変装グッズを常備する程度には。

後悔しても遅いだろうが、もし過去に戻れるとしたら一生騎士のままで居る。

勇者になって良かったこと、給料の高さ以外皆無だからな……  
そんな事を考えていると、魔王はまだ怪訝な顔をしながらキョロキョロと周囲を見渡していた。

「どうした？ そんなに警戒しなくてもちやんと変身はできてるぞ」

「いや、そうじゃなくてな……その、やはり周囲の視線が少し変な気が……」

「そうか？」

「変わったものを見る目というよりも、あり得ないものを見たような……」

そう言われ周りを見渡してみる。確かに好奇からの視線や奇異を見る目というよりも、何か訴える様な、責める様な……

疑問に思いながら魔王に視線を向けて——納得する。

「とりあえず、服買いに行くか」

自分だけ綺麗な格好なのに、隣に全身ドロドロの美女を連れ歩く男がいたらそんな視線も向けるよな。



魔王は《変身》の魔道具で、頭と同じほど大きなツノは消え、尖っていた耳は丸くなり、どこから見ても魔族には見えなかった。

《幻惑》ではなく《変身》のため、あの大きなツノは物理的に存在しない。

そのため、なんの心配もなく人類用の服を着れる事は幸いだった。

「ど、どうだろうか……」

「あー、いいんじゃないか？」

「そつ、そうか。そうか……」

「奥様、大変お似合いですよ！」

「おつ、おおお奥様なんてうへへ……」

白を基調とした、刺繍が入ったワンピース型のドレス。生地も滑らかで、一見するだけで高級品だと分かる。

一応は魔族の王だし、この後王侯貴族と会うとなると下手な格好は

させられない。そのため高級店を選んだが……

「じゃあ今着てるのと、これとこれ……お会計で」

「はい、お会計で58万ゼニーです」

高い。ものすごく高い。

王都市民の平均月収が20万ゼニー。そう考えると、たった数着の服に対する値段では無いと思う。

「カードで」

「かしこまりました」

まあ払えるけど。

世界を救うという仕事は給与だけはいいい。月収が年収みたいな給与だ。

勇者の旅もほとんどが経費で落ちるから、本当にここ数年使う機会が無かった。金は溜まりに溜まっている。おそらく、そこそこの裕福な生活を死ぬまで送れる程度には。

「にしても、綺麗な奥様ですね」

「違います」

「ふふ、ではお付き合いされている方とかですか？」

「ただの知り合いです」

「ただの知り合いに60万ゼニーもする服を贈りませんよ」

普通はそうだろうが、本当に違うからやめてほしい。

「さて……そろそろ行く、ぞ……」

商品を受け取り、振り向く。すると、魔王は先ほどの店員と話していた。いや、あれは……

「とても可憐でお美しい奥様に、さらに魅力を高める特別な商品がございまして」

「そ、それを使えば……」

「ええー！これを使えばどんな倦怠期も一撃で吹き飛び、二人の関係はより強固に……」

魔王のチョロキを見抜いたのか、金払いの良さに目をつけられたのかは分からないが、ここぞとばかりに売り込まれていた。

「奥様には特別に、このお値段で提供させて頂ければと」

「安い、買った!」

「買わん!行くぞ!!」

「ありがとうございます!ございました、またのお越しを」

魔王の手を取り、店を出る。

魔王がいいようにカモられてるんじゃない、そもそもお前無一文だろうが!!!



店を出てしばらく歩いた所、ちょうど良さげな広間に立ち寄った。

中心に噴水があり、周囲にベンチがあって落ち着けそうな場所だ。

「はあ……全く、アレはセールストークだ。無駄に商品を買わされかけてたんだよ」

「わ、分かってる!分かってはいるんだが、その……いつもならこんなあからさまな美辞麗句、聞き慣れているんだが……お、奥様と言われて少し舞い上がりすぎた……すまん……」

「……まあ、こういうのはどこも多い。気をつけろよ」

なんとというか、こう……シユンとされて謝られると、何も言えなくなる。

実害はなかったし、別にいいと言えればいいんだがな。ただ、あまりにもチョロすぎて、いつか『奥様』というワードで高い壺でも買わせるんじゃないかと心配になる。

「そ、それと……そのお……」

「ん?どうかしたか?」

「て、ててってえく……!」

「どうした急に!?!」

魔王が急に壊れた!?

「そ、そろそろ手を……!」

「手?……あ」

言われて気づく。

店を出てからずっと手を握っていた。

「す、すまん……」

「い、いやいいんだ。いいんだが……その、急はビックリするというか……」

モジモジと、いつもの暴力性は鳴りを潜め、乙女な反応を見せる魔王。

手を握っただけだろうが初心うぶか！と言いたいが、こつちにも非があるし、なによりそんな反応されたら反応しづらい……！

「と、とりあえず時間もあるし、飯でも……」

「痴漢の後にナンパ？やるわね、流石だわ」

「うおお!？」

突然の声に背筋が伸びる。

いや、痴漢だのナンパだの不名誉すぎるぞ！いったいだれ、だ……  
「貴方が帰ってきたと報告があつて、こうしてわざわざ出向いてみれば……手を握りあつて楽しそうね、勇者様……?？」

振り向くと、あまりにも見覚えのある少女が絶対零度の視線を向けていた。

そんな視線に俺は、

「ご、ご機嫌麗しゆう、姫様……」

頬を引き攣らせながら、そう応えるのが精一杯だった。



## 第9話 ブレークダウン

魔族の領土と接している王国、グレゴールの第三王女、ディアナ・フォン・グレイズロッド。

貴族特有の鮮やかな金の髪と青い目を持つ、小柄の可憐な少女。年齢にして14。王立魔法学園に所属しており、優秀な成績を収める才女である。

そして何よりも、知る人ぞ知る事実だが、人類の希望とされている勇者の婚約者でもある。

さて、そんな彼女は今――

「じゃあ死刑ね」

究極に苛立っていた。

「姫様、これには事情が……!」

「ふん、なによ!婚約者の私を放っておいて、他の女にうつつを抜かすなんて良い度胸ね!」

「いや違うんです。本当に違うんです……!」

「言い訳なんて聞きたくないわ!王族であるこの私をコケにしたことを後悔しながら腹を切りなさい!」

「腹をですか!?!」

あの後、広間から王城の一室に通されると、床に正座させられた。なんとか誤解を解こうと試みるも、この様に取り付く島もない。

姫様は何事にも動じず、冷静で頭の切れる才女……なんて噂も聞かぬが、どうも信じられない。

無茶苦茶ワガママを言うし、思うようにならないとキレるし、猫よりも気分屋。それが俺の知る姫様だ。

もし俺だけにそんな態度だとすると、やはり嫌われているんだろう。う。

だが、一体誰が姫様が嫌っている俺なんかを婚約者に仕立て上げた

んだらうか。嫌がらせにしては手が込み過ぎているしな……学園で大貴族に何か恨みでも買ったのだらうか……？

「痴漢にナンパ……現行犯はこれだけだけど、他にも余罪はありそうね。勇者の名誉のため、表沙汰にはしないから安心しなさい」

「誤解なんです……」

「じゃあ、どうしてあの女は赤面でプルプル震えてるの？」

「さあ……」

『さあ』じゃないでしょ、『さあ』じゃ！羞恥で死にそうな顔つて言うのよあれは！」

ちらりと後ろにいる魔王に目を向ける。広間からずっと上の空だ。

時折「これは既成事実……？責任問題……？」なんてとぼけたことを抜かして、今の今まで正気を取り戻してない。

くつ、魔王に誤解を解いてもらう事が一番手っ取り早い解決方法だったのだが……

仕方がない、無い物ねだりはできない。

こうなったら、事情を全て話す……こいつが魔王とバラすか？いや、この混沌とした状況で話せる事じゃないな……それに、一応説得のためのシナリオは練っている。それを放棄するのは危険だ。

ここはひとまず、姫様の怒りを鎮めよう。

「姫様」

「なによ、言い訳は聞かないわよ」

完全にヘソを曲げてしまった様で、口をへの字にする姫様。

「すみませんでした」

「……なんで謝ってるのよ」

「姫様の気持ちを考えず、迂闊な行動をしてしまった事にです」

姫様の機嫌を直すには、こうして謝る他ない。

こうして怒っている理由はおそらく、王族にも関わらず舐められたと思ひ、プライドを傷付けられたからだろう。

多くの貴族を見て分かったが、貴族はプライドが高い。

無礼や無知に関してはそのままで怒らないが、少しでも舐められれば烈火の如くキレル。それはもう、平民に寄り添う穏健派と知られる貴

族でも滅茶苦茶キレる。

そんなキレている人に対して正論は無意味。説得はできない。だからこうして頭を下げる他ない。

「……貴方に頭を下げられても嬉しくないわよ」

「姫様……」

しかしやはりと言うべきか、謝って済みそうにない。

一度貴族のプライドを傷つけると、なかなか許してもらえず面倒くさい事になる。年単位で謝罪巡りなんて話もよく聞くほどだ。

こうして頭を下げる、というのも全くの無駄ではないにしろ、焼け石に水なのは確かだろう。

だが、俺には秘策がある。

「……やはり、姫様はお優しいですね」

「なあっ……!」

「色々とお忙しいはずなのに、この国に帰ってきていの一番に駆けつけてくれました」

「お、王族の務めよ!勇者を蔑ろにできないでしょ!」

「魔王討伐の失敗を責めずに、こうして誰もいない部屋に通してくれました」

「さ、最初から期待していないだけよ!次こそは倒してもらわないと困るわねっ!」

「姫様のそう言うところ、自分は好ましく感じていますよ」

「っっ!!」

顔を赤くして腕をブンブンと振る姫様。

少し前に知ったのだが、姫様は褒められる事に慣れてないらしい。こうして褒め殺しにすれば、大体の状況は切り抜けられる。

「ふ、ふんーそんなこと言っただって許してあげないんだからっ!!」

しかし、今回は簡単にはいかない様だ。

先ほどよりも軟化したがる、相変わらず怒っている。

さて……万策尽きた。どうしよう。

「…………約束も忘れたアンタなんか…………」

「約束…………？」

ボソリと呟いた姫様の言葉に首を傾げる。

約束、約束…………

姫様と何か約束したか？

王族との約束（道）を早々忘れるはずが…………あつ。

「もしかして、『姫様』と呼んでいる事がご不満でしたか？」

「…………ふん！」

「あの、それは2人きりの時だけとのお約束では…………」

「…………約束は『小うるさい貴族や、事情を知らない者の耳に入らない所では名前呼びにする』…………そのはずよね？」

「あ…………」

言われて思い出す。

姫様は何かと名前を呼ばせたがる。しかし、勇者と言えど平民。身分の差は大きい。

そのため、2人きりの時だけ…………と約束したのだが、姫様と2人きりになる機会なんて無かったので完全に忘れていた。

「この度は誠に申し訳ありませんでした、ディアナ様」

「…………呼び捨て」

「はい？」

『様』なんてつけないで。前にも言ったでしょ」

初めて言われましたけど。

「いや、いくらなんでも身分の差が…………」

「私が良いと言っているの！それとも何？私のお願いが聞けないのっ！」

…………この事が勇者を目の敵にしている貴族の耳にでも入ったら面倒になるな…………

しかし、今は姫様が第一…………逆らうのは得策じゃないし、そもそも逆らえない。

「…………ディアナ」

「…………ん」

「この度は申し訳ありませんでした。許してもらえませんか？」

「……次はないから」

「はは、気を付けます」

ほす、と頭の上に手を置かれる。

年下に頭を撫でられている様で少し恥ずかしい……まあ、処刑されるよりもマシだし、誰の目もないしいいk「あああああああ!!!」……いたな、人。

「脳がつ！脳が破壊される……！」

あまりの音量に思わず振り向くと、そこにはなんとも名状し難い、壮絶な表情で頭を抱える魔王がいた。

「えっと、何かの病気？記憶喪失とは聞いてるけど……」

「さあ……頭の病気じゃないですかね」

「医師団呼んだほうがいいのかしら……」

「必要ないと思いますよ」

頭を抱えて呻く珍<sup>魔王</sup>生物を見てオロオロとする姫様。

そうだよな、この反応が普通だよな……

俺はもう、ファーストコンタクトが「子供は何人欲しい？」とかいうトチ狂ったものだったし、常に妄言は吐くし常識ないから慣れてしまったよ……

「おい貴様ア！」

「きさま!?!ちよつと、私王族よ!?!」

「私の前でイチャイチャと……!これで勝ったと思うなよ!!」

「何に!?!」

「おいおい、流石に落ち着けて……」

「穏便に話し合いから始めようと思ったが、もういい！」

魔王はソファの上に立つと、上から姫様に指を刺してこう言った。

「貴様に決闘を申し込む!!」

## 第10話 胃痛薬と頭痛薬は友達さ

「決闘？え、なんで？」

「ビシリ！と指を指された姫様は、困惑した様子でそう言った。

「ねえクリフ、私王族よね？なんで平民から決闘を挑まれているの……？」

首を傾げながら、しきりに俺の裾を引っ張る姫様。

しかし、そんな姫様に返事ができないほど俺は焦っていた。

——決闘を申し込むとか、練ったシナリオを忘れているのでは？

やばい、尋常じゃなくやばい。やばい以外の言葉が出てこないレベルでやばい。

描いていたシナリオでは、「記憶喪失している上、魔王に囚われていた意味があるはず。ケアと身の安全のため、彼女を王城に住まわせてください」と王様を説得し、言いくるめ王城で姫様たちと友好関係を築いてもらう予定だった。

慎重に、現実性を重視する……そのはずだった。

計画は魔王の宣戦布告で早くも崩れ去ろうとしている。

もし、今ここで魔王の事がバレたでしょう。下手をしなくても衛兵を呼ばれかねない。すると魔王を手引きした裏切り者として追放、もしくは囚われの身に。

正直に「魔王が俺に惚れて婚約者になりたいそうです」なんて言ってみろ。魔王を追い返したとしても、洗脳でも受けたと思われる一生囚われの身に。

一番良いのは、魔王と姫様達がある程度信頼関係が築けてから魔王とバラす事だ。少し時間はかかるが、信頼関係を築いて「魔王は人を襲わない」という認識が刷り込まれれば受け入れられる可能性が高くなる。

そう、可能性だ。

例えば、親友や恋人が魔族だったとして、それを受け入れられる人

類は少ない。それほどまでに人類は魔族に悪印象を抱いている。

つまり、どれだけ好印象を抱かせても、魔王である事をバラすのは必ずリスクを伴う。俺の追放や投獄、そして人類の滅亡というリスクが。

そのリスクを鑑みると、慎重すぎるほどでちょうど良い。失敗はできないからだ。

しかし、この状況で魔王を黙らせて自然にフェードアウトする……なんて事は不可能。

主に魔王が本気で踏みとどまろうとすると、いくら聖剣で殴ったとしても直立不動でいることができるからだ。

前の様に手を引っ張れば……いや、あれは不意打ちだからこそ混乱したのだろう、今の状態の魔王には無駄だろう。短い付き合いだが分かる、コイツは基本的に話を聞かないタイプだ。

くっ、俺は平穩に生きたいだけだというのに、世界が試練を与えてくる……！

この状況を他人に……しかも魔王の判断に委ねられているという事に胃がキリキリとする。

魔王、分かってくれ。てか分かるよな！ここで魔王とバレると大変な事くらい……！

「当代魔王、プロメア・マオウ・アーデルハウトの名の下に、貴様に決闘を申し込む!!」

……あつ、おわった。

「魔王と姫、種族は違えど同じ王族。これで立場の問題はないな！さあ、正々堂々と勝負だ!!」

キリキリと痛む胃と頭を押さえる。

最悪だ……数ある選択肢の中で最悪に近い回答を出したぞこいつ。シナリオどころか、説得に必要な土台そのものをぶち壊しやがった。



どうする……いや、これは……どうしようもない、か……  
そう諦めかけていたその時。

「マオウ？え、何言ってるの？魔王がこんな所にいるわけないじゃない。あつ、もしかして記憶喪失の影響で……」

……そうか。

俺はコイツが魔王だと知っているが、姫様は魔王だと知らない。なら、いくら魔王と名乗っても冗談の類だと思おうのが自然……！

いける、まだ誤魔化せる……！

「そうなんですよ姫様。彼女は少し頭の方が……」

「む、すまない。人の身に変身していたな……よつと」

「は？」

あまりにも自然に、手首のブレスレット……変身の魔道具を外す魔王。

すると、先ほどまで無かったもの。大きなツノ、尖った耳という人には無いものが生える。

「どうだ、立派なツノだろう？」

ポカンとする俺たちを置き去りに、謎に胸を張る魔王。

「これで魔族である事は証明できたはずだ。私の前でイチャついた報い……じゃない。誇りを賭けて勝負だ！」

……いやいや、いやいやいや。

え、何してんの？本当に何してくれてんの!?

「ちよ、お前何してんだ!?!慎重に行くって言っただろ!?!」

「え?……あつ」

『あつ』じゃねーよバカ!」

「い、いや、その……すまん!」

「謝んなせめて言い訳をしろお!!」

「ね、ねえ!アレ本物?本物よね!?!魔王って魔王ってことよね!?!」

「えーつと……わ、私は魔王じゃないぞ!!それはそうと、勇者に引つ付きすぎじゃないか!?!羨ま……こほん、淑女なら少し離れるべきじゃない」

いか!？」

「お前ちよつと黙つててくんないかなあ!？」

「どういふことなの!? ねえ、クリフ、これどういふことなの!!？」

右と左の腕をそれぞれ掴まれ、されるがままにされる。

あー、もう終わりだ! 全部終わり!

逃亡生活ってどんなのかなー!! 楽しみだなー畜生!!



「なるほど、なるほどね……」

あの後、姫様はなぜか人は呼ばなかった。

一生逃亡生活かと覚悟を決めていたが、姫様の様子を見ると、特段騒ぎ立てて事を荒立てようとはしていないかった。

しかし、最初に練っていた計画は全て台無し。全てをあけすけに話すように詰められた。

普通、魔王が目の前にいたら即刻通報するのが常識のはず……事情を話してはい終わり、とはいかないのだが……

もしかして、貴族はそこらの常識が違うのか? 王族だけの何か決まり事があるとか……

詳しい事は分からないが、一旦は助かった……と見るべきか。

「魔王が貴方に惚れて、結婚したいけど私という婚約者がいるからそれができない。だから婚約破棄をさせるためにここに来た……なるほど。うん、事情は分かったわ」

「分かったんですか」

「そこまでは辛うじて理解できるわ。でも……決闘? 私か? なんて???」

「魔族の文化ではな、こういうお互いが引けない場合では決闘で決めるという習わしがあつてだな……」

「私人類なんだけど」

まあ、その反応が妥当だろう。

「決闘で白黒はつきりさせる」という文化が人類にないわけではない。

それでも、王侯貴族が自らの手で決着をつける事はない。

貴族の決闘と言えば、お互いに代理人を立てるのが基本だ。財力やコネクションを競い、より優秀な者を獲得することである。

「決闘はしないわ、勇者を婚約者にするのは諦めなさい」

「なっ……」

決闘を断られるとは思わなかったのか、絶句する魔王。

当たり前の話だが、魔族の価値観が無い上、姫様が決闘を受ける理由がない。

魔王との命のやり取りという、極限の状態だったから気付かなかったが、姫様が決闘を受けるとは限らないのだ。

「話を聞く限り、強ければ誰でもいいんでしょ？代わりと言ってはなんだけど、私が何人かいい感じの人を見繕ってあげるから」

「だ、だが魔王軍の調べでは、婚約者候補となるのは勇者以外居ないはずなのだが……」

「魔王軍がどれだけ調べてるかは知らないけど、普通にいるでしょ。そもそも勇者の選定って一番強い人じゃないもの」

すでに姫様の中では解決の算段が付いているのか、椅子に深く腰をかけて淡々とした様子で話す。

「魔族がどこから攻めてくるか分からない以上、守りを固めるのが基本でしょう？勇者はそういう守りの任に着かなくても良い人の中で上位層の強さの人が着く役職よ」

「ゆ、勇者の同年代に勇者以上の実力者はいないはず……」

「それって騎士団の中だけでしょ？冒険者とか、他国とか見れば勇者より強い人なんて山のように……は行かなくても、十分選べる程度にはいるわよ」

俺自身「ちよつと勇者にならない？給料いいよ」と誘われたから乗っただけで、軽い試験と面接があつた程度だった。そのため、勇者の細かい規定は知らなかったが……なんというか、思ったより夢がないというか……

少しだけ「俺にも秘められた力が……」なんて思っていただけに少し肩透かしを食らった気分だ。

「じゃあ、それでいいわね？細かい話は後にしましょ。クリフも疲れ  
てるでしょ？今日は休みなさい」

予想外の優しさに胸を打たれる。

それ以上に、話の着地点を俺の想像を遥かに超えた最良のものにし  
てくれた事に感動すら覚える。

たった数分の間に俺を魔王の婚約者候補から降ろし、絶対何かやら  
かす決闘を回避し、魔王が暴れないように対策まで打ち出した。

冷静に考えられる場面じゃ無かったとしても、ここまで綺麗に面倒  
事を処理してくれるとは……！

これが王族の力か……傍若無人唯我独尊姫なんて思ってたすみま  
せんでした。

「代わりに、明日は少し付き合いなさいよね」

「ええと、何か用事ですか？できれば明日は報告書などまとめた  
いですか……」

「報告書なんて後でもできるでしょ！とりあえず、明日は開けときな  
さいよね！」

「はい……」

やっぱり傍若無人なのは間違ってたないのかも知れない。

「……………のか」

「ん？どうかしたか魔王？」

「逃げるのか？」

少し明日が憂鬱だと思いつつながら、部屋から出ようとしていたら、魔  
王が仁王立ちのまま話し出した。

「は？逃げる？」

「ああ、いやいい。勝てない勝負はしないというのは至極当然、負ける  
とわかる勝負に挑むことが美德とは言わない」

煽る。

「いや、そういうことじゃ……」

「決闘と言っても力比べじゃないと説明したが……ああ、自分で勝負  
をする機会がないお姫様には厳しいだろう」

煽る。

「なにを言つて……」

「それに！身長もバストサイズもツノの綺麗さも私の方が上だ!!勇者は私の胸をガン見していたぞ!!」

「おい待てコラ」

「これはもう、実質的に私の勝ちだな!!」

ガン見はしてないだろうが！

いや、確かにふと胸に目がいつてしまった時もあった！それは認める、認めるが……誇張表現もいいところだぞ!?

「姫様、奴は頭がおかしいのです。話半分で聞いていれば………姫様?」

相変わらず煽り続ける魔王から姫様を引き離そうとする。

しかし、姫様は少しうつむきながら、拳を握りしめて動こうとしない。

あつ、もしかしてあの煽りが舐められて判定に引っかけた……

「……………」

「ひ、姫様?とりあえず部屋から……」

「クリフ」

「はいっ!」

「胸は見たの?」

「え、いや、その……」

「見たかと聞いているの」

「すみません、少し目が行きましたがガン見はしてません!!」

怖いんだが!?

瞳孔開いたまま、目と目を合わせられるのすごく怖いんだが!?

姫様は魔王と比べてその……スレンダーな見た目をしている。その事を気にしていた……?いや、そんなのは聞いたことがないし……

俺が胸を見ていた事が気に食わなかった?うん、婚約者がいるのに他の人に目移りした事に気を触ったとか……そういうことだろう。あれ?じゃあ姫様が怒ってる原因って俺では……??

「ふうん……そう」

そう言うと、視線を魔王に向ける姫様。

「決闘よ……グレゴール王国第三王女、ディアナ・フォン・グレイズ  
ロッドの名の下に決闘を受けるわ!!」

「姫様!?!ちよ、何を言っ……!」

「ボコボコにしてあげるから覚悟しなさい!」

そう高らかに告げる姫様。良い笑顔の魔王。

その2人を見ると、胃と頭がまた痛んでくるのだった。

## 第11話 決闘申請

翌日。

俺は止まない胃痛に苛まれながら廊下を歩いていった。

え？報告書？そんなの書いてる場合じゃない。

世界の滅亡とか姫様の安否とか俺の貞操とか、色々賭け皿に乗せたらいけないものに乗せた決闘が幕を開けるせいだ。

また胃が痛くなってきた気がする……

憂鬱だと思いながら、目的の部屋に着く。

……何で俺がこんな事を。とは思うが、この仕事を無関係の者にさせるわけにも行かない。

「おい、起きてるか？おい」

コンコンコン、と扉をノックしながら呼びかける。

しかし、部屋からは反応がない。

「おい、おい？起きろ、時間だぞー」

コンコンコンコンコン、とノックを続ける。

反応はない。

「……………」

ココココココココ……！

とノックを続けていると、部屋からドタン！ボタン！と大きな音がした。

すると、数秒も経たない間に扉がゆっくりと開く。

「なにい、うるさあい……………」

寝巻き姿で寝癖が跳ねている、正に今起きた状態の魔王が出てきた。

しかも、完全に意識が覚醒していないのか目は開いておらず、滑舌も回っていない。

「モーニングコールだ」

「んあ……………もう、あさ……………」

「寝るなー、起きろー」

朝に弱いのか、なんと扉の縁に身を寄せたまま寝始める魔王。

手を叩いたり揺さぶって何とか起こすも、まだ寝ぼけているのかトロンとした目をしている。

「起きたか？そろそろ時間……」

「……おはようのちゅーは……？」

よし、水風呂に叩き込もう。



「朝からひどい目にあった……」

「お前の妄言の方が100倍酷かったぞ」

寝ぼけていた魔王を見事に水風呂に叩き込むことができた。

イラツとして衝動的にやったが、後悔していない。

こんな目に合わされているんだし、少しくらい反撃してもバチは当たらないはずだ。

……まあ、水風呂に叩き込むのはムカついたとしても少しやりすぎたかな……

「み、未婚なのに肌を見られた……これはせ、責任を……！」

「透けないタイプの服だっただろうがふざけんな」

水風呂でもよかったかも知れない。

「全く、こんなに朝が弱いとは……なんだ、あまり寝付けなかったか？」

「あー…いや、その恥ずかしい話なのだが……朝に弱くてな。昔から婆や達に世話をしてもらってたんだ」

本当に恥ずかしそうに、少し眉を下げながらそう答える。

そう言えば、側近のババアも「魔王様の世話の仕方」とかなんとか言っていた気がする……聞く前に連れ去られたから聞けなかったけど。

「朝起きると手を引かれて洗面台に連れて行ってもらって、用意された洗面器で顔を洗って、朝食を口まで運んでもらってたよ」

「世話のレベルが予想以上なんだが」



世話というか介護では？

というか、朝だけでこれとは……他にも世話しないといけない事が何かあるのかな……ないと良いなあ……

「で、朝から一体どうしたんだ？」

「姫様がお呼びなんだよ」

「と言うことは……」

「ああ、今から決闘だとさ」

そう言うのと、途端にワクワクした顔をする魔王。

「ふふ……ようやくだ……さあ、今から行く、早く行く！」

パタパタと駆け足気味で俺の周りをうろつく魔王。

よほど待ちきれないのか、少し進んでは俺の下にを繰り返す。

そんな魔王に言うことは一つ。

「廊下を走るな」

「あ、はい」

魔王に与えられた部屋は、客室の中でも離れた場所に作られた人気が少ない場所だ。

しかし、ここは王城。他の王侯貴族も顔を出し、騎士や従者も歩いている。どこで誰の目があるか分からない以上、悪目立ちする行為は控えるべきだろう。

……魔王だとバレた瞬間に色々と終わるから、本当に悪目立ちするのはやめてほしい。

「それで、結局何をするんだ？」

「さあ、姫様と呼んでこいとしか聞いてなくてな……」

なにやら自信がある様子だったが……魔王に勝てる事、と考えるとあまり思いつかない。

姫様の事をあまり知らないこともあるが、それ以上に魔王が規格外な存在だからだ。

一度魔王の本気を見たから言える。あれが負ける様を想像できない。

いや、まあ切に魔王には負けて欲しいが。俺の想像が乏しかったと思いたい。

「まあ、直接本人に聞けば分かる」

そう言い、一際大きな扉に手をかける。

そこは広い石畳の空間。壁にはずらりと武器が並んであり、真ん中には広めの円状に少し段差のある場所が。それはまるで……

「闘技場……?」

「いいえ、違います!……ここは第一修練場……普段は騎士が訓練する場所なのです!」

姫様のものでない、澆刺とした声にギョツとする。

声の方を向くと、長い金髪を後ろにまとめ上げている背の高い美女。しかし、その顔には似つかないゴツい全身鎧を纏っている。

その姿を見て、思わず声を上げてしまう。

「き、騎士団長? なぜここ!——ぶおお!」

「おお、勇者じゃないですか! 久しいですね、1年ぶりですか!」

騎士団長はそう言いながら、俺の頭を胸に押しつけて撫で回す。そう、この人は生粋のハグ魔なのだ。気に入った人は誰彼構わずハグしたがる。

美人に胸に抱き寄せられるのは嬉しい……何も知らない人ならそう思うのだろう。しかし、これは地獄なのだ。

騎士団長はほとんどの場合鎧を着ている。そのため、胸に抱き寄せられると自然と頭を金属に叩きつけられる。さらに、いくらもがこうと高いSTRが逃亡を許さない。もがけばもがくほど、鎧に押さえつけられる。すり潰される林檎の気持ち味が味わえるのだ。

つまり、騎士団長のハグは死ぬほど痛いのだ。

「うぐぐ……は、はなして……!」

しまった……いつもなら声を聞いた瞬間身構えて避ける事もできたのに、勘が鈍ったか……!

「ははは! 帰ってきてきたなら教えてくれれば……!」

「ええい、勇者から離れる!!」

「うぶっ!」

「うわっと」

このままハゲるまで撫で回されるんじゃないかと思っていた所、魔王が無理矢理に騎士団長を引き剥がす。

「貴様、一体何者だ!!」

「ええと、はじめましてですよね? 私、グレゴール王国騎士団長の……」

「そういう肩書きはいい!!」

「ええっ!？」

「いきなり抱きつくなんて、そんな……! 貴様、勇者の何だ!!」

魔王は威嚇するように騎士団長を睨みつける。まるで財宝に手を出された竜のような圧力を出して。

「うーん、勇者と私の関係性ですか……」

しかし、騎士団長はそれを感じないのか、感じた上で無視しているのか飄々としていた。

「上司と部下ですかね?」

「ジョウシトブカ!?!じ、人類は上司が部下に抱きつく習慣でもあるのか!？」

「ないわよ! 人類を変態みたいに言わないでちょうだい!」

失敬な! と言わんばかりに大声で否定する姫様。

そりゃ、人類の代表が騎士団長だとちよつと……良くも悪くも規格外な人だからなあ……

「それに、アンタも勇者を離しなさい! いつまで胸に押しさえつけてるのよ!」

「え? うわわわわわ!？」

「ぶはあ! ぜえ、ぜえ……し、死ぬかと思った……!」

勇者の死因が魔王の胸で窒息死とか、末代までの恥になるところだった。

俺の貧弱なSTRは騎士団長にも魔王にも意味をなさなかった。いくらタツプしたところで気付かないし、本当に死ぬかと思った……筋肉、もうちよつと付けようかな……

「わわわわわわ……!」

「だ、大丈夫ですか!？」

「叩けば治ると思うわよ」

「本当ですか? えいっ!」

「ぶおあ!?! ……はっ! わ、私は一体何を……」

「あ、治りました!」

息を整えていると、視界の端で騎士団長のビンタが魔王に炸裂していた。

ビダアン!! と首がもげそうなビンタを繰り返す騎士団長も騎士団長だが、それを受けてほぼノーダメージの魔王も魔王だ。なんなのあの人外ズ……

「クリフ、無事かしら?」

「え、ええ。なんとか……」

「ねえ、一つ聞きたいんだけど」

「?なんででしょうか」

「やっぱり胸がいいの?」

「誤解です、あれは事故です!」

「柔らかかった?」

「死にかけてそれどころじゃなかったですよ本当に……」

「ふうん……」

ジト目で俺を見てくるが、実際楽しむ余裕なんてものはない。

遊園地などで火事が起これば楽しんでる余裕がないように、死が差し迫ってる状況では生存以外に意識がいかないものだ。

当然、胸で窒息する状況でも同じだ。どれだけ暴れてももがいてもビクともしないとか、本当に死を覚悟したよ……

「それよりも、姫様は……」

「心配しなくても大丈夫よ」

「姫様……」

「あんな脳みその栄養が胸と尻とツノに行ったクワガタの亜種なんか私がボコボコにしてあげるわ!」

「姫様?」

何というか、燃えてるといふか、荒ぶっているといふか。とりあえ

ず、やる気に満ち溢れているようだ。

「さあ、覚悟しなさい！まずは一勝、私にもらおう！」

「何とでも言うが良い……それで、内容は？」

「ふふふ、決闘の内容はコレよ！」

姫様はビッシリと何かが書かれた紙を取り出した。

これは……え、本気ですか？

「模擬テストで勝負よ!!」

## 第12話 決闘説明

「……………模擬テスト?」

長い沈黙の後、思わず言葉がこぼれたかのように問いかける魔王。「そうよ!これはグレゴール王立魔法学院卒業試験と同じレベルの問題を集めたものなの。今回の決闘は、このテストの点数が高い方が勝ちよ!」

卒業試験レベルか……………ええと、なになに……………

### 第一問

『人類魔法史の父、アイボリー・ジェーンが提唱した体外放出式魔法発現理論は、現代の魔法学術では誤りのある理論とされている。しかし、現代でも『ファイアボール』など、多くの術式に体外放出式魔法発現理論が広く活用されている。その理由を具体的な活用法を絡め、500文字以内で説明せよ』

……………うん、魔法を使えない俺には何も分からないが、果てしなく難しいということは分かる。

書かれている内容を読んでいるだけで頭が痛くなりそうだ。

「制限時間は1時間、魔法の使用はダメ、カンニングとか持ち込みとかももちろんダメよ!純粋な知識で解いて貰うわ!それから……………」

「えつと……………質問があるのだが……………」

「もう、なによ!」

おずおずと手を上げる魔王。

説明を遮られた姫様がムツとしながらも魔王に目を向ける。

「模擬テストと言えば……………筆記の、テストの?」

「そうよ!」

「実技じゃなく、紙とペンを使って問題を解く……………」

「そうだって言ってるじゃない!」

「いや、うん。そうだな……………ちよつと待ってくれ……………」

そう言いながら魔王は眉間を押さえる。

「なによ、文句でもあるの?」

「いや……………決闘の内容はそっちが決める。それは前にも言った通りだ

し、そこに今更異議はない」

自身を納得させるようにそう呟く。

「だが……一体どうして修練場で模擬テストなんだ……??？」

それはそう。

ここは騎士が普段訓練をする場所。決してテスト会場ではない。

それは先程の騎士団長が説明した通りだし、壁にかかった武器が如実にそう表している。

「そんなの、決まってるじゃない」

姫様は一体、何の意図があつて……

「ここしか使えなかったからよ!!」

……………うん？

「他の候補もあつたんだけど、もう使われてたり邪魔が入ったりする可能性があつて使えなかったのよね」

「なるほど……？」

「今日はどこも使えないから後日にしなくちやダメだったの。でも私はどーしても今日やりたかったの!!」

「ええと、それはどうして……」

「だつてあいつムカつくじゃない」

ああ、うん……キレてましたもんね……

「それで、何とかしようと思つて『ここ貸して』つて言ったら貸してもらえたの」

「貸しました!」

「それでここに居るんですね」

元氣よく手を上げる騎士団長。

なんでここに居るのか疑問だったけど、元々ここを使う予定だったのか。

「今日は朝練だけの予定でしたが、お休みにするのもなんなので王都周辺の遠征任務にしました！」

「え」

俺たちが王城に着いたのは夕方くらいだ。

そこから姫様が決闘の内容を決めたりする時間を差し引けば……おそろく、深夜かそれに近い時間。

そうになると、騎士たちは数時間前に遠征任務が降って湧いたわけで……

いくら王侯貴族の無茶振りに振り回されるポジションだとしても、さすがに可哀想……いや、勇者だとよくある話だなコレ。うん、たまには良いんじゃないかな！

「期待……してたのに……」

膝から崩れ落ち、四つん這いになりながら生まれたての子鹿のように震えている魔王。

え、急にどうした。

「こんな場所だから、殴り合いかと期待したのに……！」

「確実に負ける勝負に挑むわけじゃないじゃない」

「くっ……！」

うん、まあ……殴り合いになったらパーンッ！ってなって終わるよな。姫様の命が。

「他に言う事ないなら続けるわよ」

「ああ……」

意気消沈気味の魔王を放って、説明を再開した。

「今回、あくまでも公平にするために問題制作は他に頼んだわ」

「頼まりました！」

もう一度元気よく手を上げる騎士団長。

また貴女ですか……っついていやいやいや。

「あの、騎士団長ってお勉強できましたっけ？」

「ふふん、ご心配には及びません！これでもグレゴール王国第一王女ですから！」

「えっ!？」



ドン！とドヤ顔で胸を叩く騎士団長に、素っ頓狂な声をあげながら目を大きく開く魔王。

……うん、まあ驚くよな。俺も初めて聞いた時驚いた。

グレゴール王国第一王女にして騎士団長、アイラ・フォン・グレイズロッド。

彼女が騎士団長に就任したのは、半分事故であると聞いている。

第一王女である彼女は花を愛でるより、劇を観るよりも剣を振る事を好んでいた。

ある日、彼女は父である国王に直談判した。「騎士になりたい」と。国王は何かの気の迷い、子供の突発的な発言と思っていた……しかし、それは違った。彼女は数年にわたり国王に言い続けたのだ。

これに困り果てた国王と貴族だ。口で言っても現場を見せても諦めない彼女をどう諦めさせたものかと頭を悩ませた。

そこで、貴族たちは一計を案じた。口がダメなら実力で……「騎士団と戦って勝てば考えよう」と条件をつけた。

一対一ならまだしも、一対多という圧倒的不利。現役の騎士が相手という事もあり、誰もが勝てるわけがないと思っていた。

しかし、予想は裏切られた。

彼女の剣は、人類の領域を逸脱していた。

力、速さ、技量……そのどれもが規格外、必殺を内包した一撃であった。

それは一瞬とはいえ「王女に対して攻撃しても良いのか？」と躊躇い、後手に回った騎士を圧倒するには容易く……

……こうして、騎士団の壊滅を以て彼女は騎士団長の肩書きを得た。

正真正銘の規格外、人類最強と名高い人物なのだ。

「に、人間の王族は戦闘は苦手と聞いてたんだが……」

「趣味が高じまして！」

「そっ、そうか……」

「ああ、そう言えば自己紹介がまだでしたね！グレゴール王国騎士団長及び第一王女のアイラ・フォン・グレイズロッドです！よろしくお願ひしますー！」

「あ、ああ……よろしく……」

「そちらのお名前は？」

「ええと、その……ぷ、プロメア……」

「いいお名前ですね！」

「はは……」

魔王が押されてる!?……いや、思えば陰キャみたいな所あつたし……もしかして、騎士団長みたいなタイプが苦手なのか……?

よく分からないが、とりあえずチラチラと見てくる魔王に親指を立てておくことにしよう。

「説明続けるわよ……えっと、聞いている？」

あの後、何事もなく説明は終わり、いよいよ決闘の時が来ようとしていた。

まあ、説明と言つても『不正はするな』『公平な勝負』『ただの筆記試験』という事を長々と説明していただけたが。

「では、秒針が0になったら始めてください」

試験官役は騎士団長がやるらしい。

俺も手伝いを申し出たが、「景品は景品らしく座つてろ」と言われた。いや間違つてませんけど景品って……

チツチツ……と秒針の音が広い部屋に響く。

……自分の運命を他人に託すことがこんなにも胃に悪いとは……姫様、ああは言つてたけど大丈夫なのか……?なんだって——

「開始ですー！」

なんだって、相手は魔族の王なのだから。

## 第13話 決闘終了

ディアナは勝利を確信している。

自分が内容を決めたからには自信がある分野だ。運動や実技が苦手な反面、筆記なら誰にも負けないと自負している。

しかし、そうではない。もっと根本的に、絶対に負ける事が無いと確信しているのだ。

(人類と魔族……そもそも魔法が違うのよね)

『目的の地まで行く』としても馬車で行く人と徒歩で行く人がいる様に、魔法は同じ結果でも術式が違うという事はままある。

ましてや人類と魔族。種族が違う上、長年交流が無いとなれば術式などまるで違う。

つまり、人類の魔法の常識が通じないのだ。

今回の勝負、完全にディアナが有利だ。

グレゴール王立魔法学院。祖国最古にして最高の教育機関にして研究機関。

そう、魔族領に接しているグレゴール王国の使命の一つとして、魔族の研究がある。

魔族とは。

魔族の生活は。

魔族の種類は。

魔族の強さは。

——魔族の扱う魔法とは。

人類と魔族に交流はない。

しかし、人類は魔族のことを調べ尽くしている。

恐るべき敵として、最も身近な脅威として。

今回のテストは、人類サイドの規格……『グレゴール王立魔法学院卒業試験』を参考にしたテストだ。

それを魔族の感性でそのまま解いてしまうと……

(全問不正解もあり得る……って事よ)

仮に、それに気づけたとしても1時間という制限時間。優秀な卒業生ですら「時間が足りない」と言わしめた量と質。

それを魔族の感性から人類側に直すというロスが勝利を遠ざける。

故に、この勝負に公平など存在しない。

(勝負を決めてから思い出したけど……なんか私有利になっちゃったわね)

まあ、完全に偶然だったが。

ディアナにそんな策略を練る余裕なんてなかった。

如何にあの邪智暴虐の魔王を分らせねばと決意していた。自分の最も得意な事で、完膚なきまでに叩きのめしてやるとだけ考えていた。

決闘を受け入れたのも、我慢の限界ということもあったが、堂々と叩きのめせる場所が欲しかっただけだった。

なぜそんなに怒っているのか？

そのきっかけは広間での事だ。

魔王討伐に向かってコソコソと帰ってきた勇者。何か訳があるのか知らないが、一応は無事に帰ってきたらしい。まあ死ぬとは思っていなかったが。

ならば、婚約者として！致し方なく！忙しいけど！自ら迎えに行つてあげよう！だって自分は婚約者だから！ああ、まったく仕方ないなあ！そう言い聞かせ、勇者の下に向かい――

勇者が魔王と初々しく、なんだかいい雰囲気になっていた現場に直面した。

なにをしている？

ふざけるな、ふざけるなよ。

それは私がするはずだったものだ、と――！

(絶対に泣かす！泣くまでボコボコにしてやるんだから……！)

ディアナの怒りは日を跨いでも収まらなかった。

表面上こそ収まっているものの、荒ぶる炎が静かなマグマに変わっただけに過ぎない。

決闘を受けるべきでは無いことは理解している。メリットは皆無、デメリットは甚大。そんな事は理解している。

だが、だがしかし。それよりも『一回シメる』という動機が強かった。

「開始ですー！」

そう言われて、2人は問題用紙を開く。

(難しい……でも、解けなくは無いわー！)

ディアナに油断はなかった。

並みの魔族ならば……いや、ある程度優秀な魔族でも、ディアナが勝っていただろう。

そもそもの話、ディアナが一番得意だと自負する内容。人類でもよほどの者でなければ勝ち目はない。

しかし、しかしだ。今回ばかりは……

「できた」

相手が悪かった。

「えっ」

間拔けな声を上げるが、それも仕方がないことだ。

1時間でも足りないと言われているそれを、10分も経たない内に

埋め切ったというのだから。

現に、ディアナの答案用紙にはまだ半分以上空白が存在している。(うそ……早すぎる……いや、どうせ分からないからって適当に埋めたに違いないわ!!)

「一度提出してしまつたらもう元に戻せませんが……」

「構わない。見直したが、ケアレスミス等は無かつたからな」

「なるほど、では受け取りますね!」

そんな思いも、あまりに自信満々な姿に内心をめちやくちやにされる。

(まさか……いや、解けるわけが……!)

自身の経験、先人の実績が目の前で起こつた事を否定する。否定しなければならぬ。

デタラメを前にして常識が認知を阻む。

「え、もう解けたのか? 相当な量があつたと思うが……」

「そう難しい内容では無かつたからな。それに、普段の書類仕事に比べたら少ないからな……」

「お、おお……」

「勇者、知ってるか? 書類つて終わりが無いんだ……」

「そ、そうか……」

衝撃的な内容を、なんでも無いように語る。

わざとディアナに聞こえるように……などではなく、本当にただのくだらない世間話をするように。

そのことが、またディアナの心を逆撫でする。

「まあ、それに……一応人類の使う魔法は一通り研究しているからな」  
人類は魔族を研究している。

しかし、逆もまた然り。

魔族は人類を研究している。

考えれば当たり前だ。

相手は物を考えない土人形でもなければ、本能で動く野生動物でもない。高度な知性を有する生物だ。

ならば、人類という脅威に対し、研究や分析をするのは当然。むしろ

ろ、しない方が不自然だろう。

ディアナは自分の中の何かが軋む音が聞こえた。

アドバンテージは最初から無かった。

つまりこれは正々堂々、公平な勝負。

(それを、私は……っ！)

下唇を噛み締める。

ペンを握る手に力が入る。

一番自信があつたものを、真正面から突破された。

その事実が多感な年頃の少女には認め難く、王族のプライドとしても受け入れ難く。

(まだ……まだよ！仮に相手が全問正解してたとしても、私も全問正解すれば良いだけの話よっ！)

なにより、想い人の前では耐え難く。

### 第一試合、【模擬テスト】

「……………私、こんな点数初めて取ったわ」

「……………姫様」

「これが、私の本気なのよ」

ディアナ：98点

「初戦は私の勝ちだな」  
魔王：100点



## 第14話 真の敗北とは精神的ダメージを伴う

「ふっふっふっ……どうだ勇者、勝ったぞ!!」

「……………」

「見ろ、この見事な花丸を!」

「……………」

「これで正式に妻としての第一歩を踏み出せたという訳だな! さあ、思い切って2歩目どころかゴールまで突っ走って『叔母さん結婚しないの?』と煽ってきた姪っ子共にウエディングマウントを……」

「……………」

「うん? ……あっ」

興奮した様子で語りかけてくる魔王に、静かに指と視線だけで示す。

うん、分かるだろ? 勝って嬉しいのは分からなくもない。でもな、お前ちよつと黙れ本当に。これでこの後苦労するのは俺なんだよ。

「あー、こほん! き、騎士団長よ! すまないがお手洗いはどこだったかな?!」

「ご案内しますね! それとアイラで構いませんよ!」

「な、名前呼びはちよつと……その、もう少し段階を踏んでからで……………」

「遠慮なさらず!」

「いや、そういうことじゃ……………」

察してくれたのか、早々に部屋から立ち去る魔王。 ナイスだ。

だが、騎士団長に話しかけてしまったため、騎士団長まで引き連れて出て行ってしまった。クソが。

くっ、騎士団長が居れば負担が減ったのに……いや、魔王がいた方が負担だったか? ……まあ、差し引きゼロか。

出て行く二人の背中を見届け、最重要案件に取り掛かろうと振り返る。

あー……やっぱりこれを一人で対応はちよつと……放置、とかはダメだよなあ。

「……………はあ、仕方ない。腹くくるか！」

「あー、姫様？」

「……………なに」

「そのー……………喉乾きませんか？お水とか持ってきましようか？」

「……………いらない」

「そ、そうですか……………」

と、このように負けてからずっとこの調子だ。

体育座りをして遠くを見つめたまま動こうとしない。話しかけても生返りしか返ってこない。

そう、最重要案件とは落ち込んだ姫様を元に戻す事だ。

こんな所、他の誰かに見られてしまったらいくら取り繕っても怪しまれてしまう。早急に元の調子を取り戻してもらう必要があるのだ。これでも俺は一応姫様の婚約者。短い付き合いとはいえ、それなりに関わりを持っている。

当然、姫様の扱いもある程度は心得がある。特に、不機嫌な姫様の扱いは一番上手いと自負しているほどだ。

だが…………

「まけた……………まけたのよねわたし……………」

こういう姫様はどうしたらいいのか誰か教えてください…………

怒ったり不機嫌な姫様だったらともかく、落ち込んでる姫様なんて初めて見たぞ……………対処しようにもなあ…………

まあ、落ち込んでいる理由は分かる。

あそこまで自信満々に挑んでおいて負けてしまった。

王族のプライドがズタズタにされたとか、負けたショックとかでメンタルがグチャグチャになってるんだろう。

これが地元の農村にいる子供だったら「ふはははは！見事な負けっぷりだったな！！よし、飯食いに行くぞ！敗北会だ！！」とでも言っていたが、ロイヤルな身分の姫様にそれはできない。したら切腹が冗談じゃなくなる。

うーん、慰めると言ってもなあ……時間になんて任せて回復をというのは定番だがそれは使えないし……

慰める……飯……やけ食い……ストレス発散……

あ、そうだ。

「姫様」

「なによ……もうほうって……」

「少しお出かけしませんか？」



そう、要はスッキリさせればいいんだ。

落ち込んでいる時、人によって取る行動は変わる。

やけ食いする人、動物と戯れる人、ひたすらサンドバッグを殴る人……これらの行動には『スッキリする』という一貫した目的があるのだ。

「いやあ、今日は天気がいいですね」

「……」

うーん、会話が続かない。

姫様が何をすればスッキリするか不明だったから、こうして無理に連れ出したわけだが……まあ、ああして座り込むよりも精神衛生上マシだろう。

「あの……そろそろ離してもらおうわけには……」

「……やだ」

「周りの目が……」

「……もうちょっと」

立つ気力が無いかからか、俺の腕を掴んで歩いているため非常に歩きづらい。それに、普段と違いすぎて調子が狂う。

立場的にも現狀的にも無理に引き剥がせないな……

周囲からは「ロリコン?」「あれ犯罪では?」「兄弟の可能性も……」とヒソヒソとした声が聞こえる。

変装しているから良いものの、普通なら社会的地位が地の底に落ち

ていた所だった。

俺も姫様も有名人で顔が知れ渡ってるが、分からないようにメイクをしたり、服装でイメージを変えたりしているのでこうして街に出ても問題はない。歩き方や重心まで把握しているような変態的なファンにでも見つかからない限り大丈夫だ。

ちなみに、あの仮面は緊急用件持ち歩き用だ。嵩張らず変装が楽な反面、完全不審者になるのが欠点だ。あれは町人に通報されるリスクを伴ってしまうので本当にもしもの時しかやらないようにしている。今回のように、余裕がある時はメイクの方が良いのだ。

にしてもどうするかな……こうして連れ出したはいいものの、完全にノープランだ。

このまま街を歩くにしてもなあ……散歩なんかで気分転換にはならないだろうし……

そんな事を考えていると、いい匂いが漂ってきた。

「あれは……」

「屋台、ですね」

じゅうじゅうと肉が焼ける音がさらに食欲がそそる。

……そう言えば、昨日の昼から何も食べてなかったな。主に胃痛で食欲がわかなかつたせいだが。

「オヤジさん、串焼き2つ」

「アイヨー・おや、可愛い子連れてるねお兄さん！デートかい？」

「でっ!？」

「あー、(婚約者だし) まあ間違っては無いかな」

「ピエツ!？」

「おお、そうかいそうかい！若いっていいねえ……ほれ、これオマケだよー」

「ありがとうございます」

「まいどありー」

あのオヤジさん、いい人だったな。串焼き2つが4つに化けた。いくら大金を持っててもこういうのは嬉しいものだ。

「姫様、お2つどうぞ」

「でっでっ、でででで……！」

「姫様？」

「はわっ、はわわわわ……！」

急に壊れたように頬に手を当てて頭を横に振り出した。

なんだか顔が赤いようだし、体調でも崩したかな？

「で、デート……！よく考えれば、二人でお出かけてデートじゃない……！ふふ、ふふふ……やったわ、苦節4年、ようやくここまで漕ぎ着けたわ……！」

「あの、大丈夫ですか？気分が優れないなら城に戻るのも……」

「大丈夫！大丈夫よ!!ほら、座って食べましょう！」

「そ、そうですか。ならいいんですが……」

ボソボソと独り言を呟いたと思えば、急に元気になった姫様。

王族だし、庶民の食べ物に憧れでもあったとか……？うーん……よく分からないが、元気になったようで良かった。

手を引かれてベンチに座る。

朝と昼の間という微妙な時間だからか、大通りにも関わらず人気が少ない。

「はい、どうぞ。お口に合うか分かりませんが……」

「……食べさせて」

「はい？」

「食べさせてって言ったの！」

「ええと、食べにくいですよ？」

「ソースがついた串を持ちたくないの！」

「あ、気が回らずすみません。今拭きますね」

「いいから！食べさせなさい！早く！」

姫様はそう言い、俺の太ももをバシバシと叩く。

ええ……姫様の考えが本当に分からない。自分で食べた方が良くないか？

……まあ、食べさせるくらいいいか。減るもんじゃないし、人の目も無いし。

「では、あーん……」

「あ!?……あ、あーんっ……んん?」

姫様の口に串焼きを突っ込むと、なんだか不思議な表情をしていた。

あー……もしかして嫌いな味だったか?

「苦手なら残しても大丈夫ですよ」

「いや、その……んん?これ何の肉なの?」

「あれ、食べたことありません?ボアボア」

「ボアボア……?え、食べられるボアってキングボアだけじゃないの?」

「キングボアは貴族ぐらいしか食べれませんね……」

ボアボアは庶民の味方。キングボアの原種に当たる豚っぽい魔物だ。

数が異様に多く、幅広い環境に適応し、初心者でも狩りやすい。そのため、格安で売られている割に美味しいということで庶民に愛されている。

一方、キングボアはボアボアの変異種。一説では、好戦的なボアボアが他の魔物を狩り続けた末の姿だと言われている。そのため、戦闘能力が異様に高く、Sランク冒険者でも不意打ちで大ダメージを負った記録があるほど。火龍などには流石に劣るが、強いと言っても差し支えない魔物だ。

そんなキングボアを常食できるなんて余程の貴族でも難しいが……グレゴール王国、金あるんだなあ……

「んー……まあ、食べられなくてもいいわね」

「ソデスカ……」

美味しいはずなんだけどなあ……

「ん!」

「はい?」

「ん!」

「えっと、食べさせると……食べるんですか?」

「ん!!」

口を開けて待つ姫様の口に串焼きを突っ込む作業に戻る。  
食べられなくもない……あれって褒め言葉だったのか……？  
うーん、まあ嬉しそうに食べてるし、そういうことなんだろうたぶん。

「ん！」



その後も姫様とのお出かけは続いた。

「ねえ、見て！何かやってるわ！」

「大道芸ですね。見たことありませんか？」

「初めて見るわ！それにしても、魔力が感じられないけどどうなってるのかしら？」

「さあ……自分もああいうのはサツパリで」

「あ！帽子からハトが出てきたわ！」

「出てきましたね……って多い多い！どこに仕込んでたんだ!？」

「あら、これは……」

「その杖が何か？」

「いや、妙な魔力が……」

「ほっほ、お目が高いのお嬢さん。それは世界樹の杖の先っぽで作った杖の削りカスを肥料にして作られた木を使った杖ですよ」

「カスじゃねーか」

「立ち止まってどうかしましたか？」

「ねえ、あの服……アイツが着てたのと同じじゃない？」

「アイツ……？ああ、実は奴の服が汚れてしまい、そのまま城に顔を出させるわけにもいかなかったので急遽買ったんですよ」

「ふうーん……貴方が選んだの？」

「？店員が選びましたが……」

「ふうーん……………入るわよ」

「あの、服なら確か御用達の所が…………」

「いいから！入るわよ！」

そうして時間は経ち、気づけばもうすっかり夕暮れ。

小高い丘から街並みを見下ろしながら、ふうとため息を吐く。

流石に丸一日歩き回ったのは疲れたな……………姫様が元気になったよ  
うで良かったけど。

「さて、そろそろ帰りましょうか」

「……………ねえ」

振り向くと、姫様が少し暗い顔をしてうつむいていた。

初めて見る顔だ。

「決闘、負けちゃったわ」

先程までの元気な様子とは違い、憂いのある表情をして服の裾を握  
り締める。

これも。

「そもそも、私が勝手に決闘を受けちゃったからこんな事になって  
……………」

はあ、と自嘲気味にため息を吐く。

これも。

「本当に、ごめ」

「姫様」

頭を下げようとする姫様の肩を掴む。

無礼かもしれないが、それどころじゃない。

こんな調子じゃ絶対勝てない。

負の感情でパワーになるのは恨みや怒りのみ。悲しみや後悔はマ  
イナスにばかりに作用する。

決闘を勝つためにも、姫様には前を向いてもらわないと困るんだ

……………それに、こうもしおらしいと調子も狂うしな。

「王族が平民に向かって、そんな簡単に頭なんか下げないでください」  
「でも……………」



「姫様に頭を下げさせたなんて知られては、国王様からお叱りを受けてしまいます」

「……………」

「自分は気にしてませんよ」

「なんで……………」

「元はと言えば自分が不覚を取ったせいです。それなのに、こうしてまだチャンスがある。自分は運が良いとつくづく思いますよ」

「……………ふふ、なによそれ」

「それに、信じてますから」

「……………」

「まだ負けたわけじゃありません。後2回勝てばいいんです。3回勝負なんですから、まだ勝ち目はあります」

……………長々と言葉を尽くしたみたけど、なんだか違う気がする。

俺が、言いたい事は——

「だから前を向いてください」

温かな黄金色の風が吹き抜ける。

言いたいことは全部言った。姫様に託すしかない俺ができるのはここまで。後は姫様次第だ。

「……………まったくクリフは、あの時もそうだったわね」

「あの時?」

「ふふつ、なんでもないわ」

突然クスクスと笑い出す姫様。

あの時、と言っているが思い当たる節はない。俺から姫様に何か特別な事をした覚えもないし……………誰かと勘違いしてるのか?」

「ねえ、勝てると思う?」

少し不安そうに、でもどこか気軽に姫様は問いかけてくる。

それに対して、俺はお決まりのようにこう言った。

「当たり前じゃないですか」

「やっと帰れた……って魔王？人の部屋の前で寝そべって何してるんだ？というか、その服どうした？お前も出かけてたのか？」

「……試合に勝って勝負に負けた気分だ……」

「はあ？」

## 第15話 平和とは崩れ去るものと知れ

1回目の決闘から数日。

2回目の決闘……と行きたかった所だが、姫様が多忙のため時間を捻出できず一時休止を提案。魔王も急がないためそれを飲んだ。

俺はと言うと、今までの目まぐるしい生活と違い、静かで平穏な日々を送っていた。

平和だ……こんなにゆつくりした日々を過ごすのは、騎士団に入団する以前の事になるな。

騎士になってからと言えば、緊急出動や休暇のパーティーと気が休まった試しがない。騎士や勇者の給料が高いのは、こういう実質無休な事が大きいのだろう。過去の自分に何か伝えられるなら「大人しく農民やつてろ」と言うくらいには激務だ。

今では勇者としての仕事もなく、王都に襲撃もなく、俺が帰ってきてる事を秘匿にしているため変な接待もない。

『何もしない』という幸せな時間を過ごしている。

今日もベランダで朝食をとる。柔らかな日差しが優しく目を覚ましてくれる。

こんな平穏な日が続けば良いのに……

「えっ、パーティー……ですか……」

平穏は崩れ去った。

いや、まあ魔王との決闘でここにいる時点で平穏も何もないが……もうちょつと暇な時間を過ごしていたかった。

「そうよ。お父様や他の貴族たちが『帰ってきてるなら折角なら……』って気を利かせてパーティーをしましょうって」

「自分は不参加というわけには……」

「主役が不在のパーティーなんてないでしょ。というか、参加しないと何か言われるんじゃないの?」

「言われますねえ……」

そう言うと、姫様は紅茶の入ったカップに口をつける。朝から訪ねてきて何事かと思えば、俺の平穩を打ち壊す言伝だった。

ああ……憂鬱だ。パーティーなんて真っ平御免だ。

煌びやかな場所でマナーを守って威厳を保ちながら、貴族たちの機嫌を損ねないように立ち回る……とどのつまり接待だ。

勇者とコネを作りたいとか、これを機に政敵を蹴落としたいとか、そういう思惑が入り混じった戦場でもある。

結論、パーティーはとても疲れる。

だが、いくら気が乗らなくても拒否権はない。それに、「せつかく気を遣ってパーティーを開いてやろうというのに、面子を潰しやがって……」と恨まれる方が面倒だ。俺の経験上5割ほどの確率で言われる。恨まれないが、ネチネチ言われる確率ならほぼ10割だ。

「はあ……分かりました、準備はしておきます」

ため息を吐き、パンを齧る。

パーティーと言っても夜。少なくとも日中はまだ平穩な時間を過ごせる。

この限られた時間を目一杯楽しもう……

……にしても、さつきから姫様がこちらをジツと見つめてくる。穴が開きそうなほど、ジイツツと見つめてくる。……食べにくいなあ。

「……あの、どうかしましたか？」

「へあ!?! いや、その……ほしいなって……」

「ああ、紅茶のおかわりですか？」

「そ、そうよ! 分かればいいのよ!」

紅茶を淹れると、姫様は何かブツブツと言いながら視線を外に向ける。

最近はこんな風に俺を無言で見つめてくる事が増えた。言いたい事があるなら目で訴えず言ってくれと助かるのだが……まあ、実害も無いし別にいいか。

「あーんぐらい……まったく……なんだから……」

「はい? 何か言いました?」

「い、いやなにも……そつ、そうよ! 次の決闘の事なんだけど、何かい

「い案はないかしら!？」

「いい案、ですか……」

「そうなの!次は負けられないから、確実な勝利が欲しいのよ!」

「そう言われて考えてみる。」

魔王……残念発言と変態性に目を瞑り性能だけを見れば規格外のそれだ。

武力では勝ち目はない。あれに勝とうとするなら、Sランク冒険者総掛かり袋叩き作戦が一番勝率が高いかも知れない。

知力でも勝ち目は薄い。1回戦目の模擬テストでは、あの量の難問をスラスラと解いていた。下手に知識を問うような問題では太刀打ちできないだろう。

くじ引きなどでは勝ち目はあるだろうが……確実な勝利とは程遠いな。

こう見ると本当にやばいな魔王。弱点らしい弱点が思い当たらないぞ……

「申し訳ありませんが、特にこれといった案は……ああ、ですが武力衝突は絶対にやめた方がいいです。パーンツてなります」

「それは分かるわよ。私弱いし……パーンツてなに?」

それはもう、(体が)パーンツと。

「うーん……弱点が何か分かれればいいんだけど……」

「すみません、アイツは頭がおかしい以外何も……」

魔王は頭がアレだが性能面では隙が全くない。正しく『魔王』と呼んで差し支えない存在だろう。

そんな相手に本当に勝てるだろうか……

「ふふん、心配しなくても良いわよ。私は私のやり方で勝ってみせるわ!」

「姫様……」

姫様は微笑みながら胸を張ってそう言った。

顔に出ってしまっただろうか。気をつけないとな……

「それに、個人的にも敵は減らしておきたいし……」

「敵……?」

「なんでもないわ！それよりも紅茶おかわり！」

「あ、はい」

飲むペース早いなあ……この銘柄好きなのか？今度機嫌取り用にストックしておくか。

にしても、あれから姫様は前向きになった。

まあ、元から前向きの性格ではあったから、戻ったと言うのが正しいのだが……負けたショックからは完全に回復したようだ。

一安心だが……本当に安心するのは、決着がついた時だ。

魔王と婚約など、そんな面倒事は御免だ。

今でこそ大人しくしてくれてはいるが、奴の本性は暴力的。魔族らしい「力こそ全て！」というタイプだ。

そんなのと一緒に生活すれば、生傷が絶えないバイオレンスな日常を送るハメになるだろう。

俺は今日みたく穏やかな日々を送りたいが、それが絶対にできなくなる。

あと、たぶん不特定多数から恨まれる。「魔族と仲良くするなんて！」という手勢が暗殺なんてものを仕掛けてくるかも知れない。

考えれば考えるほど、俺個人へのデメリットが目立つ……最悪なのは、国家的には決定的な友好関係を築けるといふメリットがある事だ。反対意見が出たり、一部傭兵の解雇にあたる治安の悪化などのデメリットはあるが、そんなのは和平というメリットと比べるまでもない。

つまり、実質俺だけが被害を被る形で割と丸く収まってしまおう。

……姫様、本当に勝ってくださいいね？「和平どころか婚約破棄もできてラッキー！」とか思い当たってわざと負けるとかやめて下さいいね？

そんな事を考えていると、姫様が突如「あつ」と言葉を溢した。

「そうよ。魔王で思い出したわ」

「……奴がまた何かしましたか？」

「毎回フォークとナイフをグニャグニャにするのをやめて欲しいって苦情がきたぐらいよ。それじゃなくて別件よ」

あのバカ、また問題起こしたのか!!

「スウー……後できつく言っておきます……それで、別件とは？」

「誘われたのよ」

「誘われてた？」

「パーティー」

「……………」

「『勇者を助けてくれた恩人』扱いでしょ？そのお礼も兼ねてって言うてたわ」

「??？」

すこし、りかいできない。したくない。

『なんで？』と『どうして？』が頭の中でぐるぐると渦巻く。

「あ、あの、ちなみに奴の事情を知っているのは……」

「お父様だけにしか言っていないけど……え、あんまり言わない方がいいんじゃない？」

つまり、その……あの問題児をパーティーに連れて行って魔王とバレずにやり切れと……？

夢であってくれ……そう願うも、胃がしつかりと痛み始め現実だと教えてくれた。

## 第16話 常識とは非常識である

朝食を食べ終わると、休む間もなく部屋を飛び出た。目的地は魔王の部屋。

本当は魔王なんて訪ねたくないが、問題児にパーティーで妙な事をしないようお願いしなければならぬ。問題が起きてからだと遅いのだ。

一番良いのは、魔王をパーティーに参加させない事だ。まだ魔王の耳にパーティーの件が伝わってなければ何とでもできる。

魔王を不参加させる事で、貴族たちにネチネチ文句を言われる程度我慢しよう。それよりも、魔王がパーティーに参加した時のフオロの方が圧倒的に疲れる！

せめてパーティーまでゆっくりしようと思っていたのに……くっつ、胃がキリキリしてきた……！！

「おい、いるか。俺だ！」

ドンドン、とノックをする。

朝だが決闘の時みたく早朝と言うわけでもない。流石に起きてるだろう。

「おお、来てくれたのか！入ってくれ！」

朝から妙にテンションが高いな……

少し訝しみながらも扉を開ける。

すると、そこには――

「どうだ勇者、似合うか？」

扉を開けると、中には薄紫のタイトなドレスを着た魔王がいた。

くるくると回りながらドレスを見せつけてくる姿を見て、俺は確信した。

「遅かったか……！！」

膝から崩れ落ち、片手で目を覆う。

コイツ、パーティーに参加する気満々だ……



「な、なあ。どうしたんだ？そんなに似合ってなかったか……？」

「いや……今後のことを考えたらずい少胃がな……」

「大丈夫か？体は大切にしないとだめだぞ」

心配そうにこちらを覗いているが、俺の胃に大ダメージを与えている大半の原因はお前だ。

「それよりも、パーティー、参加するのか？お前の存在を隠すなら不参加の方が良くないか？」

「ん？当然参加するぞ？」

「そうか……そうかあー……」

座り込んで朝から陰鬱な様子で長い時間息を吐く俺に、魔王は不思議そうな顔をした。

一応、僅かな望みを掛けて不参加の意思を聞いてみたがやはりダメか。

「というよりも、参加しないとダメだろう？」

「いや、確か強制では無かったはずだが……」

「それはそうなのだが……肩書きは伏せているものの、私が他国の王という事に代わりはない。そして、私の存在を知っている者がいる以上、不誠実な真似はできない。それに、後から私の存在を明かした際、妙な言いがかりはなるべく減らしておきたいからな。そういう理由で、パーティーには参加しなければならないんだ」

「そ、そうか……」

思ってた以上に真面目な理由があつて驚いた。

「そうか……そうだよな。一応、こんな中でも王だ。外交上の立場があつて、それ相応の振る舞いが求められる。」

そうなると、俺の都合で不参加を強要する訳にもいかないな……不安は残るが仕方ないか。今回はフォローに回るしかなさそうだ。

「それで、急いで来てたようだが、私に何か用事が……はっ！よ、夜ならまだしも、こんな朝からなんて……！寝込みを襲うにしても、もう少しムードというものをだな……！」

「そんな事するかバカ！というか、襲ってきたのお前だろうが!!」

「あつ、えつと……その節は、本当にすみませんでした……」

俺の反論に、魔王は少し苦い表情をして目を泳がせる。

このバカは少し前、夜に襲撃を仕掛けてきた。

なんでも「初デートを奪われた挙句当人がメスの顔しててイラツとムラツとしてつい……」と意味不明な供述をしている。

回避スキルや隠密行動スキル、認識阻害スキルなどを連発してなんとか朝までやり過ごし、姫様に説教してもらおう事で決着がついた。

さすがの魔王でも、一回りも年下の少女に「常識的に考えて、他人の家で暴れちゃダメでしょ？」という真つ当すぎるお説教が効いたのか、それから襲撃を仕掛けてくる事は無くなった。

「用事って言うのはな……あー、パーティー大丈夫かと思つてな」

「わ、私の心配を……！これはもう、両思いと言つても過言じゃないのでは……？」

「過言だろ」

それに、お前の心配というより、お前がやらかす未来についての心配だしな。

「んんっ……パーティーの件は心配無用だ。これでも王。パーティーぐらい慣れている」

「まあ、だろうな」

「ふふん、『社交界の黒薔薇』と呼ばれたほどだ、大船に乗った気でいてくれ」

本命は不参加にさせることだったが、副案はパーティーを波風立たせずに終わらせる事。

その確認のため魔王を訪ねたわけだが……魔王の佇まいを見るに、その心配はなさそうだ。

ほんと、頭が残念なだけで有能なんだよなコイツ……頭が致命的に残念だが。

「ところで、パーティーに必要なものが用意されてなかったのだが……」

「ああ、悪い。すぐに用意させる。何が必要なんだ？」

「ああ、メリケンサックか手斧が欲しいんだ」

「……………ん？」

メリケンサックか手斧……？

いや、聞き間違えか。たぶん「メルヘンチックな手紙」と言ったんだろう。そうに違いない。

……念のためもう一度聞いておくか。

「あー、すまん。もう一度言ってくれ」

「メリケンサックか手斧を用意して欲しい」

「嘘だろ？」

聞き間違えであつてくれ……そう思いながら、頭を抱えて天を見上げる。

い、いやまだだ。パーティーに参加する理由が真面目だったし、何か深い理由があるはずだ。

「……一応聞くが、何に使うんだ？」

「パーティーにだが……ええと、パーティーに武器は必須だろう？ドレスコードとして」

「何を言ってるんだお前は」

冗談で言っているかと思いたいが、俺の言葉に困惑した顔を見るに本気で言ってるんだよなあ……

いやまあ、魔族のパーティーでは武器の携帯が礼儀とか……そんなところだろう。

「人類のパーティーに武器は必要ない」

「えっ」

「むしろ、武器を持つのはダメだ。護衛の騎士ならまだしも、貴族は武器の不携帯が基本だ」

「なっ……!? そ、それではパーティーの醍醐味にして一番の目玉、一対一の対決はどうなるんだ!？」

「そんな物騒なものはない」

信じられないと言ったような顔をしているが、信じられないのは俺の方だよ。

なんだよこの蛮族……なんで貴族がパーティーでタイマンの勝負やるんだよ……目玉とか醍醐味とか言っていたし、嬉々としてやっているようだ。

「魔王、ダンスはできるか？」

「一応教養として習ったが……パーティーになんの関係が？」

「ああ、うん……なるほどな……うん……」

その反応で分かった、魔族と人類ではパーティーの概念が全く違う。

これは現場レベルでどうこうとかいう話じゃないな。流石にフオローしきれん……面倒だが、仕方ない。

「……特訓だ」

「はえ？」

「今からお前に人類のパーティーの常識について教える。時間がないから気合いで覚えろ」

「ええ!? きよ、今日はゆつくりと溜まってきた勇者の寝顔写真を整理しよう……!」

「ええい、パーティーでお前の事がバレれば迷惑がかかるのは俺なん……寝顔写真?」

「なんでもない」

「なんでもなくないだろう!? 盗撮か、盗撮したのか!? お、お前、襲撃に来なくなったと思ったらそんな事をしていたのか!？」

「そ、それはしてない……」

『それは』ってなんだ『それは』って!!」

魔王は目を逸らしながら、後ろのダンスに後退りする。

両手を広げる様子は、何かを守るように……

「おい、そこに隠している物を出せ」

「か、かくしてな……うわああああ!!! やつ、やめろお!!! 集めるの大変だったんだぞ!!!」

「盗撮は立派な犯罪なんだよ……! くつ、はなつ、離せつ!!!」

「盗撮じゃない!! 買ったただけだ!!!」

「寝顔写真は公式で売ってないんだよ……!!!」

ダンスに手を伸ばそうとすると、魔王はダンスの上に覆いかぶさり全力で抵抗してきた。

くそつ、力づくで没収したくてもできない!

「うわああああ!!! 私のSSR露天風呂勇者セミナー写真集は守り抜くぞおお!!!」

「なんだそれ寄越せ!燃やす!!今すぐ燃やす!!!」

なんだそれは、そんなアホみたいな写真が出回ってるのか!?今すぐ摘発してやるから畜生!!

くっ……これ以上魔王を追い詰めると、タンスを担いで王城……いや、王都中を駆けずり回る可能性が高い。目立つなと言ったところでコイツは話を聞くやつじゃない。そして、目立たれると被害を受けるのは俺なのだ。

非公式グッズを放置するわけにもいかない、パーティーの準備を疎かにするわけにもいかない……

追い詰めることもできないとなれば……くそっ、奥の手を使うしかないか……!

「魔王」

「なっ、なんだ!これは渡さんぞ!!」

「取引をしよう」

「と、取引……?」

「お前が持つ勇者非公式グッズと引き換えに——」

「や、やだ!!これは渡さないぞ!?入手するのにどれだけ大変だったか分からないからそんな簡単に処分など言える——」

「俺の写真を撮らせてやる」

魔王はぱつと目を見開きこちらを見る。

先程までの取り乱しようが嘘のように鎮まる。

きゅ、急に落ち着かれると怖いな……目も血走ってるし……

「どうぞ」

「え?あ、ああ……どうも……?」

スツと後ろのタンスを渡してくる魔王。

俺に執着している上、グッズを買い漁っているならこの手は有効だと思ったが……効きすぎて怖いな。俺は一体どんな写真を撮られる

んだ……

え？ 姫様が負けたらコレと婚約するのか？……うん、姫様を全力で支援しよう！ 負けられない理由がまた増えた……！

「じゃ、写真を撮るのはパーティーが無事に終わってからかな？」

「なっ……おあずけだと……!?!」

「なんだそのゴツいカメラ」

細長い巨大な、まるでバズーカのようなカメラを持ち出す魔王。

ええ……それで撮るのか？ なに、俺の細胞の写真でも欲しいのか？

……コイツなら「それも欲しい」って言いそうなのが怖いな……

「無事にパーティーを終わらすため、礼儀作法を覚えてもらおうぞ」

「ああ、ドンと来い……今の私は最強だ……!」

## 第17話 写真はもう懲り懲り

その日の夜。

パーティーが始まるには少し早いですが、俺は会場へ足を運んでいた。来たは良いが、何をしようかと悩んでいると、見慣れた後ろ姿が見えた。

「姫様、お手伝いに来ました」

「クリフ？ アンタはパーティーの主役なんだから、今回はゆつくり……して……」

「いえ、手伝わせてください……！」

「く、クリフ!? なんでもそんなにフラフラなのよ!？」

俺を見るや否や、姫様はギョツとしながら駆け寄って来た。

先程鏡を見たらひどい顔をしていた。パーティーが始まっていないのにも関わらず疲労困憊。三徹目の朝ぐらいの疲労度だ。

「ね、ねえ? 何があったの?」

「ああ、奴に礼儀作法を教えてたんですよ」

「礼儀作法を?」

「他の貴族もいるわけですし、最低限失礼のないようにと……まあ、最初から教えるハメになりましたが」

「何も分かってなかったの? 挨拶の定型文とか、パーティーの立ち回りとか」

「ええ、何もかも0から教えましたよ……」

「そう、0から……その様子じゃ大変だったのね」

「大変でしたよ……本当に……マジで……！」

思い出しただけで頭痛がする。

魔王への礼儀作法の指導は案外早く終わった。驚異的な集中力を見せた魔王は、本一冊を10秒足らずで読み、言ったことは一度で覚え、最終的には貴族特有の言い回しもある程度理解していた。

細かい作法やパーティーに参加するだけなら覚えなくていい事を除き、完璧と判断して切り上げた。

教師役で付きつきりだったため、パーティーまでの時間、少し休も

うと思い踵を返し……肩を万力の力で掴まれた。

振り返ると、笑ってない目でカメラを持った魔王が。

約束は約束だったので了承したが……俺の想像を遥かに超えていた。

魔王の写真撮影会は熾烈を極めた。

まさか1度単位のポージングを求められるとは思わなかったし、お互い魔法が使えないためワイヤーによるゴリ押しで無茶な体勢を撮影する羽目になったし、最終的には「違う！私の求めていた写真はこんなものじゃ……！」なんて職人じみた事を言い始めた。

「パーティーの準備がある」と隙をついて無理矢理逃げ出して来れたのが幸運だった。

とにかく疲れた……もう写真撮影はゴリゴリだ……一生分撮ったと思う……

「だ、大丈夫？その、疲れてるなら休んでた方が……」

「ご心配なく、まだ動けます」

「顔色も悪いし……無理はしない方がいいわよ？」

心配そうに俺の顔を見る姫様。

優しさが沁みる……

「姫様は癒し系ですね」

「え？うん、ありがとう……？」

「一緒にいてくれるだけで心が安らかになります」

「ええ!?そ、そんな……一生一緒なんて……!」

これがアニマルセラピーならぬロイヤルセラピーなんだろうか……無茶振りと口調はキツイが根は優しい姫様のなんて癒される事か……悪辣変態魔王の後だとその優しさが何倍にも感じられる。

「つゝゝ！わ、私、準備があるからっ！後は頼んだわ!!」

「ああ、はい。また後ほど」

姫様は持っていた物を俺に押し付けると、足早に会場を後にした。ちゃんとしたドレスを着ていたと思うのだが……まあ、化粧直しや髪を整えたりとする事があるのだろう。

走り去る姫様を尻目に、渡された物を確認する。なになに……備品



のチェックリスト？ああ、最終確認のやつか。

「これはこれは勇者殿。相変わらず姫様と仲が良いようだ」

姫様に渡された物を確認していると、声をかけられた。

この鼻につく、話しかけてくるたびに問題事を持ってきそうな問題児の声は……

「久しぶりだね。帰って来ているなら僕に一言ぐらい挨拶をくれれば……」

「ああ、副団長か。久しぶりだな、まだ騎士団長のストーク」

「うわあああああああ!!?!!くっ、クリフくうん!!ちよつと向こうでお話が!!」

「うるさい」

副団長は必死な形相で俺の口を手で塞ぐと、ガツと肩を組まれ会場の外に連れて行かれる。

周りの騎士達はいつもは穏やかな上司の慌てぶりに目を瞬かせる。しかし、熟練の騎士は「またか」と言わんばかりにノーリアクションだ。

外に出るや否や壁に軽く押さえつけられる。

肩で息をしているところを見るに、本気で慌てたんだろうな。

チツ、追い返すにはストーカー呼ばわりは強すぎたか……

「突然なんだ。今から姫様に頼まれた仕事をやらないといけないんだが?」

「君が他のみんながいる前で秘密をバラそうとしなければこんな事はしなかったよ……!」

「近い離れる、俺も悪かった。というか、秘密をバラすのはお前の十八番だろう」

「僕はそんなことしないよ!日常会話をしていると反抗的な子でもなぜか言う事を聞いてくれるだけ……」

「チラつかせて脅しているのか。効率的だな」

「人聞きが悪いなあ……」

疲れたようにため息を吐く黒髪黒目の色男。

この男の名はスザク。王国騎士団副団長にして騎士団長のストー

カーだ。

騎士団長に一目惚れをしたこの男は、告白する勇氣も無く、見守る事しかできずにいた。それは誰にも気付かれずに王城に潜伏するという偉業。

しかし、騎士団長を盗撮している所を俺が偶然にも発見。今まで誰にも気付かれなかったという油断からか、盗撮に熱中していたコイツは俺に触れられるまで1ミリも気づかなかった。

捕縛後、ストーキング行為を止めるように説教し、とりあえず牢屋に入れようと人を呼ぶために周囲を見渡した——その一瞬で逃げられた。あの時は報酬を逃したと悔やんだものだ。

もう2度と会う事はない。そう思っていたが、なんと正々堂々と騎士団長に会うためだけに騎士団に入団。その後凄まじい早さで副団長の地位まで駆け上がった。まさか真正面からストーキングをするとは思わなかったな……

魔王とは別ベクトルの変態。それが副団長、スザクというヘタレストーカー色男だ。

「それで一体何の用だ。見ての通り暇じゃないんだが？」

「ほとんど終わってるよねそれ！ディアナ様と一緒に確認してたの僕だよ！」

「チツ……早く要件を言え変態」

「なんでそんなに辛辣なのかなあ！僕上司だよね一応！」

「犯罪者にかける情けは無い……んっ、こんなに気安く話せるのはお前くらいだよ」

「そんなキメ顔で言われても嬉しくないよ！というか、犯罪者じゃないから！証拠も無いのに酷いな君は！」

「証拠が無いだけなんだよな……」

スザクは心底傷ついたと白々しく大袈裟な演技をする。それを見て頭を抱えながらため息を吐く。

スザクは状況的に盗撮盗聴を行なっているのは確実だ。恐らく騎士団長のストーキング行為の延長なんだろうが、そこで得た様々な情報で気の荒い新人をしつけているらしい。

その為、コイツが何かしようとするのとパシリの如くへこへことする人間が一定数いる。そのせいか、なんでも「騎士団で一番怒らせてはいけない人」など言われているらしい。

『らしい』と言うのが多いのは、証拠が何も出てこないせいだ。自分の職場で盗撮盗聴など良い気もしないので本格的に調べたが、これも何も出ない。その後思い立ったら調べてみてはいるが未だに収穫は無し。

魔王の事も伏せてはいるが、どこまで知ってるのやら……一応、盗撮盗聴の魔道具対策の魔道具を作動させてはいるが、どこまで通じているのかは不明だ。反応的に知らないんだろうが……

はあ……騎士のNo. 2が犯罪者とか、魔王の事とか、色んな意味で頭が痛い話だ……

「それで、盗聴でまずい話でも聞いたのか？」

「噂話と言ってほしいね……それと、今回は噂話じゃ無くて遠征の件だよ」

「遠征……この前の早朝に王都周辺の遠征をしたやつか？」

「なんだ、知っていたのかい？」

「いや、知っていたと言うか何と言うか……」

歯切れの悪い俺に、不思議そうな顔をするスザク。

姫様の我儘の巻き添えにされたのか……俺が持ってきた面倒事だから、少し罪悪感があるな……

「ふうん……まあいいや。これを見てほしい」

なんだか弱みを掴まれた気がするな……

そんな含みのある言葉の後、スザクはポケットから小さな袋を取り出した。

「……ってこれは」

「気付いたかい？これは最悪の薬と名高い禁制の薬『魔法増強薬』さ」「また出回っていたのか……はあ、こんな物使うバカは存外減らないものだな」

『魔法増強薬』は魔法の強化、増幅を目的に製造された薬だ。しかし、出来上がったものはただの白い粉。魔法を強化する効果は無かった。

しかし、最悪の副作用があった。それは強い酩酊感と幸福感だ。通常では得られない量の快樂に溺れ、薬に強く依存してしまう人が続出。

国は早々にこの薬を製造所持を強く禁じた。しかし、薬の回収を試みるも成分を分析され模造品が溢れかえってしまった。

その後はイタチごっこで回収と流通が行われている一品。それがこの白い粉の正体だ。

「だが、この案件はそう珍しい物じゃないだろうか？」

「問題はここからのさ。遠征で検挙した数はおよそ30。それが王都周辺だけで見つかった。さらに、薬は外へ行く商人や旅人が持っていったんだよ」

「なんだと？それはつまり——」

「お察しの通りさ。ここ王都を根城にした大規模犯罪だよ」

話を聞いて頭が痛くなる。

王都……即ち王のお膝元で組織的な大犯罪をしていると言うのだ。王都に犯罪者を放逐するのは王族の威信に関わる……即ち、勇者が派遣される可能性が高い。

はあ……勇者の仕事は魔族との戦闘じゃないのかと何度言いたくなった事か……しかし、勇者と言えどお役所仕事。上には逆らえないのだ。

もう慣れたものだが、こういった捜査は地道な上、貴族が絡んでくるので本当に面倒くさい。ため息の一つも吐きたくなる。

「それで、犯人の目星は？」

「ここまで大規模にできている点から、恐らく貴族。もしくは豪商が主犯だと考えられるね。経済的にも、政治的にもここ王都でやろうと思えばお金がかかるからねえ」

……まあ、そんなところだろうと思っただけだが、本格的に面倒になったな。主に貴族の説得とか、調査の協力を持ちかけたりとか。

武力行使こそあまりしないが、グチグチネチネチとゴネる奴が多いから本当にキツイ仕事になる。後ろめたい事がある貴族は特にゴネるからな……

「そんな顰めっ面しなくても大丈夫だよ。今回の件は騎士団が主導して調査するからさ。それに、君は訳ありで帰ってきているんだろう？ そっちに集中するといいいよ」

「おお、そうか！なんだか仕事を押し付けたようで悪いな！」

「全く、現金だね君は」

やれやれと肩をすくめて苦笑いをするスザク。

こういう貴族のプライドが関わる系の仕事の面倒くさは計り知れないのだ。その仕事をしなくていいとなれば喜びもするだろう。少なくとも胃痛の原因が一つ減って俺は嬉しい。

それにしても、『訳あり』とか『そっち』とかやけにボカした言い方をするな。一体どこまで情報を掴んでるのやら……コイツの事は気にするだけ無駄だろうが、色んな意味で厄介極まりない……

「まあ、俺の方も気を付けては見る。と言つても、偶然ばったり取引現場を見つたりなんてしないだろうがな」

「はは、頼もしいね。犯人検挙の報告を楽しみにしているよ」

軽口を叩き合い、もたれかかっていた壁から離れる。

「さて、時間も限られてるんだ。さっさと仕事に戻るか」

「そうだね……ああ、そうだ。チェックはもう終わりかけだろう？ それが終わってからでいいから、僕の仕事を手伝ってくれないかい？」

「えー……」

時間いっぱい使ってゆっくりと作業するつもりだったのだが……まあ、俺のせいで遠征に駆り出される事になったんだし、これくらい手伝ってやるか。でも、コイツのせいで迷惑被る事も多々あるんだよな……

「……………はあ、いいぞ。何をするんだ？」

「随分長い葛藤だったね」

「お前マイナス要素が多いから悩むんだよ」

「そんなにハッキリ言っちゃうの!?!もうちよつと、こう…オブラートに包むとか……」

「ははっ、お前にそんな他人行儀な事を言うはずないだろう？」

「親しき仲にも礼儀ありじゃないかなあ!?!」

「別に親しくないだろ」

「親しいよね！5年の付き合いだよね!!」

「そう言えば5年もヘタレてるのかお前……いい加減に玉砕してきたらどうだ？」

「……あと5年は欲しいかな……」

「随分と長い葛藤だな」

騎士団長に早く告白してしまえば良いのに。なんて思っているが、この顔面Sランクの色男はあろう事か「告白されるのには慣れているが告白の仕方が分からない」などとほざいている。

悩むのはいいが、いい加減長すぎてイラツとし始めてきたんだよね……5年も目の前でウジウジとされる流石にそう思う。

「そ、それはさておき！仕事だよ仕事！」

「ああ。で、俺は何をすればいいんだ？」

「実は、撮影係を任されてね。準備に使った資材の撤去と、予備を控える室に使いやすいうように置いといてほしいんだ」

「また面倒な……ん？やけに良いカメラだな」

スザクが取り出したカメラを見ると、魔王が使っていた物よりも数段良い物と分かる。

というか、最先端の技術が詰まった最高級カメラだとかテレビで言っていた気がする……少なくとも3桁万は軽くするほどの金額だ。

よくケチな財務省からこんなカメラの経費が降りたな……

「あ、分かるかい？高かったんだよこれ」

「え、お前の私物かこれ」

コイツが盗撮盗聴のため大量のカメラやマイクを持っているのは知っていたし、オタク気質な所もあるのは知っていたが……よく手が出せたなこんな物。

「臨時収入が入ってね。それに、前のカメラもガタついちゃって、ちょうど良い替え時だったんだよ」

「ついこの間も新調してなかったか？」

「あー……あれはちよつと無茶な使い方をしちゃってね。防水を過信しすぎちゃったんだよね……」

「水にでも落とした…の、か……」

「どうかしたかい？」

話していて、ふと脳裏で何かが引っかかる。

点と点が線で繋がる。

……推察の域は出ないが、コイツならやりかねないし、なにより可能なんだよな。

「……そう言えば知っているか？俺の写真集が出回っているらしい」

「君は人気だからなあ」

「中を改めたが、男風呂に入らないと撮れない画角だったんだよ。俺はてつきり《遠見》の魔法の悪用だと思ったが、あんな人気な風呂場に防犯の魔法がかかってない訳がないよな」

「ず、随分と気合の入った盗撮犯がいんだねえ……」

「そう言えば、お前温泉旅行にカメラ持ってきてきたよな？防水関係で壊れたと言えばそこか？あとそのカメラ、最高級の物だろ？数百万は下らないはずなんだが……臨時収入で買うには高すぎないか？こう何度もカメラを新調しているなら金もないだろう？何百万の臨時収入を一体どこからどう得られるんだろうな……」

「……………」

沈黙のまま目と目が合う。

スザクは貼り付けたような笑顔をしており、俺は訝しむような目をしているんだろう。

スザクはスツと何気ない動作で壁から退くと、クラウチングスタートの体制をとって――

「あ、僕ちよつと部下とお話があるからまたね！」

「逃すか待てゴルア!!!」

あのセミヌード写真集、やっぱりお前が犯人かよ!!!!

## 第18話 胃痛パーティー、その1

スザクを追いかけていたらパーティーが始まってしまっていた。バカな事をしてる場合じゃ無い。急いで向かわないと……!

多少遅れても「少し手洗いに」とでも言っておけば良いが、遅れすぎるとネチネチと嫌味を言われる。魔王のフオローで気が気ではないのに、さらにクレーム処理も重なると最悪の事態<sup>魔王のうっかり</sup>を処理しきれない可能性もでてくる。

そう思い、途中で切り上げて会場へ向かった。  
すると――

「どこ行つてたのよ!パーティーはもう始まつてるの…よ……」

パーティー会場の扉の前。

えらく不機嫌な姫様が仁王立ちで居た。それはもう、視線だけで人を殺せそうなほどに怒っていた。

「す、すみません。遅れました……ですがこれには深いわけが……!」

「な……」

「な?」

「なんでさつきよりボロボロなのよ!?!」

「ボロボロ……?」

姫様の言葉で、そこにあつた鏡を試してみる。

右袖は千切れ、服は所々破れ、全身土埃で汚れている。格好だけ見るとスラム街にでも居そうなほどにボロボロだ。

追いかけるのに夢中で気が付かなかつた……

「あー……実は虫退治をしていますが……」

「虫退治でここまでボロボロになるの!?!」

「最近の虫は物騒なんですよ」

「どんな虫よ……」

投げナイフを大量に使つてくる虫<sup>スザク</sup>です。追い詰めると爆弾も使つてきます。

捕まえる難易度が高い癖に捕まえても毎回証拠隠滅済みなのが腹



立つんだよな……今回もどうせ証拠は無いだろうし、早い所闇市に行って非公式グッズを販売している店舗を一斉検挙した方が良さだろう。

それはそれとして一発殴っておきたいしあのカメラを叩き割りたい。

「はあ……まあいいわ。それよりも着替えどうするのよ？今から用意して時間は大丈夫かしら……」

「あ、それは大丈夫です。もしもの時に備えて会場の近くに服の予備をしまっているのですそれを」

「どんな時を想定してるのよ」

「主に暴れた魔王を取り押さえた時を想定しています」

「ああ……」

なんとも言えない表情をする姫様。

魔王ならしかねないけど、実際に暴れられると困るし、暴れられたくないなあ……と言った感じだろうか。俺も全く同じ考えに至ったから分かる。

まあ、パーティーの礼儀作法は教えたし、武器の類は持ち込まないように再三言い聞かせたので大丈夫……のはず……たぶん……

そんな事を考えていると、姫様は何かを思い出したようにハツとした表情をする。

「あ、そうだわ。クリフに言う事があったんだった」

「言う事ですか……パーティーの事ですか？」

「ううん、違うわ」

姫様はキョロキョロと誰もいない事を確認すると、しやがむように手招きをして、そっと耳に近づくと――

「――2回目の決闘が決まったわ」

「っ……」

小声で耳打ちされた言葉に思わず息を呑む。

ついに、と言えば良いのだろうか。運命の分かれ道、もう負けられない戦いの火蓋が切って落とされようとしている。

「その時が来たらクリフも頼むわよっ」

「ええ、どんな事でもお任せください！」

「頼りにしてるわよ」

姫様は穏やかな顔でクスリと微笑む。

それに釣られて、俺も頬が上がってしまう。

恐らく、姫様は見つけたんだ。俺なんかでは見当もつかないが、あの性能だけは一級品の魔王に勝つ何かを。

「つと、話し込んでちゃいけませんね。時間も押しているので自分はこちらで……」

「ま、待ちなさい！」

予備をしまつてある部屋に行こうと踵を返すも姫様に止められる。

「わ、私に何か言うことはないかしらー！」

顔を赤くしながら訴えるような視線を向けてくる姫様。

何か言う事……ああ。

「そうですね。そう言えば、キッチンと言わないとダメですよね」

「そつ、そうよ！こういうのはちゃんとしなきゃダメなの！」

姫様の真正面に立ち、向き合う。

姫様の目を見て、ゆっくりと腰を曲げて……

「遅刻してすみませんでした。以後このような事がないよう気をつけます」

「ちがーうーう!!」

「ええ!？」

謝罪をしたらキレられた。

えつ、パーティーに遅れた事の謝罪じゃないのか？あんなに顔を赤くして怒っていたしてつきり……

「そうじゃないわよ！もつとこう、あるじゃない!？」

「そう言われましても……」

「ほら、見て分からないの!？目、付いてるの!？」

信じられない！と言わんばかりに激昂する姫様。

見て……?そう言われて姫様を頭のとっぺんから足の先までじっくり眺めてみる。うーん……

「ええと、いつも通りですが……」

「い、いつも通り!?本気で言ってるの!?!」

「?ええ、まあ……」

「っ……!わ、分かったわ。私がバカだったのね……!こうなったらクソボケでも理解できるように骨の髄まで——」

「いつも通りお可愛いですよ?」

「んう……!そ、そう……」

それだけ言うと、姫様は顔を背けて黙り込んでしまった。よく見ると耳まで真っ赤だ。

これは……途轍もなく怒ってる……?それに何か末恐ろしい事も言ってた気が……

「あ、あの……大丈夫ですか?」

「も、もういいわ!早く行きなさい!」

「ですが……」

「いいから!早く!!行って!!」

「は、はい!失礼しました!」

全速力で着替えのある部屋に向かう。

これは完全に怒ってるなあ……呆れてものが言えないとはこう言う事なんだろう。

冷静に考えて、王族に「可愛い」とかダメだよな。気をつけよう。



あらかじめ用意しておいた《クリーン》の使い捨てマジックスクロールを使い、シヤワーの時間を短縮できたおかげで1分ほどで会場に着く事ができた。

……マジックスクロール1つで10万ゼニーしたんだが、経費で落ちるかな……落ちると良いな……

そんな事を考えながら、息を整え襟を直す。

そして扉に手をかけ……ようとした瞬間、勢いよく扉が開き自分の鳩尾に勢いよく何かがぶつかった。

「ぐうっ?!……い、急ぐと危ないですよ……って、姫様?」

貴族相手に失礼な態度を取るといけないと思い何とか取り繕ったが、なんと飛び出してきたのは姫様だった。

「慌ててどうかしましたか？」

「た、たただ大変よー！」

「大変……まさかー！」

姫様の取り乱し様で、うつすらとだが察した。

魔王が何かした、もしくははする直前……！

くっ、少しでも目を離したのはミスだったか。部屋に迎えに行つて同伴して監視下に置いておくべきだった……！クソツ、赤ん坊よりも目が離せないなアイツは!!

会場に急いで入るも、明らかに会場の雰囲気普段と違う。誰もこちらに注意を向けない。会場の真ん中に視線を釘付けにされている。

しかしなんとというか、熱狂や狂乱と言った雰囲気ではない。どちらかと言うと、アイドルの握手会に並ぶ人の雰囲気似ている様で……

「あれよー見てー！」

姫様が指差す所に魔王が――

「プロメア殿とおっしゃいましたか、なんとお美しい……それに、少し話ただけで分かる知性、言葉遣いから分かる人間性。そして、己の記憶を引き換えに勇者殿を助けたとか……おお、なんと高潔な方なのでしょう。あなた様のような素晴らしいお方と会えるとは思いませんでしたよ」

「ありがとうございます。そう言っていただけとお世辞でも嬉しく思います」

「お世辞だなんてそんな……私はこう見えても正直者でして」

「ふふ、お上手なのですね」

――― 集団の中心に佇み、まるで深窓の令嬢のような穏やかな笑みを浮かべていた。

周りの貴族達も、心の底から嬉しそうに……それはもう、今まで見た事がないような笑顔で魔王と会話していた。

ええ……なにあれ……

## 第19話 胃痛パーティー、その2

魔王が人だかりの中心にいた。それも優しげで、儂げで、吸い込まれる様な微笑みを浮かべて。

それがどうも可笑しくて、違和感で……俺と姫様はこのパーティー会場で二人、その様子を遠目で見ながらなんとも言えない顔をしていた。

「アイツの普段を知ってる分、なんだかすごく違和感があるというか……ぞわぞわするというか……」

「分かります……」

本当のアイツはもっと、粗雑で悪辣で唯我独尊的な腕っ節だけで全部何とかなると思ってるし実際どうかしている様な、そんな頭のネジが振じ切れている奴だ。

それがこう令嬢の様な態度をしているのを見ると……なんというか、圧倒的違和感。もはや詐欺では？ と思うほどだ。

一体何がどうなってるようになったんだ……？

「おや、クリフ様ではありませんか。お久しゅうございます」

「あ、ああ。タダノ・モブー様。お久しぶりです。ところで、つかぬ事をお聞きしたいのですが……アレは一体……」

魔王を指差しながら、ちやうど話しかけてきた貴族に問いかける。

「おお！ プロメア殿の事ですな！」

「プロメア『殿』？」

「あれほど素晴らしいお方は初めて見ましたよ！ 記憶を無くして尚あの佇まい。私の目が節穴でなければ、あのお方は記憶を失う以前はどこぞの王族だったのでしょうか！ 他の方も少しでも繋がりを持ちたいと考えているのか、ああしてお話をしているのですよ」

「ああ、それである人だからが……」

「不思議と目で追ってしまいたくなるお方ですからな。おおっと、私もプロメア殿とお話したい事があるんです。失礼しますね」

小首を傾げる俺を気にも留めず、この場のできる限りの早足で魔王の下へ向かうモブー。

なんというか、彼の目が節穴とは言えないが……微妙にカスッてはいるが……

「魔道具にご興味がおありでしたら紹介したいものが……」

「こちらのワインは私の領地で生産されたもので……」

「ぜひ、今度我が家の食事会に……」

「ふふ、ありがとうございます」

アレ、完全に擬態だしなあ……

魔王を中心に和気藹々と話している様子を見て、どうしてこうなつたと頭を抱える。

目立つとダメだと言いつ聞かせていたはずなのだが……理解して……ないはずがないか。

何があつたんだ本当に……

「目立つなどは聞かせてたはずなんですがね……どうしますか姫様？

一旦退かせますか？」

「……いえ、それはやめときましょ。あれじゃ無理に下がらせると逆に目立つっちゃうわよ」

「……それもそうですね」

二人してため息を吐く。

面倒を見なければいけないというだけでも疲れるのに、こうも突拍子もなくこちらの想定外の動きをされるとな……もう手に負えないというか……

「み、みんなプロメアに気を取られて暇ね！」

「そうですね……パーティーでこうも人に話しかけられないのは久しぶりですよ」

「暇なら、ゆっくり食べながら話でもしましょ！ふたりで！」

「ええ、そうしましょうか」

「そっ!!」

「ど、どうしました？」

大きな声に驚いて振り返ると、姫様は強張った笑顔を浮かべてい

た。

こちらの視線を感じてか、仕切り直すようにこほんと軽く咳払いをする。

「そ、そそそういえばこのドレス、実は肩周りがキツイ上に袖周りの布の問題上一人で食べることが難しいのよ。その、だから……わっ、私の食事のサポートをさせてあげるわ！ あ、アンタがよければだけれど……」

「？ それくらいなら構いませんが」

「そ、そう……ヨシッ！」

今日の姫様、なんだか妙に落ち着きがないな……魔王の対応に疲れでも出たのだろうか？

「ですが、魔王から目を離すのも怖いですね」

「上のラウンジに行きましょう。そこなら広間の様子も見れるわ」

「ああ、それなら安心ですね」

「じゃ、じゃあ早速行くわよ!!」

俺の手を引き早歩きで前を歩く姫様。

そんなにこの場から立ち去りたかったのか。まあ気持ちは分からなくもない。むしろよく分かる。魔王も貴族も面倒くさいからな。

しかし、このまま行ってしまうって大丈夫だろうか？ そう思い、魔王のいる人だかりに視線を向ける。

今、魔王と一瞬目があつたような……？ いや、気のせいかな。育児疲れと言うやつかな……

「どうかしたクリフ？」

「ああ、いえ……やはり少し不安で……」

「心配しなくても大丈夫ですよ。周りにあれだけ人がいるんだし、下手な事はしないでしょ」

「……それもそうですね」

眉間を揉みながら強張った体をほぐすように大きく息を吐く。

……今までが予想を超える最悪だったからか、気を張りすぎていたのかもしれないな。姫様の言う通り、流星にこれだけ人がいれば大丈夫だろう。魔王は頭畜族だがバカではないし、下手な真似はしまい。

「じゃ、じゃあ早く上に——」

「ところで、勇者とはどのような関係で？」

「それは……ふふ、ないしよです」

「おや、これはこれは……勇者も隅に置ませんな」

「あら、誤解ですわ。勇者様とはただ手を取り合った仲で——」

そんな矢先にとんでもない事を話し始めた。しかも丁寧に顔を赤らめてモジモジと、まるで恋する乙女のような顔をして。

「姫様！ 俺は今からあのバカがボロを出さないうちに引き剥がします！ 貴族の対応を!!」

「任せなさいー!」

姫様に声をかけ、急いで魔王の下に駆け出した。

アイツ、本当になにやってんだ!! 言うなつて言つてただろ!! 言うこと聞かないし無茶苦茶やるし……!!

ああ、もう! 赤ん坊よりも目が離せないなコイツは!!!



「やってくれたな……!」

あれからなんとかして貴族たちを引き離し、魔王を上のレストランに連れてきた。

「お前、本当に……! 面倒を起こすなど、目立つなどあれほど……!」

お前なあ……っ!!」

「まあまあ、これでも食べて落ち着け」

「誰のせいでおんな……っ!!」

……魔王の手を掴んで無理矢理連れて行く時の貴族たちの生暖かい目がフラツシユバツクする。

これに対して下手に弁明したところで「うんうん、分かってる分かってる」という対応をされるのは目に見えていたため、無視してきた。

だが、弁明の余地もなければ妙な勘違いをされ続けるこの現状は非



常に腹が立つ……！　なぜ俺がこんな目に……！

「すう……はあ……ひとまず、どうしてあんな事を言った。弁明くらいは聞いてやる」

「あんな事？」

「俺とお前が密な関係にあるとかそういうことだ!!」

「嘘ではないだろう？」

「真実でもないがな……!」

「そう荒ぶるな。あれには天界よりも高く、冥府よりも深い訳があるんだ」

「なんだと？」

魔王が目を伏せ気味にそう言う。そのシリアスな表情は嘘をついている様には見えない。

短い付き合いだが、魔王がバカではないことはよく分かっている。つまり、この一見考え無しの大馬鹿野郎がする行動にも何か訳があるはずだ。

「それはな……」

「それは……」

一体どんな訳が……

「なんか勇者と姫を見てると無性にイラッとしてつい」

「ぎげんな」

ただの大馬鹿野郎じゃねーか、何が深い訳だよ……

「私自身も驚いた。私の口が勝手にな」

「その口を二度と利けないようにしてやろうか……!」

「ま、マウストロマウスでか？　そ、そそそれはいささか気が早いというか……!　ゆ、勇者がどうしてもというなら私も覚悟を……!」

「……もう、黙っててくれ……」

疲れた……パーティーが始まってそう時間も経っていないのにも関わらず、もう横になりたい気分だ……何もかもこの魔王とかいうやつが悪い……魔王城に帰ってくれないかな……

……おい、なに口を突き出してんだ。目を瞑るな不安と期待が入り混じった様な顔をするなにじり寄ってくるな腰に手を回すな!!  
くそつ、フィジカルモンスターめ。どうしてレベルが高いやつはこうも実力行使に躊躇がないんだ!!

くつ、パーティー会場で余り目立った行動は避けたかったが……そうも言ってられそうにないな!

「離れる!!」

「ああー!」

強引に腰で投げ、上着を脱ぎ捨てることにより引き離す。習っててよかった騎士団長の本気<sup>い</sup>タツクル<sup>グ</sup>の防ぎ方。あれのおかげで抜け出せた窮地は数知れない。

それよりも投げられた瞬間に自分から飛んで空中で捻りを加えて着地する魔王に辟易とする。割と本気で投げたんだが……

ここまでパワーやテクニクどころかほとんどのステータスで負ける相手にこの国の偉い奴はどう勝てると思ってたんだろうか。

「私が投げられるなんて……! 流石だぞ勇者! それでこそ私が見込んだ男だ!」

静かだと思ったら、どうやら感激のあまり言葉を失っていたそう  
だ。興奮気味に目を輝かせている。

「……この国の騎士団なら割と必須技能だから俺が特別と言うわけではない」

「そんな謙遜するな。ステータスに差があるのにも関わらず投げられた……ふふ、それが嬉しいんだ」

「……戦闘狂め」

「なっ……! ぞ、そんな急に褒めるな! ビックリするだろう……!」

か細い声で照れくさそうに顔を背ける魔王。表情は見えないが、耳まで真っ赤になっていた。

理解できない感性だが、魔族だからとしか言えないんだろうな……  
戦闘狂が褒め言葉かあ……文化の壁は厚いな……

「はあ、もう降りるぞ」

「ま、待てー！」

「待たん。というか待てん。ここは鍵がある部屋でも立ち入り禁止エリアでもないからな。今は姫様が貴族たちを抑えてくれているが、その内抑えきれなくなつてここに来るぞ」

「じゃ、じゃあ一曲だけ踊つてくれないか？ その、何と言うか……ええと……そう、少し不安なんだ！ お、覚えてないところがあるかも知れなくて……」

「パーティーに関する教養は一発合格して撮影会しただろうが。問題ない。それに、もし忘れたとしても相手の呼吸に合わせてそれっぽいステップを踏めばそれっぽく見える。お前なら余裕でできるだろう？」

「できるが……余裕だが……そ、そうじゃなくてだな……」

チラチラと俺に視線が向けられる。

魔王は不安気味の、少しガツカリしたような顔をしていた。

……俺だつて鈍感じゃない。むしろ男女の機微には聡い方だろう。相手を魔王だというフィルターを一旦外して考えれば、答えは明白だ。

「はあ……曲が始まったら1曲だけ踊つてやる」

「っ……」

「だから、騒ぎになる前に降りるぞ」

まあ、ここらがせめてもの譲歩だろう。

## 第20話 胃痛パーティー、その3

ラウンジから下に降りると、やはりと言うべきだろうか。ニヤニヤと口角を上げた貴族達が押し寄せて来た。

「おやおやおや、勇者様じゃありませんかあ。2階で一体何を？」

「男爵殿、こう言うのを聞くのは野暮ですぞ」

「おおっと、私としたことが。歳をとるといけませんな」

「ふふふ……擲揄うのはおやめなさい。でも若いって良いですねえ」

……うざい。本当に、うざい。

下町で初々しい男女を擲揄うジジババと同じ雰囲気を感じる。

昔は「大変そうだな」と他人事だったが、当事者になるとたまった物じゃない。それもこうも的外れな事で擲揄われていると特にな……

後ろに居る姫様に「なんとかなりませんか？」と念を込めた視線を向ける。しかしやはりと言うべきか、姫様はため息混じりに首を横に振る。

やはり姫様の力を持ってしてもこの状況をなんとかするのは難しいか。

それにしても、姫様の眉間に皺がよってるような……疲れているのだろうか？それとも目立ちすぎてしまったから呆れてるのだろうか？

「勇者殿！ 真実の愛の探究、真に苦難の道と思われませんが応援いたしますぞ！」

「い、いえ。我々はそういった関係では……」

「ふふ、そう恥ずかしくがらずに。良いではありませんか、禁断の恋というわけでもありませんし」

「あ、あの……」

……蹴散らしたい。実力行使を持ってこの恋バナゾンビ共を誅罰したい。

だがそれはできない。相手が貴族で俺が平民だからだ。命拾いし

たな……！

しかし、この状況はあまりよろしくないな。パーティーが終わるまでに有耶無耶にしなければ変な噂が拡大してしまう。「目立たない」という目標を達成するためにもなんとかしなければ。……あと、精神衛生的にも。

くっ、俺がこんな目に遭っているのに、問題を起こした張本人は何をしてるんだ……！

「へへへ……」

「……あんた、なんでそんなに上の空なのよ。ちよつと気持ち悪いわよ」

「……あつ、いたのか？ふふっ、悪いな……いや本当に悪いな。うへへへ……」

「何言って……ま、まさか！」

「ふふっ、どうかな」

「……そのリアクション的にリーチはしたけどゴールはまだね。ゴールしてたなら煽り散らしてくるだろうし……話さない！ 上で何があつたの!？」

魔王は能天気にご飯片手に姫様と話していた。

遠くの壁際で姫様と話しているため、何を話しているのかよく聞こえないが姫様が鬼の形相で荒ぶっていた。今にも掴みかからんばかりの雰囲気だ。対する魔王は上の空で不気味な笑みを浮かべるばかり。

そんな不気味な二人に近づけないのか、貴族たちも遠巻きで見つめるばかり。

目立ってはいるが……まあ、貴族と話してさっきの二の舞にならなただけマシか。

そんなことを考えている間にも、貴族達による詰問……言い方を変えらるなら、野次馬根性全力のバカ共を捌いていく。

しかし、話は今のところ全くそれる気配がない。貴族達が今一番聞きたい話題が固定されてしまっている。即ち「彼女とはどういう関係で？」という話題に……！

何か、何でもいい。誰でもいい。この際ハプニングでもいい。この流れをぶった切るような何かを……！

「勇者とあろう者が色恋沙汰に現を抜かすなど、人類の危機に良い身分だな」

空気が凍る。

和気藹々とした楽しげな雰囲気は一変。緊張が孕んだものとなっていた。

「久しいな勇者。前回の魔王討伐前祝い以来か」

「……財務大臣殿。お久しぶりです」

「ああ、およそ10日振りだな」

彼はふくよかな体を揺らしながら、嫌味を交えて近づいてくる。

財務大臣という貴族の中でも上位にある上、姫様や騎士団長と違い、険のある雰囲気も相まって他の貴族も萎縮してしまっている。

こ、これは……………

これはありがたい！ 感謝してもしきれない！

願いを叶えるにしてもこんないい方向で叶えてくれるとは！ 今なら財布の中身全て寄付しても構わない気分だ!!

ぶっちゃけてしまえば、野次馬根性恋バナゾンビよりも棘のある財務大臣の方がいなしやうい。扱いも比較的に楽だし、面倒も少ない。

「意気揚々に魔王討伐に向かい手柄もなく帰って来れるとは思わなかった。流石は勇者だな」

「目に見える手柄こそありませんが、情報は持ち帰れました」

「ふん、そんな事は案山子でもできよう。貴様の無能さは身に染みて知っていたと思っていたが、まさか想定を超えるとはな」

ふん。と鼻を鳴らしながら、ワインを静かに傾ける。

「ならば、勇者は必要無いだろう。平民は大人しく平民に相応しい振る舞いをすればいい」

久々に聞いたな、財務大臣の勇者ヘイト……

財務大臣は純血主義者で有名だ。城に平民の兵士が入る事も難色を示し、貴族以外に指揮官や役人になる事にも顔を顰めるほどの徹底ぶり。

故に、平民である俺にも当たりがきつい。

「勇者が不要な世になってくれるのを願っているのですが、どうにも乱世のようでして……」

「それを解決するのが勇者の仕事だろう」

「それはご尤も。私の不得の致す所です」

淡々と頭を下げる。

こういう手合いの貴族は多いもので、パーティーでも嫌味全開で絡んでくる。しかし、そういう貴族は嫌味だけで実害はない。

人類では割と強者側と自負する俺に危害を加える事の難しさ、勇者という立場に危害を加えることが露見してしまった時のリスクなど。それらを鑑みるに、俺に直接手を出す事は割に合わないのだろう。だから、こうした嫌味やちよつとした嫌がらせで溜飲を下げる。

ふう……にしてもこれで一安心だな。こうして嫌味を聞き流しているだけでパーティーが終わればへい、おん……

「は？」

頭を上げると、バキバキに目がキマっている魔王が拳を振りながらズンズンと近づいてきていた。

## 第21話 胃痛パーティー、その4

あれ、おかしいな……目にゴミでも入ったかな？ それか疲労からくる幻覚か？

はっはっはっ、やはり修羅のような顔をして凶悪なプレッシャーを放つ魔王が的確に財務大臣の頭蓋骨を粉碎するようにジャブのフォームを確かめながら近づいてきてるわけないだろう!! これは悪い夢だったんだ——!!

なんて言えればいいが、残念ながらこれは現実。悪夢より酷い現実だ。

クソッ、一難去つてまた一難……! 魔王め、大人しくしていると  
いう機能はないのか!? 不良品扱いで魔王城に返品してやろうか  
……!!

「おい、なんだ貴様その顔は。ワシをバカにしてるのか?」

「いつ、いえ! 少し口内炎が爆発しただけですお気になさらず!!」

「ふん、その程度の痛みで顔を顰めるなど……」

「30個ほど爆発しただけです!」

「それは歯医者へ行った方がいいんじゃないか!」

「いえ! お気になさらず!!」

「そ、そうか……」

反射で会話するが、そんなことよりも魔王が気になって仕方がない。

なんだその拳は! 殴る気か!? 殴る気だな!! お前のデコピンでもオーバーキルなのに拳を振り抜いたら一般人なんて跡形も残らんぞ!?

「こほん……あー、貴様はそもそも——」

よく見ると、姫様が腰にしがみついていた。最後の理性が働いているのか、怪我させないよう魔王の動きが止まっているのが幸いだ。

姫様も危ない事をしないでくださいと言いたいが、今はそれどころじゃないし実際助かった……!



「勇者の支援金も莫大な――」

今すぐパーティーから離脱したい。魔王の首引つ掴んで一刻も早くこの場から逃げ出したい。しかし、それは悪目立ちしてしまう。それだけは避けたい。

「こうも役目を果たせないなら他に予算を――」

ならば、魔王を諫めるしかないのだが……精神構造も思考回路も謎が多い魔王に付き合いの浅い俺が宥めるなんてできるわけもない。そして当然ながら、ここには魔王の扱いに長けた側近連中はいない。つまり怒りを鎮める手段はないという事だ。

くつ、こんな事になるならババアの首引つ掴んでも連れてこれば……！ いや、それはそれで面倒になる気がするな……

無い物ねだりはできない。この場を円満に、そして無事に収めるには……！

「いつそ全員気絶……コラテラルダメージ……」

「聞いているのか貴様！」

お前の頭が潰れたトマトにならない様に今必死に考えてんだよ！  
マジで少し黙れ銭ゲバトド!!

くつ、落ち着け……！ 全員腹パンは最終手段だ。どうする、魔王を窓から突き落としてパーティーから強制退場させるか……

「まあまあ、財務大臣殿も矛を納めてください。ここは祝いの場ですよ」

「……アリュードか」

必死に頭を回していると、この剣呑な雰囲気から青年が割って入ってきた。

彼は確か、財務副大臣の男だ。

「お久しぶりです勇者殿。またこうしてお会いできて嬉しく思います」

「帰還程度で祝いの席など……」

「財務大臣殿」

「……ふん」

財務副大臣が諫めると、財務大臣は顔を顰めるだけで何も言わずに

会場から出ていった。

……たすかった、のか？

「申し訳ございません。せつかくのパーティーを台無しにしてしまい……」

「いえ、大丈夫です。お気遣い感謝します」

——シャア切り抜けたあ!!! 財務副大臣くんナイスウ!!!

と心の中でガッツポーズを決めた。

ありがとう……！ 君は人類の救世主だ、本当にありがとう財務副大臣くん……!!

と、いけない。そう言えば魔王は？

軽く辺りを見渡すが、先ほどのような暴力的な魔力放出も感じないし、暴れてる様子も見えない。

静かという事は落ち着いたという……いや、静か？ そういえば財務大臣は会場から出たよな？ まさか追いかけたとか……

「すみません。お話ししたいのは山々なのですが、取り急ぎの用があります……失礼します」

まずい。もし追ってるなら財務大臣が潰れたトマトになりかねない!!

くっ、ケチで勇者の経費をガンガン削減しようとしてくる所や貴族特有のウザさがあつて「あいつの小指に千本ノックしたいな」とか思った事もあつたけど死なれるのはマズイ。あんなのでも一応財務大臣。死なれると仕事が滞る。

待つてる財務大臣、今助けるぞ——!!

「少しお待ちください」

「っ……な、何か御用でしょうか？」

「勇者殿には大変申し訳ないのですが、一つお願いがありました……」  
「お願い、ですか……」

駆け出そうとした瞬間に財務副大臣に止められた。

なんだか嫌な予感がする……面倒ごとの予感だ。

しかし、断る事はできない。貴族の「お願い」は平民にとって「命令」だからだ。

「はい。……勇者殿は遠征の件を知ってますか？」

「遠征の件……ああ、ご禁制の」

「はい、それです」

「コソコソと周りを気にするように囁くような小声で呟く財務副大臣。」

「それについての調査……闇市を見てきて欲しいのです」

「闇市を？」

「金銭の動きが少し怪しくてですね……ですが摘発するには確証が足りず、騎士団を動かすのは動きが派手すぎて勘付かれます。そこで、個人で自由に動ける勇者殿にお願いしたく……」

なるほど。怪しい所を

「分かりました、後日調査します」

「本当に申し訳ございません。魔王討伐でお忙しいのに……」

「いえ、大丈夫です。お気になさらず」

本当に今は割と暇だからな。以前の貴族の依頼と魔王討伐の旅で板挟みされ休みが消滅していた日々には比べれば、この程度の仕事なんて仕事の内に入らないさ……

軽く財務副大臣に別れを告げて、急いで出口を目指す。ギリギリ優雅な歩行速度で人混みをかわす。

くっ、どうかりザレクション可能な範囲でなんとかあってくれ  
……!!

「殴るだけでは解決しないのか……そうか、魔族とは違うのだったな  
……それはそれとして殴り合いが」

「やめて」

「む……では、軽く後頭部にゴミをぶつける程度で」

「やめて」

「じゃあ」

「やめて」

「……むっ」

会場から出ようとしたその時、すぐ近くに姫様と魔王が居た。

姫様は疲れ切った様子でぐったりとしていて、魔王は拗ねた様にや

け食いをしていた。

「む？勇者じゃないか。急いでいる様だがどうしたんだ？」

「…………いや、今解決した…………」

うずくまりながら重いため息を吐く。

結果的には良かったんだが、張つてた緊張の糸が切れて疲れが一気に来た。

本当に振り回してくれるなコイツは…………

「おい、急にうずくまってどうした？ 大丈夫か？ 肉食べるか？」

「いらぬ。それよりも姫様、これからの段取りなんです…………」

と、姫様に話しかけた瞬間。

どこからか「ミシツ…………」と、何かが軋む様な音が聞こえた。

「？どうしたのよ。虫でも居たの？」

「いえ…………今何かが軋む様な音が聞こえませんでしたか？」

「聞こえなかったけど？」

聞こえた気がしたんだが…………気のせいかな？

「気のせいならいいです。ええと、パーティーの段取りですね。これから『バキツ』…………バキツ？」

今度は間違いなく、明らかに何かが壊れる音が上からした。

上を向くと、天井に大きな亀裂が走り今にも崩れ始めようとしていた。

「…………は？」

思わず引き攣った声が出た。

い、一体何が…………いや、そんなことより！

「姫様、失礼します！」

「え？ え！？」

「この会場はまもなく崩壊します！ 騎士の誘導に従って逃げてください！！」

姫様の了承を待たず、彼女を抱えて走り出す。

騒ぎが広がりすぎない様、騎士に誘導を任せて俺は会場を後にする。

会場を出る頃にはシャンデリアやスピーカーなどが爆発し始めて

いた。

「ど、どうして!?! ここは魔道具で制御してて下手な災害があっても大丈夫な部屋のはずなのに!?!」

くそつ、なんだ。一体誰が何の目的で……まさか、財務大臣か?

この事故の寸前で会場を後にしたのは彼だけだ。タイミング的には彼が最もらしいのだが……動機が一切思い当たらない。

しかし、あんな次々と物が壊れたり爆発したりするのは人為的なものトシカ……

魔道具で制御?

「……姫様、あの部屋の物つてほとんど魔道具でできていますか?」

「そ、そうだけど……ちや、ちゃんと建築法の安全基準をクリアした上で最高品質の物を使ってるわよ! 急に壊れたりする様な不良品は使つてないわ!」

魔道具の部屋……壊れた物は、恐らく魔道具で開く事ができる天井、魔道具製シャンデリア、魔道具製のスピーカーやカメラなどだ。

魔道具は外から大きな魔力に当てられると壊れる事がある。と言つても、魔法使いの全魔力を注いで手のひらサイズほどの魔道具が壊れるかどうかだ。

しかし、ここには魔力が人と桁違いの魔王がいる。彼女の本気の魔力放出は、果たして人類の魔法使いの何人分に相当するのだろうか?

まあ、つまり。

「な、なあ勇者。もしかして、これって……」

「……後で説教」

「こ、今回は! 今回は不可抗力だ! 減刑を要求する!!」

「原因がはつきりしたからな、覚悟しろ……!」

結局は魔王のせいである。



その夜。

自室のバルコニーで一人。今日の疲れを吐き出す様に酒を飲んで

いた。

解析の結果、魔道具の魔力暴走による事故と判断された。事件の線も見ているが、ほぼ事故だろうと言われている。

つまり、魔王が疑われる線は薄いということだ。

きようはいろいろあつてつかれた……

疲れを飲み込む様に、グラスを一気に傾ける。

「はあ……前線じゃないのになんでこんなに疲れるんだ……」

「お疲れ様。はい、おかわり」

「ああ、どうも」

注がれた酒を機械的に口に運ぶ。

酩酊感が心地よい。このまま、泥の様に眠ってしまおうか……

そう考えたところで、ふと気づく。

この酒を注いだのは一体……?

「……姫様? こんな時間にどうして……」

「なによ。私が来たら迷惑だつて言いたいなの?」

「いえ、そんなことは無いですよ」

「……まあ、今日は疲れただろうし労いに来たのよ」

「それは……どうも、ありがとうございます」

「感謝しなさいよね!」

酒を注ぎながら姫様は不遜げだ。

俺を嫌つてるはずなのにここに来た理由は……恐らく、助けられた事に対するお礼的なものだろう。貴族社会は借りを作ると怖いから即返しが基本だしな。

「あなたも大変ね。休みなのに仕事入れられたんでしょ?」

「ええまあ。ですが、まだ暇な方ですよ」

1番忙しい時、それこそ前線と王城をシャトルランしていた頃に比べたらの話だが。

自分でもよく生きてたなと思う。多分もう一回したら発狂する自信がある。それほどの重労働だった……思い出しただけで気が滅入ってきた……

「あ。そう言えば姫様、お怪我はありませんでしたか?」

「怪我？ それはないけど……あつ」

「姫様？」

問いかけるも返事はない。

無言で俯き気味に顔を背ける姫様。時折り首を横に振ったりして挙動不審だ。

「あの……大丈夫ですか？ もしお疲れならもう休まれた方が……」

「いやっ、無事だったわよっ！ 怪我一つないしピンピンしてるわ!!」

丁寧に運んでくれたおかげで助かったわ!! 本当に、運ぶの上手ね

!! ありがとうねっ!!」

「え、ええ。無事で何よりです」

姫様は再起動したようで早口で捲し立てる。

うーん……お礼を言うべきだが王族のプライドで詰まっていたと言ったところだろうか？

そこで会話は途切れ、お互い無言の時間が続く。姫様は俯き気味で話さないし、俺から提供できる話題も特にならない。

貴族対応モードならまだ何とでも取り繕えるが、絶妙に距離が近い姫様に貴族対応モードをするとキレられるからな。「二度とその態度で私に接するな」と本気でキレられたのもいい思い出だ。

無言の気まずさを誤魔化す様に首の後ろに手を回し、何気なく上を見してみる。

「おお……見てください姫様」

「な、なによ」

「月が綺麗ですね」

「……今日は満月だったわね」

空を見上げると、月が出ていた。

先程まで雲がかかっていたいて気づかなかったが、綺麗な満月だ。

疲れた体に満月の光が染みる。不思議といい気分だ。

「そうね。こんなにもいい景色なのだし、一曲どうかしら？」

「……喜んで」

貴族っていい景色見ると踊るものだけ？ と思いつつも差し出された手を取る。

自室で練習以外で踊るのは不思議な気分だが……  
酒が入ってるせいか、悪い気分ではなかった。



## 幕間 第17. 5話 2度目の決闘はいかにして

時は少し遡り、パーティーが始まる前のこと。

「はあはあ……はあ……」

会場から少し離れた廊下で、金髪の少女が壁に手をつけて息を荒くしていた。

「く、クリフ……い、一生一緒って……!」

何を隠そう、彼女はグレゴール王国第三王女、ディアナ・フォン・グレイズロッドその人である。

彼女は先程に勇者クリフから伝えられた(捏造の)言葉を噛み締めていた。

恋煩いの乙女のような表情で、頬に手を当て身を振らせる。

「私と一緒にいれば癒されるってそう言うことよね? もうこれ告白よね!」

恋する乙女は強い。

脳がスイーツに支配されたシュガーブレインは突拍子もない結論を弾き出す。

事実、クリフは告白などしていない。ただ「(魔王と比べて)一緒にいると癒される」という事を伝えただけ。

その事に気づかないのは果たして幸せか否か。

現在、乙女の脳に占めるのは夢のような妄想の世界。彼女はそこでバージンロードを走っていた。

「はっ! そうだわ、こうしちゃいられない。お父様に結婚しますって言わなきゃ」

半分現実に戻ってきたディアナは走り出した。早く外堀を埋め切って差し切らなければと。

確かに、告白されたなら王への報告は必要だろう。現実的な対応だ。告白された事が妄想ではなければ。

しかし、そんな事は気づかない。彼女の中ではクリフに告白されたのは確定事項なのだから。

そうして王の執務室へ向かおうと、廊下を曲がろうとしたその時。

「きゃっ!？」

「おっと。廊下は走ると危ないぞ」

「いたた……ご、ごめんなさい。少し慌てて……」

人とぶつかり、少しよろけてしまう。

物理的なショックのおかげか、少し掛かり気味になってしまった。周りが見えてなかった。王族の振る舞いではなかったとディアナは自省した。

「ってなんだ淫乱オオクワガタじゃない」

「淫乱オオクワガタ!？」

反省して損したと言わんばかりにぺっと床に唾を吐く。

目の前の敵。内地でぬくぬくと外堀を埋めていたら突然現れた外来生物の淫乱オオクワガタ——魔王プロメア。

人類の敵だなんて、大それた事は言わない。ただの恋敵である……！

「さ、さすがにそれはひどくないか？」

「そんな事より、あんたなんでこんな所に居るのよ。もうすぐパーティー始まるわよ」

さりげなく話を逸らす。ディアナとしても、流石に淫乱オオクワガタは言いすぎたと思っている。それはそれとして恋敵に頭を下げるなど以ての外なのだ。

「え？ もうそんな時間か……しまったな。写真整理に熱中しすぎたか……」

「というか、あんた着替えは？ 向こうで着替えるところないわよ」

「あ……わ、忘れてた……」

「忘れてたって……普段着でパーティー出るつもりだったの？ 流石に温厚な貴族も嫌な顔するわよ？」

「す、すまない……」

「いいから行くわよ。遅刻は厳禁なんだから」

恥ずかしそうに、しゅんとした顔をする魔王。彼女の手を引き、着替えの部屋に向かう。

「全く。こんな調子でパーティー大丈夫なの？」

「ふふん、それについては心配はない。種族が違えど私は王族。それなりにパーティー経験もある。それに、そちらのパーティーの常識も勇者に叩き込まれた。心配は無用だ」

ドヤ顔で胸を張る魔王に、興味なさげに「ふーん」と返事をするディアナ。

「勇者に」の部分をやけに強調しながら教えられた事を自慢する魔王に、少しイラツとしながらも聞き流す。

（このクワガタ。そういえば人類の常識に疎いよね。パーティーも今日さつき教えられたみたいだし……）

——そうして聞き流してたディアナに、電撃の様な閃きが脳裏に浮かぶ。

（魔王は人類の常識、パーティーに疎い。私は人類のパーティーに詳しい）

点と点が繋がる。

（このパーティー。人類の常識に沿ったルールを元に勝負を仕掛ければ……！）

急速に脳を回転させる。

勝てる条件、負ける要素、有利な場……それらを考慮したルールを作るべく、思考を加速させる。

「——と言う風に勇者は」

「そんな事より、2回戦の内容決めたわよ」

「……ほう？」

低く、冷徹な声色。魔王はまるで見定める様な目でディアナを見る。

先程までクリフに教えられた事を乙女の表情で自慢していた魔王はいない。正しく魔族の王としての貌を覗かせる。

そんな魔王に一步も引かず、ディアナは口を開く。

「2回戦は……ダンス、踊りよ」

「……ほう？」

「安心しなさい。ただ踊って評価されよう、なんて勝負じゃないわ」

「……………」

ダンスでいかに勝つか、その事に思考にふけようとしていた魔王の視線がディアナに向く。

「この勝負は、『勇者と踊る』ことが勝利条件。勿論、暴力や脅迫なんて以ての外。無理矢理クリフと手を繋いで踊っても無効。クリフの同意の下で踊らなければならぬわ」

「……なるほど」

「それと、2回戦の内容はクリフに知られてはダメよ」

「……なぜだ？　勇者に内容を話せば、今回の勝負は私の必敗。私との婚約を嫌がる勇者はお前の手を取るだろうに」

自分に不利な条件を付け足したディアナに、魔王が怪訝な目を向ける。

それにディアナは呆れた様にため息を吐く。

「フェアな勝負で言い訳もできない敗北を与えないと、あんたは諦めないでしょ？　……それに、消去法で手を取らせて何の意味があるのよ」

「……そうか。お前は、存外良い奴なんだな」

「当然でしょ。私ほどの良い女、クリフでも放って置けないわよ」

服を着替え、部屋を出る。

「この勝負、貰うわよ」

「ふっ……安心しろ。3回戦の準備は不要だぞ」

乙女達はパーティー会場<sup>戦場</sup>に向かって歩き出した。

## 第22話 ハローワーク、グッバイホリデー

パーティーの翌日。

謎に踊って、謎に満足されて「なんだったんだあれ」となんとも微妙な気分で眠ったが、寝起きは清々しかった。そう、清々しかった。過去形だ。

「やだやだやだやだ!!!わーたーしーもーいーくーのー!!!」

「あの、姫様……闇市は危険なので……」

「やーいーだーいー!!!」

大声で地団駄を踏みながら抗議する姫様。宥めたり説得を試みるも効果がない。

どうやら、闇市調査についていく気だったらしく、朝からピクニック気分で楽しみにしていたそうだ。しかし、いくらなんでも危険と判断し、姫様と一緒にには行けないと伝えるとこうして駄々をこね始めた。

姫様視点で言えば、楽しみのお出かけをドタキャンされた様なものなのだろう。キレルのも分からなくもない。

こう言うキレ方を王族の姫にやられる平民の気持ちさを答えよ。(配点50点)

「ですから、騎士団が護衛できない以上姫様の身の安全の保証ができないのです」

答えは「命令と職務の板挟みで頭が痛い」だ。

いかに王族のお願いでも安全確保ができない以上首を縦には振れない。今回は街中などでは無く治安の悪い闇市。そんな所に供回りも無く王族など連れて歩けない。

というか、どうして闇市なんて危険な場所に行く気だったんだ……スリルを満喫したい年頃なのだろうか？

まあ、大変だがこういう事態には割と慣れている。姫様は時折こうして困るレベルのガチギレをするが、懇々と説明すれば理解はしてく

れる。納得するまで全力で駄々をこねるだけだ。

ふっ……この程度、狸ジジババ共の湿度の高い嫌がらせに比べたら屁でもない。可愛い子供のわがままだ。

——しかし、今回はこれだけではなかった。

「ふはははは!! 大人しく留守番をしてるんだな!!」

「はあ!? 調査だけならアンタ要らないじゃない!! 私が留守番するならアンタもすべきよ!!」

「私はな? 身軽な立場だし、下手に動くより勇者について回った方がなにかと外聞も良くてな? まあこうして調査の手伝いをする事になってるんだ」

「うぐぐぐぐ……!!」

「全くこうして身分上の問題で身動きができないのは可哀想だが、王族の責務と納得して留守番をしてると良い!! その間勇者のことは任せろ!! はーっはっはっはっは!!」

「グギガゴガギ……!!」

「あ、なんだまだ居たのか。もう部屋に戻っても良いぞ?」

「■\$%×●○!!!」

視線で人が殺せそうな凄まじい凶相で睨みつける姫様。対する魔王はニコニコと満面の笑みで煽る。

今回、魔王はなぜかついてくるらしい。

最初は断っていたものの、コイツの行動を制限する術が(物理的に)ない為、最終的にはこちらが折れる形となった。まあ、コイツなら闇市だろうとダンジョンだろうと竜の巣だろうと散歩と大して変わらないのだろうが。

付いてくるのは良い。もうこの際諦めた。だが、姫様を煽るな。収拾がつかんだらうが……!!

そう叫びたい。というか一回叫んだ。だが無意味だった。二人は止まらない。火に油どころか火薬が突っ込まれたような燃え上がりを見せている。

何をしても無駄だった。むしろ何かするとヒートアップした気がする。なんでだ。

まだ出発してないのにもう疲れた……調査後日に回したい……だが一応極秘の緊急任務扱いだから今日中にやらなければ……

……勇者辞めて田舎で畑でも耕してたい……

「ふん！ アンタなんか2回戦目負けたくせによくそんなに言えるわね！ 負け犬の遠吠えかしら!!」

「えっ」

今なんて？

「な、なにっ!? 私が負けた……!?!」

「ふふん。昨日の夜、パーティーが終わった後に、ね」

「う、嘘だ！ 嘘をついているな！ 私を動揺させようとしても無駄だぞ!!」

「ねえクリフ。昨日の夜ダンスの誘いに乗ってくれてありがとうね」

「え？ あ、いえ。その程度のことなら別に……」

「うあ……そ、そうだ！ パーティーの後などルール違反だろう！ よって無効だ!!」

「あら。誰が一言でも『このパーティーで』とか言ったかしら?」

「しよ、証拠は……」

「内容決めた時の録画あるけど、見る?」

「うぐぐ……!!」

「勝利目前まで行ったのに浮かれて勝負忘れて負けたとか恥ずかしくないのかしら！ 私なら恥ずかしくて部屋に引きこもるわね!!」

「あがががが……!!!!」

呆然としている間に、いつの間にか攻守が入れ替わっていた。反撃を入れられて満足したのか姫様は嬉々として胸を張っていた。

「スッキリしたわ……まるで新年に家具を一新したような気分ね」

「あの姫様、決闘なんていつの間に終わらせたんですか?」

「え？ ああ。言っただけだった。昨日終わったわよ。勿論、私の勝ちでね!」

「お、おめでとうございます。流石ですね」

俺が知り得ない間に2回戦が終わってた事に景品の立場として少し複雑だが、姫様が勝ってくれてよかった。これで最終戦にもつれ込んだわけだ。

「それで、一体何の勝負を？」

「ダンス勝負よ」

「……ダンス？」

「ただのダンスの勝負じゃないわよ？ クリフをダンスに誘って、先に一緒に踊った方が勝ちの勝負よ」

「なるほど」

通りで急に踊りに誘ったり、踊った後舞い上がるほど喜んでたのか。納得した。

魔王がパーティーでダンスを猛プッシュしてたのもそれだったんだろう。危なかった、あのままパーティーが続いていれば踊っていたかもしれない。

「ふう……スツキリしたら頭回ってきたわ。冷静に考えて王族を闇市になんて連れて行けないわよね。行ってもクリフの仕事の邪魔になっちゃうし。仕方ないから今回は見送る事にするわ」

「ご理解いただきありがとうございます」

魔王に反撃を喰らわせる事ができて冷静になってくれたようだ。

良かった、これでようやく仕事に行けそうだ。

「その代わり、今度一緒にお出かけしなさいよね！」

「スウー……わかり、ました……」

仕事が派生して仕事が生まれてしまった。どうして仕事は生まれるんだろう。不思議だなあ。ふふ、なんだろう。今猛烈に貴族と関わりのない仕事に転職したくなってきた。

休暇がゴリゴリと削れる音がするが、姫様の気が変わらない内に出よう……

「おい、そんな隅でしゃがみ込んでないで行くぞ」

「どうして油断してしまったんだ……」

「おい」

「幸せな結婚生活が……掴んだはずのウイニングバージンロードが



……」

「……………」

……説得するのも面倒だ、引きずって行くか。その内気を取り直す  
だろ。



闇市は必要に応じてできた市場だ。

表の市場の使用料を払えない人、表の市場から追い出された者、表  
の市場に置けない物を売りたい人。色んな理由で表の市場では活動  
できない人がこぞって集まるアンダーグラウンド。

そんなわけで当然治安が悪い。騎士団や警邏の巡回ルートから外  
れてたり、滅多に來ない薄暗い場所で開かれている。闇市の取り締ま  
り強化の声が上がるのも頷ける。

「天気がいいからか人が多いな」

だが闇市は人気がある。

表より安い物があつたり、掘り出し物、珍品に世間の目には憚られ  
る物。——果てには、違法品なんて扱う所もある。

そう、今回の調査はまさにそれ。

違法品の調査と摘発。特に魔法増強薬の出所を探る為に來た。

金の動きが怪しいと副財務大臣も言っていたが、恐らく闇市の需要  
が高まつてるのだろう。魔法増強薬が出回ってるなら納得だ。

こうしちゃいられない！ さあ、気合を入れて王都を守るために立  
ちあがるんだ!!

「ちよつと横にさせてくれ……」

「立てよ」

「いや、本当にムリ……」

無気力にベンチに横たわる魔王。

2回戦が自分の慢心で負けた事にかなりショックだったのか、闇市  
手前の広場まで引きずって來てもこの調子だ。

このまま放置して行くこうにも、いつの間にか手首を握られていた。

そのため、この重し『ミシツ…』見た目もフィジカルもパワーも良すぎる魔王様を放って闇市には行けない。

「はあ、闇市はただでさえ店が多くて時間かかるというのに……露店回り切れるか？」

ただでさえ姫様の説得で時間を食ってしまい、時刻はすでに昼頃。予定はすでに破綻している。

そろそろ仕事に取り掛からないと、後日に仕切り直しになってしまふ。それだけは避けたいが……

「露店、だと……」

「ん？」

「今日の仕事は、露店を見て回るのか……？」

「あ、ああ。闇市の調査だからな。当然見て回るが……」

のそりと起き上がった魔王は、ギリリとした視線を俺に向ける。

「つ、つまり……つまりこれって……」

ガツと肩を掴まれる。

魔王の頬に赤みが出ており、呼吸もわずかに荒い。目もどこか血走っている。

「露店デートという事だな!!」

「仕事だ」

「さあ行こう早く行こう今すぐ行こう!! デート、楽しみだな!」

「仕事だ」

「ふふ、デート♪デート♪」

「仕事だあばばばば」

魔王は浮かれたようにスキップをしながら闇市に入っていく。手首を掴まれている俺は引きずられるように後を追うしかできなかった。

仕事、できるだろうか……